

044

044-H58ウ

カール・



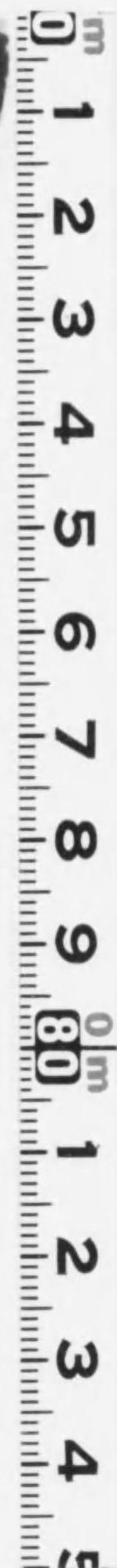
1200500724289

讀書・演説・教養

佐久間政一 譯

東京

文修堂刊
資社 合會



始



044
H58



カール・ヒルティ著

讀書・演説・教養

佐久間政一譯

東京

資社
合會



養尊・儲蓄・善蓄



譯者序

本書は瑞西の碩學カール・ヒルティ (Carl Hilty) 著の單行本「讀書と演説」(Lesen und Reden 1911 Leipzig, J. C. Hinrichs'sche Buchhandlung) 及び「幸福論」(Glück 1904 Leipzig, J. C. Hinrichs'sche Buchhandlung) 第二卷第四章「教養とは何ぞや」(Was ist Bildung?) を邦譯して一卷としたものである。

原著者ドクトル・カール・ヒルティに就いては、我邦でも既に數冊の譯書も出來て居り、其著は高等學校・大學豫科等に於て、古くから讀誦されて居たのである。その人となりも、可成り廣い範圍に知られ、その思想も大方の讀書子には、相當に理解されて居ると思ふから、こゝに絮説する必要もないやうであるが、始めてこの碩學の文章に接する方々のために、簡單にその傳を紹介して置きたい。但しこの紹介はハ

インリヒ・ローツキイ (Heinrich Lotzky) 氏のカール・ヒルティ (傳) に憑るものなることを、豫めお断りする。

カール・ヒルティは千八百三十三年二月二十八日、瑞西のザンクト・ガレン州の小市ヴェルデンベルクで生れた。ヒルティ家は獨逸系である。父ウルリヒ・ヒルティは醫を業とし、快活なる紳士、母はエリーザベト・キリアス、多才にして敬虔なる婦人であつた。カール・ヒルティの音楽趣味や詩才、または信仰上に於ける神秘的傾向は、この母から遺傳せるものと云はれる。彼は六歳にして小學校に入り、十一歳にして州立學校に入學した。此時代から既にヒルティは異常なる勉強家であつた。千八百五十一年彼はアビトゥリエントテンエクサーメン(高等學校卒業試験)を通過して獨逸に出でゲティンゲン大學に籍を置いた、居ること三學期、羅馬法を學び歴史と哲學とを聽講した。哲學方面では彼は當時盛んに行はれたヘーゲルになづむことなく、カント哲學で彼れの思惟を練つた。彼は勿論カント哲學を、全く過誤なきものとは

考へなかつたが、それでも「純粹理性批判」こそは、唯一の眞に基礎的な哲學書であり、一般に最良で最も博學で又最も根本的なものであると見做した。これに就いては本書「讀書論」を参照されたい。

千八百五十二年八月彼はハイデルベルヒ大學に轉じ、千八百五十四年四月學を卒へて兩法學博士 (Dr. Jur. utr.) (宗律法及羅馬法の兩方のドクトルの義)の稱號を得た。つゞいて彼は倫敦・巴里に遊學し、若干の講義を聽く側に、或は圖書館・記録所を訪れ、或は語學を實地に習得し、或は異邦の習俗の觀察に努めた。

千八百五十五年彼は歸國して、クール (Culm) 市で辯護士を開業し、千八百七十三年まで、即ち前後十八年間この職に居た。蓋し彼の意圖するところは、正を不正に對し正直を不正直に對して擁護することであつて、彼は此職の課題をこゝに認めたのである。彼は曰ふ「今日すべての境遇に於て、正義は以前よりもより多く索められて居る。そしてその爲には、正しい考を持つて法律家の相當な數が必要である。」

と。又曰ふ「一國の道德の一般標準は、その國の法律家の多數者のその時々（道德的）水平面（の高低）で甚良く測定される」と。

千八百五十七年ヒルティはヨハナ・ゲルトネル (Johanna Gaertner) と結婚した。ヨハナはポンの國法學教授グスターフ・ゲルトネルを父とし、有名な普魯西の法律家・樞密顧問官ジューモンを祖父とした、彼女は愛情に富める多才にして敬虔なる婦人であつた。ヒルティは彼女を敬愛し、また尊重した。彼はこの夫人によつて婦人の美德の如何なるものであるかを體驗し、女性に對する理解と尊敬とを得るに至つた。ヨハナは彼と生活を共にすること實に四十年、千八百九十七年に長逝した。彼自身の死に先立つこと十二年である。ヒルティの哀惜は深いものであつたらう。彼は曰ふ「若し彼岸の世界があるなら、私は、私がこの世で所有して居た婦人より以外に、私がこの世で知つていづれの別な人にも、絶対に且つ切實に再會したい人はない。これこそ、彼女が私自身の最良なる存在の一部を構成して居た事の證據で、

彼女の歿後、私の存在は最早全く完全ではない」と。

瑞西の習慣に従つて、ヒルティもまた籍を軍部に置き、終生そこで働いて居た。この方面の彼れの經歷は千八百五十六年に始まり、初めは歩兵將校として、かねて判士の役を勤めたが、累次昇進して、千八百九十二年には瑞西軍隊の最高判事となつた。彼の慎重なる思慮と良心的な勤勉とは、すべての軍法官たちの欣仰し尊敬するところとなつた。

千八百七十三年ヒルティは瑞西最大の大學たるベルン大學の正教授に聘せられ、瑞西聯邦の國法學を講ずることとなつた。彼が辯護士として、又陸軍司法官としての劇務の傍、孜孜汲々として倦まず弛まざる研學の結果が、世に知られて來たのである。その後彼は當時高貴なる國法學者として又愛國者として尊敬されたるザルテル・ムンツィンゲル教授の後繼者として一般國法學を講じ、又國際法をも教へた。大學の使命に就いて彼は考へる。一國の大學なるものは、諸科學の火が、その

日その日の風向に迷はされず、常にそこに維持せらるゝ竈でなければならず、また平靜なる炎を以て燃えつゞけつゝ、單に向上の努力をなす青年の心のみならず、一切の人々の心情を暖め且つ照らす光でなければならぬと。彼は曰ふ「單なる一切の學藝技術は他の場所でも習得されるであらう」と。大學の課題は、その聽講者たちに眞個に普遍的なる教養を與へ、時代の全教養と精神的接觸を保たしめることにある。然しかやうな事は、普通の専門講義では最早考へ得ざることだと彼は云ふ。即ち彼はその該博なる蘊蓄と、深遠なる教養とを提げて一個の大學教授から、一代の指導者、一世の木鐸たらんと志したのである。彼にあつては大學教授の職と、廣義に於ける教育者の任とは、實に不可分離の關係に立つものであつた。彼が後年瑞西の聖者と呼ばれ、現代の豫言者となゝえられたのも、彼にこの種の決心があつたからである。

千八百九十年ヒルティは、故郷の選舉區から選ばれて、立法議員・代議士とな

つた。議會に於ては、彼は敵味方の大なる尊敬を受けた。偉大なる理念を鼓吹し、主張するけれど、其實行と、これによつて受ける名譽とは、之を他人に委して顧みなかつたのが、彼の態度であつた。

海牙の永久仲裁裁判所の創設後、ヒルティは國際法の權威として、この法廷に聘せられた。この會議に就いては、彼はその歿する一寸前に云つた。これはあまりにも大きく、夫故に餘りに遲鈍であり、あまりに仕事が緩慢である。「平和はまづ平和心ある。そして平和の能力ある多くの個々人のうちに生じなければならぬ。かくして後それは漸次に、諸國民間に成立するもので、それ以前には確かに成立しない」と。

彼はゲンフ大學創立三百年祭に際して、名譽博士を贈られた。千九百九年の夏、彼はゲンフ湖畔のクラールレンスに遊んで、風光と讀書とを樂んで居たが、十月十二日、午前の散策から旅館に歸つて、聊かの不快を覺え、寢床に横はつたが、其儘長

逝した。死因は單に心臟麻痺と傳へられる。まさにこれ賢哲の最後であり、聖者の大往生である。(譯者はこゝで、フランクフルトの老哲人ショーベンハウエルの靜かなる死を憶ひ起す。) 現職は依然ベルン大學教授で、即ち彼れの屢々口にしたる「仕事のうちに死する」(In den Sien sterben) ことの實證であり、モゼスがアセルを祝福せる「汝の日の續く限りは、汝の力も續かん」と云つた言葉の實現である。彼はベルンに送られ、同月十五日、彼れの最愛の夫人の傍に葬られた。

ヒルティが其専門とする國法學・國際法に於て、及びその史學に於て、一代の權威たることは云ふまでもないが、然し彼れの名聲を世界的ならしめたものは、周知の如く、その宗教的倫理的著作である。この方面に於ける彼れの主著とも云ふべき「幸福論」三卷は、十八年間に三十萬部を賣り盡し、其翻譯は大抵部分的ながら、佛英和蘭丁抹洪牙の諸國語であらはれ、我邦に於ても——譯者の寡聞を以てしてすら

——既に二種の譯書を見た(全譯が出たかど。うかは知らず。)。其他に本書所掲の「讀書と演説」(これは彼れ歴とを知るに好個の材料である)、「神經衰弱に就いて」(九八)、「禮讓に就いて」(九八)、「眠られぬ夜のために」(一九)、「書簡」(一九)、「新書簡」(一九)、「病める魂」(一九)、「久遠の生活」(一九)、「力の秘密」(一九)、等の著作があり、その或ものは既に邦語にも譯された筈である。

ヒルティの人生觀は徹頭徹尾基督徒の信仰に基つく。この故に基督教の立場よりしなければ、彼を完全に理解する事は出来ないであらう。彼は斷乎たる新教徒で、カルヴァン側に傾ける色彩を持つと云はれて居るが、彼自身としては一切の宗派を超越しようとする努力する。彼は舊教に對しても、眞に基督教的なるものには、深い理解と承認とを有し、眞正の猶太教に對しては、之を尊敬すべき一宗教なりと聲明するを憚らない。彼はまことの基督教と偽りの基督教とを區別するが、謂ふところの

眞まことの基督教とは、基督の基督教と同義であり、このものの内的性質は最も良く約翰福音書にあらはれ、特にその第三章に明かに示されて居るとする。彼の信仰には、神秘的傾向と敬虔派的色彩とが混同して居ると云はれるが、これらに對する彼れの態度は、本書讀過のうちに、自ら理解されるであらう。教會に對し、神學に對する彼の態度も、本書の與へる印象に任せて、こゝでは總説を省く。ローツキイ氏は結論して云ふ。「たゞ彼の深き教養と胸廣き愛とのみが、彼をそのより明瞭なる一面性と偏狹とに對して擁護して居る。彼の基督教のみでは、さうは出来なかつたであらう」と。至言である。

終りに本譯書に就いて述べると、譯者は原書の本文は悉く之を譯したつもりである。たゞ一二箇所あまりに専門的で、譯者の知れる限りの獨逸人に就いて訊ねても解答を得がたかりし表現は、止むを得ず省略した。他に方法がないからである。註

は原著者がいつも力を注ぐところであり、彼れの著書の顯著なる特徴をなす所以のものであるから、出來得るだけ採譯したが、宗教・宗派の事情に餘り深く立ち入つたもの、餘りに専門的なる事項、瑞西國內の事件にのみ關して、われらには全的に無關係なるもの、またはあまりに繁多なる類例の如きは、或は之を省き或は之を短縮した。但しこのために原著者に、禮を失する程度にはなつて居ないと思ふ。また書中の固有名詞、難解の表現等には私註を加へた。あらずもがなの感のあるものがあるかも知れない。

原著者の博覽多識なる・所説の引證を古今内外の著者に求め、しかもその引用文は悉く原語を以てする。この爲、譯者は屢々先進辱知の諸賢を煩はして清教を乞はなければならなかつた。この意味及び其他の意味に於て、多大の助力を惜まれざりし小池秋草氏、宮野景一氏、宮原晃一郎氏及び其他の方々に、甚大の感謝を致すも

讀書・演説・教養
のである。

昭和十八年十一月十九日

一一

南總姉ヶ崎に於て
譯者誌

目次

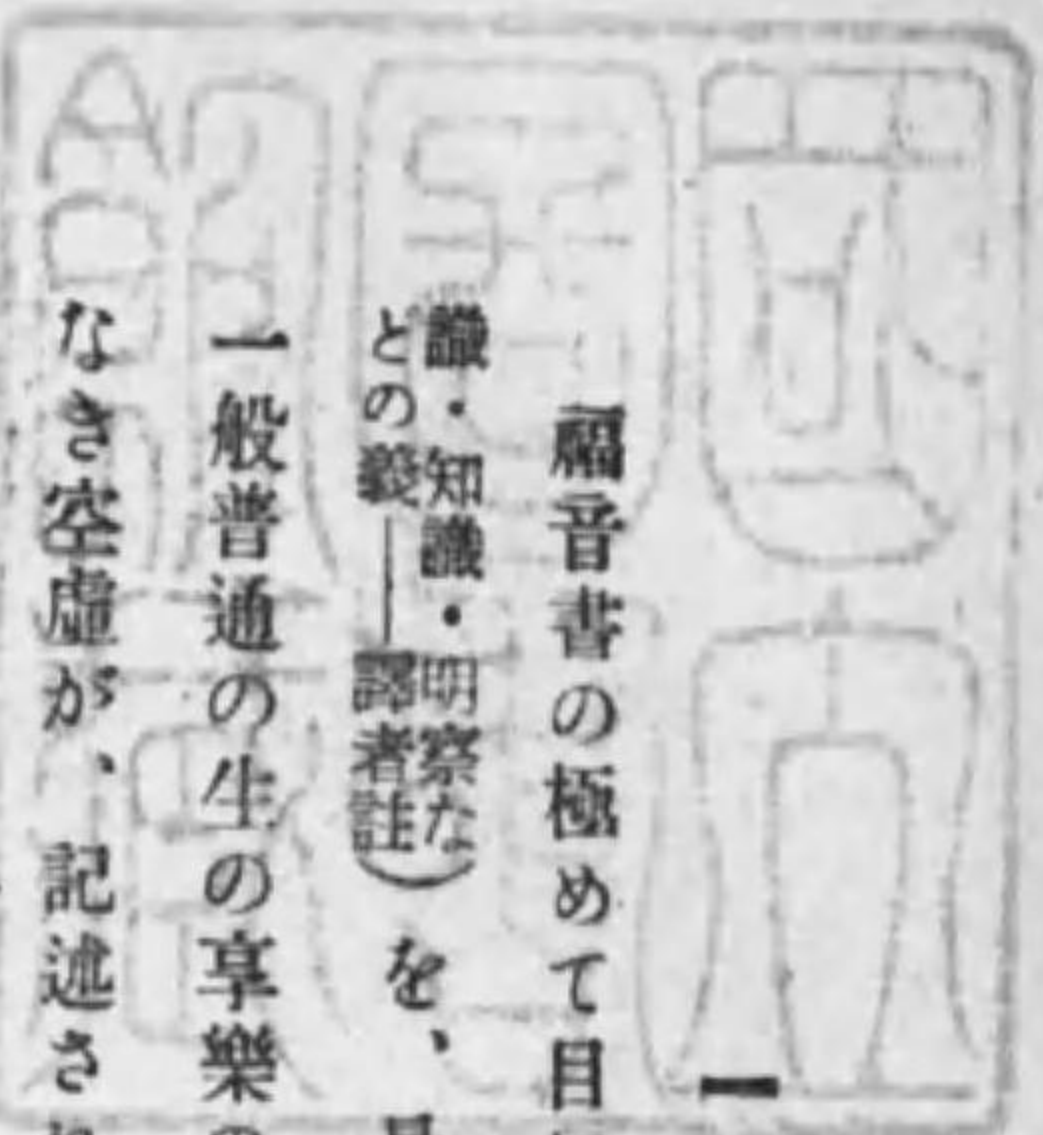
譯者序	一
讀書論	一〇
演説論	一五
教養論	一七

附 言

讀書論第一章は、聖書及び基督教に関する書籍に就いて述べて居り、可成り専門的なるものである。従つて普通の讀者には餘り必要でないやうに思はれる。この故に譯者は、當初之を割愛するつもりであつた。然し翻つて思ふに、この種の著述及びそれらの評價については、譯者の寡聞を以てすると、わが邦には書かれたものがほとんど無いやうに思はれる。これはこの方面に於ける一つの缺陷でなければならぬ。勿論原著者の與ぐる良書とても、容易に入手し難いであらうし、特に現時に於ては全く絶望であらう。然し前途の缺陷をいくらか補ふ爲には、これらの著述に關して、本文程度の知識を傳へることが、無益であるとは決して云へぬ。この意味に於て、譯者は當初の意圖を變じて、第二章をも本書に譯載することとした。基督教に特殊の關心を有せざる諸彦は、此章を省いて一向差支へないのである。

第一章 讀書論

〔註〕 原著者の註に依ると、本論はもと或青年會の懇請により、「讀書に就いて」と云ふ題下で試みられたる一講演であつた。それ故に本論は主として、より眞面目なる人生觀への好愛を有するより若き人たちに適して居ると、著者自身云つてゐる。この講演は後になつて、本書所載の「演説論」と共に、一小冊子となり、獨逸で刊行された。——なほ原著者は、この論文と、シヨールペンハウエルの「讀書と會話」(拙譯「ヨールペンハウエル論文」)とを比較せられよと云つて居る。——譯者註
集(春秋社版)所載)とを比較せられよと云つて居る。——譯者註



福音書の極めて目に着く個所の一つに、——この個所は福音書の人間知識(人間性についての知識・明察な)を、最も明瞭に證明するものであるが、——心が、既に踏んで来た一般普通の生の享樂の道を棄てた後に、まづその前に擴がるやうに見える・やるせなき空虚が、記述されて居る。

〔註〕 馬太傳第十二章四十三節。路加傳第十一章二十四節參照——原著者註。

人間が或より、良き生活時期へのいづれの移り行きに當つても爲す極めて普通なる經驗の一つは、一般に、此移り行きへの決心と移り行きそれ自身の方ではなくて、決心の當初の熱が過ぎ去り、事柄が往々眞に冷靜なる觀を呈して來ると、新に採られた道を固持して動かざる事の方が、最大の困難を提供するといふ事實である。人間の心が最早その激情によつて昂奮裡に保たれる事がなくなると、心の獨自的な運動能力のこの當初の缺乏が、あらゆる始まり行く宗教組合の絶えざる交通と、あ

まりにも家族的なる結合とに——かゝる結合はこれよりも遙かに大規模な・世界征服的な基督教の考へのうちにはなく、これはまた實際、使徒行傳がわれらに物語るところに依ると、迫害と分散との効力手段によつて廢棄されなければならなかつたのである、——あづかつて働いたことは疑もない。

〔註〕使徒行傳第二章四十二節、第八章一節、第八章四節參照——原著者註。——これらの箇所には、使徒たちが、使徒らの教を受け、交際をなした事、エルサレムの教會に對して、大なる迫害が起り、使徒たちの外は、エデヤ及びサマリヤの地方に分散させられた事などが、記されて居る。——譯者註——エルサレムの最初の基督教會は、どの點から見ても、基督教の理想ではない。——原著者註

各個人の完全なる精神的獨立と、特に新教の力と自己意識とが之に基づく個人的にして絶えず進歩する自己完成の可能性とは、印刷術の發明と、それ以來、より一般的になつた讀書とによつて、眞に初めて成立したのである。讀書は、古代及中世の文化にとつては縁遠きものであつた。この發明がなければ、十六世紀の宗教改革は、——この歴史的地盤の上に、單に新教徒ばかりではなく、われらすべてが目

下立つて居るのであるが、——考へ得ざるものであつたらう。そして原初的基督教は恐らく漸次に、歴史的に知られぬものとなつたであらう。

さて然し、いづれの進歩も、たとへ最大の進歩ですら、その弊を伴ふと云ふ考、また既にアリストテレスによつてあのやうに高く賞讃されたる・凡べての事に於ける——一見全く良い事に於てすらも——限度が、人間的完全の本質を成すといふ甚だ平凡な考よりも、もつと眞實なる何物もないのである。しかもこの限度なるものは、外部からは學び得るものでもなく、又は第三者の器械的な激勵や制止などによつて發見されもしない。勿論かく激勵し或は制止することは、教育術の一部を成してはゐるが。人間はいつも、事物の自然のうちに存する限度と、事物に對して、人間自身のうちに存する受容力の限度とを、熟考と經驗とによつて漸次に確立すべく努めることにより、本當の主要教育を、自分自身でなすものである。そこで近代人の一切の教養手段中最大なるもの、即ち讀書に關しても、實際同一事情が存する

のである。われらは、善事及び最善事すらも、無限度への明白なる傾向を以て爲されるこの時代に於て、讀書に關する諸條件を、こゝに説明しようと思ふのである。

それ故われらが、近代教養のこの最も重要な手段(書讀)に關する若干の經驗的結果を自ら明らかにしようと思つて企てるならば、この場合眞面目に考察されるのは、實際たゞ三個の全く簡單なる・云はば自明の規則に過ぎない。これらの規則は然し勿論個々に色々な敷衍を許すもので、また一切の本當の眞理の如く、徹底して使用するよりも、之を口にする方がより容易である。曰はく(一)人は多量に、且つ規則正しく讀まねばならぬ。人はすべての良きものを讀まうと決心しなければならぬ。(二)之に反して劣悪なるもの、または全く餘計なものは、一切讀んではならぬ。(三)人は良きものを、全く自家藥籠中のものになすために、之を正しく讀まねばならぬ。それからこれにはなほ、讀方の形式と、特に讀まるるに價する書物それ自身に關す

る或事項とが結びつく。

(一)まづ第一に個人的處世に缺くべからざる知識を、わがものとする爲に、人は多量に讀まねばならぬ。次には然し、單に自分の時代ばかりでなく、また過去の時代の人間生活及び人間思惟全部に就いての正しい概観を得るために、同様に多量に讀まなければならぬ。これのみが、今日なほ一般教養と名づけられ得るものである。單なる専門家、否往々専門學者にして、その以外では然し教養なき多くの人物を、また彼等の時代の一般的教養要素の甚だ狹隘な部分しか、自己のうちに消化しなかつたと云ふ意味で、半分しか教養のない・同様に多くの人物を、現代は眞に充分に知つて居る。かくて彼等は通常、自分たちが甚多くの勞力を以て征服し、今や之を各人に對して軌範的のものになさうと期待せる・自らのこの小さい視野に對して、愈狂熱的且つ一面的に捉はれて居るのである。

〔註〕今日の時代に於て、人を狂熱的ならしめる・かやうな半教養によつて一頭地を抜いて居るものは、個々の狭量なる宗派の外には、全く特別的に、通常の社會主義者、實證主義者及び自然主義者である。コントの『實證哲學講義』は、これに對する教科書である。——原著者註

之に反して彼等の時代及一切の時代の全教養に對する見解と理解とを有し、而して正にこの事によりてのみ、自己の精神生活に對し、また自己の課題と嗜好とに對して正しい尺度を自己のうちに抱懐する底の本當に一般的教養ある人々は、われらに愈多く缺乏するのである。

かゝる人物こそ、維持ではなくて、破壊を目ざせるわれらの時代の如き時に於ても、動搖のたゞ中に泰然として立ち、當來の國家並びに生活の建設の核子を作る要素を、自らの周圍に、漸次にまたも結晶せしむる眞個に（一世を）維持する人たちである。

〔註〕因にこれは、われらが決して思ひちがへしよとは思はぬ事であるが、すべての人間の生の課題ではない。却つて、餘計なこと・古くなつたことを取り除くには、一面的な資質の人が必要である。あま

りに一般的な教養は、それが或程度の強い義務感と結び附いて居ないと、甚だ容易く、人をピラトウスPlato（羅馬の代官となり、基督を）の疑問（即ち眞理とは何ぞや）に導くものだといふ事が、一般にかゝる教養の岩盤である。かゝる疑問は狂信より更にわるい。——原著者註

多讀は、その外にまたなほ、人がこれによつて、あらゆる時代の最良の人たちとの生涯の交際に入り得ると云ふ目的を持つて居る。

われらが、プラトローやツイーツェローPlatoer（ロッセ）或は使徒たち及び宗教改革者らと談話することが出来、或は加之われらの主（基督）の模倣しがたき程に深奥な言葉を、彼自身の口から聞くことが出来たら、いかなる幸福ぞとわれらに思はれるだらう！それでも然し、われらは恐らく彼等の本質と彼等の表現法とに於ける幾多の事を、正しく理解し得ないであらう。基督の言葉のうちで、われらに保存されて居る僅少の言語も、われらにはいさゝか奇異の感じを與へるではないか。

〔註〕馬加傳第五章四十一節、第十五章三十四節參照——原著者註。——基督の用ひたる言葉は、古代パレストアイン北東の國アラミアの言語であつた。そこで馬加傳五の四十一には、「タリタ・クミ」(Thalia kumi)

と基督が幼女に向つて云つたが、それは「少女よ、われ汝に云ふ、起きよ」の意だとある。——又同傳十五の三十四には「九時(盧利)にイエスが大聲で、「エリ・エリ・ラマ・アサブタニ」(Eli, Eli, lama sabachthani?)と云つたが、これは「わが神、わが神、なんぞわれを見棄て給ひし？」の義だとある。——譯者註

そして、われらのうちの何人も、基督が本來獨逸語では話さず、またわれらが彼に關して知れる一切の事は、まづ口傳により、次に二重の翻譯(まづ希臘語に、次に羅語に譯されたる事を指す。譯者註)によつて、即ち二つの全く特色ある・そしてわれらの民族精神とは、全然似もつかぬ民族精神を通過して、——この通過はまた實際その明瞭なる痕跡をとめて居るが——われらに到達したものであることを、いつも思ひ浮べないのである。

またわれらは、われらを畏敬の念で充せる人物たちと適當に交際し、そして彼等の言を、その正しい効果に必要な(その言が正しい効果を得るために必要な義——譯者註)・平靜なる態度に於て、また之に適合せる落ち着いた氣分と、之に缺くべからざる自己活動とを以て、自己のうちに受け容れる勇氣を、決して必らずしも常に發見しないであらう。

そこで讀書は、之にはよりよく適當して居る。讀書にあたつては、われらは自己

の願ふ通り、氣分通りに、われらの交友を、あらゆる世紀とあらゆる大陸とから選び、また之を取りかへ、われらの好む時と方法とで、彼等を一人でも多人數を同時にでも、われらのもとに迎へ、われらが適當と思ふ間、彼等の言を聴き、而して彼等の言葉の各を、われらが次の言葉を彼等の唇から取り出す前に(次の言葉を讀む前に、の義——譯者註)、ゆつくりと熟考することが出来る。これは同時代に生ける人々との直き直きの交際に於てすら、決して可能ならぬ事である。

〔註〕 聰明にして博學なる甚だ多くの人々の對話が、書物ほど、面白くは決してない事は姑らく措く。——「良書は(現在の)生活を越えたる或(未來の)生活のために保存され・貯蔵されたる偉人の貴重なる生血(生氣を人の精神に與ふるもの)の義——譯者註」である。(ミルトン)——原著者註

大抵の良書は、今日非常に廉價であるから、各人に開かれたる最善の娛樂のかやうな可能性があるにも拘らず、なほ生に於て一時間も退屈し、或は無意味な・そして愚にもつかぬ擧散を搜すのには、本來的にその人が、愚鈍であるか或は墮落せる人物であるかなることを要する。

(二)理論ではほとんど自明なる此點よりも、もつと困難なのは、世上の一切の良書を、自分で讀まうと決心せねばならぬと云ふ第二の要求の方であるやうに見える。それでも然し、普通の壽命の間に、甚だ大なる博讀をなす事は、若干の至極簡單なる前提の下に、實行され得べきであり、また決して甚だ大なる技術でもないのである。

第一の前提は、若年のうちに、規則正しく讀むこと、即ち例外なしに、毎日に一定の時間のあひだ讀書する習慣をつけることである、これはほんの半時間でもよく、又かゝる時間は、何人でもあまし得るものである。これをたゞの二十年間もつゞける人は、この年月の過ぎたあとでは、既に彼れの國土の最も博學なる人々の一人であるであらう。そして一旦これに慣れた人は、通常の人が、彼等の日々の氣晴らしを求める凡べての事より大なる部分が與へるのは、全くちがつた樂しみをこのうちに發見するのである。自己教育は一般にさうであるが、こゝでも習慣が重きを

なすのである。

第二の前提は、何等無益なるものを讀まぬ事である。これこそは、讀書に際しての主要事項ですらある。何となれば、われらがすでに餘りにも甚しく慣れたる無益の讀書のうちには、今や讀物としてわれらの所謂文化民族の間に割り込み蔓ひたひたこれらのものの甚だ多くが屬するからである。まづ第一に各新聞紙の一部分は、例外なく之に屬するのであつて、この部分は躊躇なく省略され得る。

〔註〕省略され得べき部分は、各讀者にとつて、同一ではない。多數の讀者に對して、多くの事柄及び種々なる事柄を提供するのは、日刊新聞の務である。それでもまた他方に於ては、彼等の讀者の趣味を適當に(讀材を)與へることとは多く省略する事によつて漸次に陶冶するのは、彼等にふさはしからぬ事とは云へない。——原著者註

その次に來るのは、凡べての輸入雜誌の大部分と、一切の長篇・短篇の小説の極めて大なる部分とである。近代の敘情詩は、さなきだに適合せざる現代に於ては、大に減少したであらうが、若しさうでないとしたら、このものをもわれらは恐らく

算入してよからう。

歴史的に見るとかやうな強度な文學的分除は、決して珍らしい事ではない。ショールペンハウエルの云ふ如く、各の文學上の時代は、それが開始してから約三十年で、この方向に於ける完全なる行き過ぎと、生産過剰との爲に破産するものである。われらは今やかゝる時代の——即ち博物學的・唯物論的時代の最終の十年中の最後の部分に居る。而してこの時代が、詩にもまた影響し、或部分まで詩を滅ぼしたのである。今日既にこの方向に屬せず・また彼等の制作を最早讀むを好まざる人が幾千と居る。然しこれらの人たちは、其爲に一切の讀書を棄てるやうなことなく、再び、或より良きものを選び出し、後になつては、自分でもまた之を制作するところまで進まねばならぬ。

〔註〕 かゝる人々が良書を棄めるにあたりてのたよりなきは、しかし目下甚しく大きい。彼等は折々、最も廣く弘布して居る良書を知らないのである。——原著者註

然しまた、當然の事として、古典的と目される文學に於てすら、その書中に「良きホメール」が眠つて居る一群がある。他の言葉で云ふと、古典的と云はれるものが、すべて古典的だとは決して云はれないのである。

〔註〕 例へば、甚だよく知られたる例を引くと、ゲエテのものでは、『ヴィルヘルム・マイスタア』の後の部分、彼れの傳記の最後の部分、小さい詩や格言の多く、『庶出の娘』『イエーリとベルテリ』その他である。これらは讀む勞に酬むない。プラトリーの『共和國』は、眞實を云ふなら、退屈な書物である。使徒パウロの書翰からすらも、二三のものは、われらにとつて大なる損害なしに、失なつてよいものである。例へばコリント人への前書第十一章の毛髮に關する第一節の如きである。——原著者註

だから人は、承認されたるものすら、選擇して、第一回目は少し速かに讀む事、また大なる・部厚の書物をもすぐに恐れない事の習慣をつけるがよい。かやうな書籍のうちには、全然役に立たない・或は恐らく或一定の専門に於ける本當の學者たちのみを對境とする多くの而して有名な書物があり、また別に、澤山の扱殻のうちには、ほんの僅かな穀粒しか含んで居ない書物もある。後者へは哲學及び神學の空間的

により、大なる部分を、安堵して算入してよろしいのである。

〔註〕 マールブランシュ(Marblanché) 佛國の哲人、一六三八—一七一五(譯者註)は、之について、いくらか餘りに一般的な而してあまりに惡意的な言をなして居る。曰はく「學者は自分の精神に、より強い力と、より廣い幅とを與へんがためよりも、寧ろ他人の想像の裡に、架空的な壯大さを獲んがために研鑽する。」然しこの言のうち、次の事だけは眞實である。即ち事實彼の云ふ通りな場合には、これによつて欺かれたり、感嘆させられしてはならず、別に他意なき場合には、直ちに之を單に形式的な博學として、認めねばならぬといふ事がそれである。——原著者註

之に反して、その他の有名なる書物にあつては、一部分は一般的に讀まるべきもので、他の部分は之に反する。

更に原則として、如何なる惡いものも讀んではならぬ。惡の「研究」によつて、人間の裡に、良い精神が漸次に死んで行く。善惡を知るの樹は、その果を食ふべからずと云ふ禁令は甚だ根據あるものである。

〔註〕 創世記第二章十七節參照。——單に感性的なるものすら既に、空想を毀損する。而して讀物中の不健全なるものは、人々が信ずるよりも、より多く人間の健康に影響する。多くの「神經病」——特に生長しつゝある青年のこの疾患は、たゞ不健全なる讀書より來るものである。この方面に於て、自ら罪過

を犯したる或近代の著述家は、よりよき見解の瞬間に、これについて云つた。「内的に不健全なる人間は、他人の元氣を喪失せしむる雰圍氣を持つてゐる。人が健全であればあるほど、愈多くこの雰圍氣を或有毒なものやうに、或は室内の悪空氣のやうに感ずる」と。彼等の著書についても、その通りである。それらは、肉體的及び精神的に毒することがあり得るのである。反對に良書は、「一つの實質ある世界で、この周圍にわれらの娛樂とわれらの幸福とが、肉と血との如く強い蔓を以て生長するであらう」(ダァーズダァース)。——原著者註

地上に於けるわれらの務めは、良き精神に或住居を與へ、われらが一旦自らの選擇に於て確乎となつた以上は、絶えず善と惡との間に彷徨せざる事である。惡い人間諸狀態の研究を偏愛することは、大抵はなほ心のうちに存在せるかゝる狀態への偏向を美化させんとする口實である。この事は人が、あらゆる確實さを以て、自身にあつても、他の人々にあつても、さうだと思つて差支へないのである。

更にまた、出來得るなら、書籍はその原語で讀まねばならぬ。全然良い翻譯はありはしない。或書物が精神に富めば富むほど、又獨立的であればあるほど、いよいよ翻譯しがたいものである。

〔註〕 幾多の國語は、またその全く翻譯され難い特殊の美を持つて居る。例へば、特に古典伊太利語はさうであつて、これは獨逸語の翻譯では、やゝもすると、過度に動情的であるやうに見える。同様に佛蘭西語の『エスプリ』は、獨逸語には翻譯されない。また獨逸の詩は佛蘭西語には翻譯しがたい。——
原著者註

すべての本當の専門書に關しては、たゞ一つの次の如き良規則があるのみである。それは「君に委ねられて居るものを固執せよ」と云ふ事である。何等君に關係なく、また君が全然根本的に習得しようとも欲せざる單なる専門事項は、出來得る丈け良い典據から、一度或明晰な觀念を得たまへ。そしてそれ以後は、安堵してこれを放つて置きたまへ。

〔註〕 例へば羅馬法については、ギボン(Gibbon)英國の史家、一七三七—一七九四の有名なる第四十四章が、非専門家にとつては、完全に充分である如きである。然しそれは最良の典據からの議論でなければならぬ。各の學術的専門に、通常の意味よりも、高い意味で、通俗的なかゝる種類の著述があるなら、それは甚だ有益であらう。この意味に於て通俗的に書くことは、然し學者風に書くよりも、より困難である。そしてこれは、單に材料蒐集を主とする博學以上に卓出せる人たちにのみ成功する。——
原著者註

さてこの強い制限と、前に要求されたる規則正しい讀書とを以てすれば、一切の眞に良きものを、自分で讀まうとする決意は、初めにさうであつた程に、無鐵砲には最早見えなくなるのである。

人が主として原著に依り、そして第三者たちがかゝる著述について書いたものをつつと少なく讀むなら、またいかなる場合でも、第三者たちの書いたものだけを讀むことをしないならば、それは讀書に於ける甚だ顯著なる輕減となるのである。例へば大抵の文學史は、原著を知らざる人にとつては、無價値である。また往々にして原著は、これらの記述よりもつと短かいといふ利益を、なほその上に持つてゐる。聖書は勿論のことだから云はないとして、われらはダンテ全體、又はゲーテ、カント、シヨールペンハウエルの全著作を、これらの著書の周圍に漸次に集まれる多くの或部分は全く敏眼的・或は眞ならざる而して餘計な説を讀み終る前に、十回も讀み終つて、それらの内容に精通することが出来る。加之、たゞこの場合にだけ、

書物に書いてあること、或は書いてないことに就いて確信を持つことが出来る。未熟な或はあまりに熱心な註釋者たちによつて各の名著の周圍に、いかなる妄説圈がつくられてゐるか、またいかに、かゝる書物に對する興味すらが、漸次に純然たる形式的或は個人的なる問題——これらの問題は、澤山のより小なる思想家を勞役せしめ、糊口せしむるものであるが、——の爲に消失するかは、信じ難い程である。最後に、われらはすべての人事に於けるやうに、讀書にもまた、終りを見つけ出し得ねばならぬ。例へば宗教方面で、一旦自分の疑義の氷解した教理的解釋と同一意義の解釋書を、何邊も讀むことは、全く無目的であるばかりではなく、只疑惑を喚び起すに止まる。また單なる所謂宗教書を讀むことも、懶惰或は何等のより眞面目なるものにも着手することを欲せざる宗教的享樂に外ならないのである。

〔註〕「(「ブル人に與ふる書」の筆者は、既に第六章一節及二節に於て、この事を云つてゐる(これは要するに過去の事や、教義の細目の研究などに徒らに拘泥せずして、或獨逸の諷刺家は附加して曰ふ。「許多の人々完全に向つて進めと説いたものである。——譯者註」)。は考へるには、あまりに怠惰なるが故に、たゞ讀むのだ」と。——原著者註

加之、聖書そのもの以外に、或倦怠を貽すことなくして、屢相續けて讀まれ得る宗教書は、非常に少ない。また他ならぬ。これらのより深い哲學的宗教的の事柄にあつては、人はまた思想が根を生じ、そして若干生長する時間を、之に許さなければならぬ。また日毎時毎に、それが既にどれほど生長したかを調べて見ようと思つてはならぬ。でないといふ人は、甚力弱い。そして第三者に隸屬する精神的生長に到達するだけである。

(三) 然し今や實に、「すべての良きものを正しく讀み、そしてこの正しく讀むことを、加之屢反覆すべし」と云ふ第三の主要求が、上に述べたすべての事に對して立つのである。

正しく讀むといふ事は、單に一個の重大にして、また稀なる技術であるばかりではなく、かうすれば、人は對象を一般に自家のものとなす爲に、反覆する必要がある

るのではなくて、たゞ之をなほより深く會得する爲にのみ、その必要があるのだから、大なる時間節約ともなる譯である。夫故に既にマルク・アウレル(Mark Aurelius)、ウァス・アントニヌス、哲人にして羅馬皇帝たりし人、百八十年に歿す。其著「瞑想録」の劈頭で、彼が感謝の念を以て、自らの教師たちに就いて談るところで云つてゐる。「ルステイクス(先生)は私に讀むものは精密に讀み、表面的な智識で満足せず、また皮相なる批判家たちが云ふ事に、すぐに賛同せざるように教えた」と。今日ではこの術は、可なり稀である。そしてわれらはまたこの術を、われらの學校では全然學ばない。そこでは凡べてが寧ろ、或試験には役に立つが、その後はそれ以上何ものにも役立たざる或ものを——しかも種々雑多なものを——甚だ手早く生半かに學へ込むやうに仕組まれて居るのである。のみならず今日でも、或書物を所有して居さへすれば、もうそれで充分だと思惟する人々が居る。彼等は之を讀む必要がないのである。「必要な場合には」いつも手許にあるからだといふのである。この所有は、一切の所有のうち、最も不

生産的なものである。

反對に然し私は確かに、かう信ずる、自分が本當に讀まうと思ふ本は、自ら所有しなければならぬと。借用の書籍或は圖書館の書籍からは、何事も根本的に學ぶことは出来ない。各種の貸本所はすべて、人々が只瞬間的の智識獲得のために、個々の點に就いて参考する如き、より大なる且つ比較的に高價なる著書や、より大きな専門文献一般にとつては、成程甚だ結構ではあるが、一般教養の爲に繰り返へして讀み、しかもまさに、之に對して好愛と氣分とが存在する時に讀まなければならぬ。又これを本當に友として親しまうと思ふ書籍は、自分で所有しなければならず、また所有し得るものである。これに對して拂はるる物質的犠牲は、あまりに大きなものではなく、それらのものを同化することのより大なる深遠さによつて、充分に償はれる。

〔註〕 私は少くとも、私自身の経験より、自分は圖書館の書籍からは比較的に少ししか、また私の内的生

命に對して決定的な事は少しも、學ばなかつたと云ひ得るだけである。特に、論なしに人類の不死の精神的遺産に屬する全く良き書物は、出來得るなら、自分で所有することを、われらは自らの義務と名譽とに算入しなければならぬ。それは丁度、自分の時代の最上の人物を、若しそれが同様に容易に出來得るなら、個人的に知り合ひになつた事を、自らの名譽に算へるであらうのと同じである。加之私には、かの不健全な・躁急な・過度なる讀物三昧は、——これは消化されず、またこれからは、一種の精神的肥大のみが生じて、精神の何等健全にして自然的なる生長も生じないのであるが、——主として貸本の讀者たちに發見されるやうに思はれる。圖書館や俱樂部の讀書室、または多くの新聞・雜誌を備へたるカフェーには、書物新聞雜誌等を順々にめぐつて行つて、丸半日も費すが、この丸半日の終りに、自分たちが實際どんなことをかやうなものから學んだかを述べることの出來ぬ種類の人々が、甚屢と發見される。彼等は恐らく、眞面目に勉強したと云ふ考ではあらうけれど。——私は一人の甚だ才氣に富めるまた高い教養を持つてゐる人物で、もとは新進の著述家及び詩人ですらあつたが、後年になつては、丸一日ちう前記のやうな場所へ、讀むより外には何事もしなかつた人を知つた。この人が、或時實驗された場合に、新聞の論説を書くことも出來なかつた。彼は正しく全然受容的(受身)になつてしまつたのである。

——原著者註

かくしてわれらはなほ、讀書の種々の形式といふ事に觸れて來る。讀んで聞かせる事、讀んでもらつて聞く事(身體上の必要なくして)は、あまり役には立たぬ。それは丁度、いつも講演を聽かうとする——これは今日の世界を捉へたる一妄見で

ある。——のと、丁度同じやうに缺陷を持つものである。この兩者は本質的には、單に娛樂に過ぎない。人々は通常、これらのものからは何事をも學ばないのである。それはたゞ或對象について、あとになつて考ふべき・又はあとになつて讀むべき刺戟を受けるだけであり、この刺戟はまた多くの人々にあつては、結果なくして終るものである。また上手に讀んで聞かせることは、滅多に出來るものではない。特に讀まるる事柄が、聽者にとつてよりも讀む人に興味のない場合はさうである。そして眞面目な事柄にあつては、既に第三者と一緒に居ることや、この人をつからせはしないか、又は退屈させはしまいかといふ絶えざる惱ましき副思念が邪魔をするのである。この場合には人は、最早自己の時間と自己の讀書慾との主人ではない。私としては夫故に、たやすく讀み聞かされ得る書物に對しては、常に或疑念を持つて居る。讀んで聞かせる事で、本當に聽者に満足を與へるなら、いかなる場合でも、其書に多くの深味はないものである。

人はむしろ孤獨で靜かに、又或思想が心を捉へる場合には、讀書を中絶したり、考察したりしながら讀まなければならぬ。この事は、他人に讀んで貰つて居る場合には、出來ないのである。蓋し讀書なるものは、畢竟するに、自己の思想に對する材料より以上の何物をも與ふべきものではないからで、若し讀書しても、自己の思想が生れないなら、それは聖書にある堅い地に落ち、或は多くの他の思想の——これは讀んでもらつてゐる間にも、全くよく生長し得るものである——荊棘や薊の間に落つる種子の如く、實を結ばずに終るのである。

〔註〕 種子についての比喩は、聖書の各所に見えて居る。例へば、馬太傳第十三章三節—九節、馬加傳第四章、路加傳第八章等参照——譯者註

更にまた自分で讀むにも、色々な都合よき方法がある。いづれの書にも、讀者を特に刺戟し或は教訓する部分或は個々の場所がある。これらのものを讀者は、何等かの方法で確保し、そして繰り返へして研究する事によつて、全然的に自家のもの

になすべく求めなければならぬ。この際に出來得るだけ安全にやつて行き、そして凡べてを記憶のみにはゆだねない爲に、若干の人々は所謂抜き書きをする。然しこれは面倒で且つ時間をとるといふ缺點と、及びいつもペンとインキ、或はノートと鉛筆と云ふ道具立て全部を、手許に持たなければならぬとなると、屢讀書への決心がより鈍くなるといふ缺點とを持つて居る。また抜き書きをすると、後になつては、あまりにも容易に、ノートが本そのものの代理をすること、略教會が許多の人たちに宗教の代理をするのに似通つて居る。かくして著者のもともとの精神については、いかなる痕跡もとゞまらざるやうになり、人々はあとではたゞ、自己の精神のその當時の瞬間的氣分によりて濾過せられたるスケッチを讀むだけの事となるのである。これとても人々が兎に角もう一度讀むといふ事を、前提とした上である。

〔註〕 ゲエテの『ファウスト』中の書生及びなほ多くの今日の學生の如く、『白紙の上に黒くして所有するものを、人は安心して家に携へ歸り得る』のではなくて、自分が精神的に把握し、自己のうちで消化して自己の肉となし、血となしたもののだけを、さうする事が出来るのである。自己の所有となるべきものは、

再。造。されなければならぬ。教養はたゞ讀書からのみ來るのではなくて、讀むことと、讀んだものに就いて思考することから來るのである。人々は加之、折々は讀んだものを、自分で摘要しなければならぬ。そしてその中で、何が有益で、何が無益であつたかについて、確信を得なければならぬ。——原著者註

多くの拔萃蒐集者は、或書物を「書き抜いて」仕舞つたと云ふ慰藉的な意識を以て、全く満足して居る。そしてその後は、書物をも書き抜きをも、決して見ないものである。

且又最上の書籍は、普通の文集のやうに、書き抜かれ得るものではない。後者にあつては、書き抜きはたしかに合目的々であり、折々はまた必要ですらある。然し前者では、各語がその價值を持つて居て、自らの僚友たちから引き離されることに抵抗する。著者の靈は、かゝることを試みる無禮者に對して復仇する。私はそれ故に自分としては、本文の左右又は天地に、覺え書を附し、急場では、或本の若干の頁を裂き取るやうにしてゐる。——一方その殘部は、現在のレーテ河希臘神話にある下界の河流の名、この水を飲むものは、今までの事を忘却すると云はれてゐる。——譯者註とも云ふべき・用意されたる紙屑籠のうちに沈むので

ある。このたしかに不敬虔なる取扱によつて、もとの分量の一小部分に切り詰められつゝも、その價值に於ては、非常に得るところのある著述が世に存在する。この時には讀者は、著者が當然なすべかりしことそのものをなすのである。

鉛筆を以て覺え書きを、書物のうちに書き込み、或は書物中で繰り返へして讀むに特に適せる個所に、印しるしをつけることは、更に簡單である。勿論かゝる書物は、使用後には最早新しいやうには見えない。しかし書物が自分のものなら、またその必要もないのである。この方法で、書物を二遍讀み終つたら、——即ち一回目は全部的にそしてすつと、二回目には詳しくまた恐らく部分的に讀んで仕舞つたら、——本來的に始めてその書を読み終つたと云へるのである。

多くの人は本を「摘讀」する、即ち處々で嗅いて見る癖がある。

〔註〕 それ故に書物の中で、凡べての副次的なこと、並びにすべての典據及び引用文が、註に入れられてあるなら、合目的である。かゝる場合には人は、これらの註を、第二回目に、即ち全配置が既に知れて後になつて初めて、ゆつくりと讀むのが最上である。そしてその時には、それらが本文のなかに、一

緒に書かれてある時よりも、ずつと大なる利益を以て讀まれるのである。幾多の書物は、その本文に重荷を負はせ過ぎることによつて、全く讀み難いものとなるのである。——原作者註

このやり方は、出版業者がひよつとしたら、人に贈りさうな。そして人はその頁を切つて見る必要もない所謂雜集の如きものにあつては、合目的であるが、讀者がそれに對して自ら立てた讀書目的を有する書物にあつては、然らずである。

かう云ふ場合、私は決して序言を讀まない。序言なるものは、大抵餘計なものであるか、或は本そのものが守らざる事を、甚だ屢約束する(序文の前編れにあるやうなことを)ものである。然し私はいつも第一章を讀む。こゝでは著者は、自分が何をなし得るか、又何をなさうと欲するかを示さざるを得ないのである。

然し私はまた、たゞ序文のみを、或はそれどころか目錄だけを讀み、夫故にかやうなものが附いて居ないと、ひどく苦情をいふ他の人々を知つて居る。これは彼等がこの場合には、その書を批評する——彼等にとつては、往々この事だけが肝要な

のである、——爲に、書物そのものを調べなければならぬからである。

更にまた、自分たちが全然讀まなかつた書物に就いて談ずる。いかに多くの人が世間にあるかといふ事は、この點に於ける經驗がないと、人々は殆んど信じ得ないであらう。彼等は之についての自分の意見を、講演とか新聞雜誌とかから取つて來るのであるが、これらのものとても、亦大抵は自分達の智識を、只第三者の手から掘み取つたのである。若し人あつて、何人が書物を自分で而して全面的に讀んだかを、精細に探究するなら、之について話した社會全體の中で、何人も——講演者も聽衆も、また新聞紙上の報告者も——之を讀まなかつたと云ふ事が屢である。

そんな譯だから、特に、多く書物を書いたり・讀んだりする國土なる獨逸に於ては、比較的僅少な書物が買はれるといふ現象が起る。

(註) われらはこれに瑞西をも加算する。しかもこの點に於ては、佛蘭西と佛語瑞西とが、獨逸國と獨語瑞西とを凌駕して居る。われらは瑞西に於て、或一見俗稱で優美な淑女から、彼女の兩親の家の書庫には、たつた五冊の書物しかなく、それらがとつかへひつかへ繰り返へして讀まれたと云ふことを聞いた

のを思ひ起す。——原著者註

事實また書物を買ふ必要はないのである。人々は書物に關して、會話に要するものを、別な方法で、充分に聞くことが出来る。或は人が或個所を調べて見ようと思ふなら、最も困つた場合には、圖書館や貸出圖書館を自由に使ふことが出来る。世には、彩色した窓硝子と古典風な箆筒とを有する眞に宮殿ともいふべき立派な建物のうちに、生活する人があるが、諸君にしてその人たちの書庫を調べて見るなら、そこで最上のもものは本箱であり、書籍は、これを使用するのに氣が引ける位に美しく装幀されてゐる。

〔註〕 書籍の甚だ高價なる装幀は、いつでも疑はしいものである。——原著者註

夫故に或知名なる獨逸の著述家は曰ふ、今日のやうに参考書があるなら、書物を書くことは、今や全く一些事であると。實際著書は、次の如き處方箋によると出来るのである(勿論われらはこの處方箋を讀者に推薦しようとは思はない)。著書のた

めには、まづ約三四冊のやゝ古い。世人にはいくらか知られなくなつた書物を取り上げる。そしてこれらを壓搾して、一冊の新らしい本を作る。それから、必ずしも容易くは發見されざる甚多數の著述家たちを引用するが、世人の既に利用したものは、極めて少なく引き用ひ、なほ其上に御機嫌とりに充ちた謙讓なる序文を添へ、また書物の内容の進行中には、批評でも書く習ひのある同時代の多くの著述家を褒めて述べ立てることを忘れない。かうすると人は、自己の思想なくして、或ものを書くことが出来るし、この或ものはその上なほ、可なり博學に見え、多くの人々から賞歎されるのである。

〔註〕 多くの書物は、他の書物のうちにあるものの枚擧に過ぎない。著者が讀んだのであらうと・なからうと、かやうなものを、より多く枚擧すればする程、いよいよ博學のやうに見える。或事物の眞實の偉大なる識者は、之に反して甚だ簡單に書くので、人々はこれに對する彼等の準備——一般に彼等の手工具——に、一向氣つかないのである。——原著者註

この著述家は更に話を進めて云ふ、書物を読むことは既に、書くことよりもよ

むづかしく且つずつと、面倒である、然し書物を買うことは、最大の曲藝であると。

〔註〕然しこの風は近代になつて、獨逸でも改善されて来た。——原著者註

效果ある讀書のためには、自由な・他の業務や思想に攪亂されざる時間が必要である。然らばどの時間がそれであるべきかは、普遍妥當的には決定されない。私自身は、最初の朝の時間と最終の夕の時間とを、これに用ひた。然し決して寢床の裡で讀んだことはない、これは多くの理由から、——また健康上の理由からしても、——推薦出来ないのである。然しやすらかな體の位置は、精神をより自由に且つより受納的になすもので、それは人が夜中、又は朝早く目ざめた折に、肉體がすつかり休息してしまつた際には、最上の思想を持つことでも、解る通りである。

讀書に於ける適度は、其次の要點である。讀書の經過中に、厭氣又は疲勞が現はれる否や、直ちに中止しなければならぬ。然し初頭に於てさうしてはならぬ。何と

なれば、勤勞一般に對する如く、人は始める前には、讀書に對してもまた、往々にして興味を持たないものである。そして諸君のうちのおまたの人々が、常に讀書への興味の湧くのを待たうとするなら、恐らく全然始めない事になるであらう。この場合にはむしろ、すべての善の最大の制動器なる怠惰そのものを征服する事が、必要である。

自分の未だ知らざる書物の選擇に當つては、往々にして甚だしく信頼し難き「批評」なるものに、あまりに重きを置いてはならぬ、之に反して、只中等のものだけが、援助の缺乏によつて、全く人に知られずに居ること、及び昌んなる廣告の先立つ一切の書物は、甚だ疑はしいものであることを、確信してよろしい。

〔註〕甚だしく、批評は單に註文され、或は乞ふて得られる。而して往々、著述家たちの本當の「共同相續契約」が結ばれる。此等の著述家たちは、相互の「承認」や、或は少くとも批評せぬことに、ほとんど契約的に義務づけられてゐるのである。——原著者註

それは兎も角、各人は勿論自分の愛する著者を持つて居る。これらのものから折々、その人の主宰的な精神方向が最良く認識されるが、さりとてこの方向を、彼について認めることが、絶対に必要だといふ譯でもない。

〔註〕 例へば、デカルト (Descartes) 佛蘭西の數學者兼哲學者、一五九六—一六五〇——譯者註) は、聖書とアタヴィイノのトマス (Thomas von Aquino) 伊太利の神學者、中世最大の神學的スコラ哲學者、アタヴィイノのトマス (Thomas von Aquino) の著書とを、いつも手許に持つて居た相である。されば人々が、近頃スピノーザーの思想の源泉をいくらか發見するために、彼れの書庫を探し出したのは、有理な事である。各の有名な人々に就いて、その人々の著書の目録を作成し、しかもいづれの書が、最も多く讀まれたかといふ覺書添へたなら、それは興味多き事であらう。何となれば、多くの書物は、折に觸れて繕かれるためにのみ、或はまた單に裝飾のためにのみ、備へられるからである。——原著者註

書物の種類全體のなかで、普通の長篇又は短篇小説は、大抵は、皮相的な或は其上真ならざる人生描寫として、避けられなければならぬ。同様に日記・自敘傳の如き——公然と名を揚げたるものでも、匿名のものでも——あまりに主觀的な讀物は、忌避されなければならぬ。

〔註〕 われらは、例へば、二人のわれらの有名なる同國人 (瑞西人で、ルソーとコンラート・フェルデイ共に自叙傳的のもの) の著『懺悔録』(ルソー) と『緑のハイソリック』(マイエ) とに對して、何等の趣味をも感じない事、及び往々虚榮心に充滿してゐるか、或はさうでないか、やゝもすればあまりに大なる謙遜によつて、讀者に對するその眞價に於て減殺されるかなる・凡ての自敘傳に對しても、同様に何等の大なる趣味をも感じない事を告白する。且又『各の主觀主義は、異教である』。本當の人間は、少くとも後年になれば、全く自分自身のために世間に生活しては居ない。夫故に彼は、自身の事を多く考へたり、或は進んで、自己の事を敘述するやうな時間もなければ、興味もない。或すぐれたる人物に於て最も興味ある事は、彼自身に對しても他人に對しても、明白にそこに横はれる事實其物ではなくて、彼れの展開の秘密、及び永遠なるものと彼との關係の秘密であり、如何なる日記も、之に言葉を與へる事は出来ない。日記はやゝもすれば利己的にし、または時々不眞實にさへするといふ缺點を有する。何となれば、日記のなかで取扱はれるのは、自分の愛する自我であつて、注目すべき何物かを記載し得んことを願ひ、このために往々實際の出來事を誇張するからである。良き行爲こそは、過ぎにし日に對する最良の思ひ出である。——原著者註

之に反して、古典的古代の著作は、すつかり讀破してしまはなければならぬ。それらは全部讀むことの出來ぬ位に、數の多いものではない。またそれらの大部分は、一般的興味を有するもので、今日の意味に於ける専門書ではない。しかしそれらす

べてに對して、ほんの一寸でも近似的に同等なる價值をつけるなら、それこそ馬鹿げた沙汰である。われらの批判によると、殊に勝れて最良のものを見做さるべきは、ヘロドート(Herodotus) 希臘の史家、『歴史の父』と云はる。前約五〇〇—四二二。二二〇年。其著は四百七十年までの波斯戦争を誌す。——譯者註、ツウキュディデス(Thucydides) 同じく希臘の史家。前四六〇—三九六。其著は四百一十一年までのポロポネサス戦役を誌す。——譯者註、ブルタルヒ(Plutarch) 希臘の史家、前四〇—一〇七。有名なる『ゲルマニア』其他の著者。——譯者註、ズエートン(Suetonius) 羅馬の史家、約七五—一三〇。主著『ツエスチナ』、ザルスト(Sallustius) 羅馬の史家、八六—三六。カティリナ謀反の著者。——譯者註、タツイトウス(Tacitus) 羅馬の史家、約五五—一〇七。有名なる『ゲルマニア』其他の著者。——譯者註、リヂウィウス(Livy) 羅馬の史家、前五九—後十七。紀元九年までの羅馬建設史百四十二卷を著す。そのうち今に三十五卷を傳へて居る。——譯者註、ポリュビウス(Polybius) 希臘の史家、前二〇四—一一二。二二〇年から一四六年にかけて、四十卷の世界史を著す。——譯者註、ホリユピウス(Polybius) 希臘の史家、前二〇四—一一二。二二〇年から一四六年にかけて、四十卷の世界史を著す。——譯者註、カティリナ謀反の著者。——譯者註、タツイトウス(Tacitus) 羅馬の史家、約五五—一〇七。有名なる『ゲルマニア』其他の著者。——譯者註、デモステネス(Demosthenes) 希臘の演説家、前四〇—三二二。有名なる『ゲルマニア』其他の著者。——譯者註、ツイツェロー(Cicero) 羅馬の學者政治家及雄辯家、前一〇六—四四。今に傳はれる彼の演説は五十七篇あり。——譯者註、ホラーツ(Horace) 羅馬の有名なる詩人、前六五—八。頌歌諷詩等がある。——譯者註、ヴァイルギール(Vergil) 羅馬の詩人、前七〇—一九。彼事詩『エネアス』その他の作者。——譯者註等である。之に反し

てアリストートルレス、プラトーン、ツイツェローの哲學的著作は、それらが有名なるにも拘らず、或人生觀のための基礎としては、眞に人を満足させるものではない。われらとしては、この方面に於ては、これらの著作よりも、エビクテート(Epictetus) 紀元一〇五—五五。『道徳的綱要』(Handbuechlein der Moral) 云へばの甚だ小なる「綱要」(詳しくは「綱要」) 紀元一〇五—五五。『道徳的綱要』(Handbuechlein der Moral) 云へばを選び取るのである。

一般に、古代及び近代の抽象哲學は、本來的に一個の迷宮であつて、そこを通過して行くためには、只一條の導きの絲があるだけである (希臘傳説に、テゾイスは戀人アリ入り、怪物を退治し、また此絲によつて迷宮を出たといふことがある。——譯者註)。その絲は既に堅固になつた正しい世界觀である。かゝる世界觀なくして、深くこの迷宮に入り行く人は、途方に暮れて、また眞に得るところなく、いろいろな途を彷徨するか、さもなければ、最も奥深い個所に到着して、もはやほとんど全くは打克つことの出来ない恐怖を見出すか、この二者のうちいずれかである。夫故に、この迷宮に踏み込むことが要求されて居るのかどうか

と、人あつて問ふならば、答は「然り」であり、また「然らず」である。教養の積んだ人たちにとつては、この側を通り抜けて行くことは、ほとんど彼等の人生觀と一致させ難いことであり、他の人々にとつては、この種の文献は、何等大なる價値をも持たないのである。然しいづれにしても、こゝでもまた事柄を第二者の手から知り、或は甚だ屢行はれるやうに、講演または「哲學史」から知ることゝ満足してはいけない。これらの書物こそ、却つて丁寧に、またこれらのものが喚び起すあらゆる不興を克服して、自分で讀まなければならぬ。しかもわれらの考へによると、カントの『純正理性批判』で始めるがよい。この書は、この種の述作のうち、最も慰安的で、且つ最も讀み易いものとは云へないが、兎も角最良で、最も博識的で且つ最も根本的なものである。

〔註〕 ※これらのものの中には、ひよつとすると、二三の哲人の利益になるやうな途方もない淺見がある。私はスピノーザを素晴らしく崇拜する一婦人との對話を憶ひ起す。その際私はしまひに、彼女が嘗

つてこの人の一著作を讀んだことがあるかどうかを、直截に訊ねた。答は否定的であつた。同様にジョーベンハウエルに就いても、彼自身が最大の價値を置いた彼れの本當の畢生作よりも、彼れの小著述の方がずつと屢讀まれるのである。——原著者註

疑もなく、一切の思惟と一切の出來事との原理の概要的敘述といふ意味に於いて、抽象哲學が、われらの經驗的にして且つ本來的には思考に懶惰なる時代に於てよりも、ずつと大きな役目を演すべき一時代に向つて、われらは急速なる歩みを以て進みつゝあるのである。勿論それはヘーゲル學說の形式主義や、シェリング學說の不明瞭なる自然哲學を基礎とするのではなく、カントに復歸しつゝ進むのであつて、この人こそ（カント）は、われらの眼には、最後の哲人であつたのである。然し上述の如き時代の來るまでは、今日でも既に、少くとも、「そこからすぐれたる助言的思想の花が彼に開くべき深い畝溝を、精神のうちに作り行く」人は、いづれも哲學を全くなして済ますことは出來ないであらう。

抽象哲學を自然的に補足するものは、出來事の研究既に歴史であつて、この補足

は決して缺けてはならないのである。これに就いて一般に云はれ得るのは、今日の歴史敘述には、歴史を教訓的ならしむる哲學的下層士が缺けて居る事であるが、これは所見に於ける主観性が、人に好まれないと云ふ理由によるのである。然し各の藝術品は、この主観性を所有する。そして各の良い歴史は、矢張一個の藝術品なのである。

〔註〕 逃ける輩たちが、われらに羽織に談らなければならぬなら、それは血を呑まねばならぬ。しかもそれは、史家その人の血である。これによつて敘述が主観的になつて来る。若し史家自身にして、何等暖かき血を持たず、たゞ幻影の如き本性を有するに過ぎなければ、——或はまた彼にして過去の土砂堆のなかから、只個々の穀粒をひつかき出し、啄み上げ得る博學なる鷄に過ぎなければ、——正當に高度に保たれた史的客観性と忠實とが在るにも拘らず、生ける人々に對する價値多き歴史は、かやうなところからは出て来ないのである。今や支配的な學派の歴史の敘述であつて、成程過去の出來事を再現することとを心得て居るが、その時代の精神、その時代の理解を描出することを心得ざるものが、幾多存するのである。この種の敘述そのものも、單なる傾向的史的記述への有益なる反動にすぎなかつた如くに、今やこの敘述への反動が、之に對する——特に青年たちの——減退し行く興味のうちに豫見される。全くわれらの心に協つた歴史の著作は、カーライルの『オリヴァ・クロンウエルの書簡及び演説』並びに同じ人の『佛蘭西革命史』、タイエリ (Augustin Thierry) 佛蘭西の史家、(一七九五) の『メロヴィアン』——一八五六——譯者註

ジャン湖時代物語」等である。之に反して、テーヌ (F. de Taine) 佛蘭西の哲人、史家兼批評家、(一八二八—一八九三) の著『現代佛蘭西の起源』は、結局甚だ面白い資料蒐集に過ぎないのである。後述する各巻の精神は、前行する各巻のそれに——甚しきは屢直接的に——矛盾する。之に就いては『佛蘭西聯邦政治年鑑』(Das Politische Jahrbuch der schweizerischen Eidgenossenschaft) 第十九卷所載の論文『歴史に於ける主観的要素に就いて』(Über das subjektive Element in der Geschichte) を参照せられよ。——原著者註

こゝでもまた今日の方法のうちに主宰する所謂「客観性」——これは屢全く善惡に對する無關心に墮するものである——と、以前の主観主義——これは屢有りのまゝの事實に相應しない——との間に、正しき中道が見出されなければならぬ。これは主として、眞の史家が發見されることによるのであるが、かゝる人々は史學研究科で教育され得るものではなく、一切の眞に偉大なる事柄の如く、神の恵みに依るものである。

今日、讀物中で主要且つ不必要なる部分を構成せる新聞紙は、他の讀物と同時に讀まないのが、最も合目的である。特に然しながら、必然的にその價値を各異に

を知つて居る。これは著者に對する敬意の限りを盡したものであるが、惜いかな、この敬意は、豊饒なる土壤から生じたものではない(それを讀んで實を結ぶやうな頭から出た敬意ではないの義。——譯者註)。更にまた、讀物の選擇といふことになる、われらはこの問題の関口で、いきなり大なる分岐に逢着する。この分岐は、兩方の側の從屬者にとつては、屢ほとんど善と惡との分界を意味して居る。それは、自然科学か、精神科学かといふ問題である。これは人間精神そのものの本質に關する全く異なる見解に基づくもので、或人々にとつては、精神は最高の靈から導き出され、地上の家(肉體)のうちに置かれ、このものと説明しがたき方法で結びつき、且つ疑もなく之によつて強度に影響せらるる獨立的實在であるが、他の人々にとつては、精神は單に、此自然的・動物的存在の一つの機能に過ぎざるもので、人間全體は本來、より高等なる動物の一種類であり、低度なる端緒から漸次に發達して來たもので、抑の初めには、自己生産と連續的な變化との・前者と同じく未だ説明されざる(われらの見解に依ると、前者より

ももつと説明されざる)方法によつて生じたものと思はれるのである。いづれが、永續的に主宰する尸解であるかは、われらには、勿論疑點の存しない問題ではあるが、これが正しく論争點である。目下のところは、自然科学への興味が、少くとも優勢を占めて居る。そしてわれらは、哲學でも宗教でも、自然科学の成果から學ぶところ多く、これらは最早決して單なるヘーゲル流の、或はスコラの又はカルヴェン風の形式で、再び勢力を得ることはないであらう。却つてそれらは新に、一切の眞の存在と智識との源泉から掘み取つて、單なる形式主義に陥らぬように用心しなければならぬだらう。

〔註〕アクヴィーノのトマス(前出)及び十三世紀のスコラ哲學を、われらの間に再び採用しようとする試みが、甚だ權威ある側からなされた。この試みは、時代の印としては成程面白い。何となれば、なほ二十五年程前には、かやうな試みは、考へられなかつたからである。然しこれは決して、永續的の意味を持つては居ない。——原著者註

夫故に、この立場から出發するなら、一個獨自の判斷を得るために、人は讀者た

る彼自身の同感なき方面の主著をも、讀まざるを得ないであらう。然しこの際はいつも、原本と師長とが選ばれるべきであつて、門下たちは避けられなければならぬ。例へば通常の唯物論的自然科學的の講演や、所謂「社會問題」の雷同者の日毎には増加し行く數々（のもの）ではなくて、デアザイン、ヘッケル、マルクス、ラサール（Lasalle）獨逸の社會主義者。一八二五—一八六四—譯者註、フリーリエ（Frierie）佛蘭西の空想的社會主義者。一七七一—一八三七—譯者註、サン・シモン（Saint-Simon）佛蘭西社會主義の創始者。一七六〇—一八二五—譯者註の如き大家を讀まねばならぬ。いづこに於ても、敵對的陣營に於けるほどに、（相手方の）原典を讀む必要の切實なところはな

い。原典は精神が最も横溢して居て、しかもまた通常、最も慎重であり、最も人を引きつけるものである。何故なら、これらはまさに、狂熱家や野心家からではなく、すぐれたる且つ尊敬すべき人たちから出たものだからである。人はまたこれによつて、夫の無數の信奉者たちが、これらの原典を成程「權威」として尊敬はするけれど、之についての彼等の智識は、然し第二者の手から得られたものなる事を認むべ

き機會を、屢見出すのである。或人生觀に對する本質的の論旨は、その源泉から最も容易に把握され得るものであり、屢また本當の原典の僅少なる頁から得られるものである。例へば、基督教中のすべての本當に眞なるもの、根底深きもの、永遠に存立するものは、福音書の數頁が包有して居て、これは恐らく今日の大新聞の一號のうちに收容されるであらう。夫故に單に、基督教とは何ぞやと云ふ事を知らうと欲する人や、神學を研究するのではなく、この教へによつて自己の生活を調整しようとする人は、四福音書より以外の何ものをも讀む必要はなく、止むを得ない場合には、そのうちの一福音書でも宜しいのである。また實に、史的事件に注目するのではなくて、單に「教へ」に着眼しようとするなら、福音書中、たゞ基督の言葉を知るだけが必要なのである。其他のものは、——使徒たちの書簡すらも、——一つの「學問」であつて、これは有名なる神學者たちの理解によつて見てすら、「天福には必要ならぬ」ものである。唯物論的或は社會主義的の信念に關しても、全く類似し

て居る。そして既に以前に説明した通り、短かい生命の間に、正しい時間の割當てによつて、又その日その日の多大なる仕事に従ひながら、しかもなほ眞の精神と心情との教養と、また自己の時代の教養についての正しい見通しとに必要なるすべての書物を讀むべき讀書術は、實際に讀物のこの全く正しい選擇に基づくのである。而して普通には、甚だ多忙なる人々こそ、その時間全部をこれらの書物に用ひることの出來た閑人達よりも、すつと多くこれらを讀んだといふ事は、事實である。

〔註〕 何人かが、例へばたゞ共產黨宣言、マルクスの資本論、ラサールの「バステイアート・シュルツェ」(詳し)は Herr Basili-Schulze von Dalitzsch (一八六四年作)を讀んだだけでも、その人には社會主義がその根本理念と目標とに於て、彼が之に反して單に社會主義新聞の何年分かを通讀するであらう時と同様の程度に、はつきりと解つて來るであらう。若しこの人にして、社會主義を科學的に教へようと思ふ必要なら、(神學の教授もまた聖書よりも多くの書物を讀まねばならぬやうに)より多くを讀む必要がある。但しこの人に、その天賦と傾向とがあれば、社會主義を理解し、また之に就いての確信を得るためには、さうした必要はないのである。——原著者註

上述の一切から來る結論は、——われらは今一度こゝで繰り返へさうと思ふので

あるが、——次の如くである、「事實、各の領域に存在する讀材の・當初には見渡しもつかぬ嵩に對して、勇氣を失ふことなくして始めよ。そして勇氣を失はぬ爲に、或は勇氣が既に半ば失はれて居るなら、これを再獲得する爲に、一番重要なものから始めよ。若し原本が存するなら、それを讀め。最初に第二者の手に成れる著述を讀むやうな事をするな。かうすると、それから續いて讀むべきものは、大抵全く自ら解つて來るものである。特に、なほこの上に願はしい補充的の文献はさうである。之に反して多くのものは、この場合君たちには、恐らく全く餘計だと思はれるであらうし、兎に角(讀むにしても)より僅かな勞力しかかけないであらう。大抵の讀書子は、あべこべなやり方をする。それだから決して事物を、それが實際ある通りの姿では見ないのである。

〔註〕 世には聖書を、——これは兎に角、たしかに一個の重要な書物である、——決して自分で、また全部的に讀んだことはなく、只他の人々がこれについて云ふところを讀みたる所謂「教養ある人」たちがある。——原著者註

讀書に當り、計畫に従つて前進する事は、この場合必要ではないとしても、有益であるだらう。學習に於ける所謂「體系的」なることは、（學修者の）荷を軽くする意味を有するに過ぎない。主要事は、學ぶにある。その方法の如きは、どうでもよいのである。然し規則正しいといふ事が、全くつまらない譯ではない。特に、まづ最初に、文學の或一種類へ、又は或一時代へ制限する事が、間もなく自ら生じて來るであらう。一番自然的なのは、歴史的順序である。然しこの順序が、今日から始めて、中世並びに古典の文學に遡るか、或はその反對であるかは、どうでもよい事柄である。

〔註〕 自然的にして歴史的なるもの、態とらしからず、考へてひねくり出したのではないものが、われらにして出來得るだけ眞理に近づかうとする場合には、最良なるものである。然しこの場合、人は決して夫の屢引用されるが、然し全然間違つたレッシングの説——即ち眞理の獲得とその所有とはなくて、眞理への永遠なる・従つて畢竟無結果なる努力のみが、人生の目的であるとす説——から出發してはならぬ。——原著者註

註釋といふ單に學者風の附屬物は、讀物の理解の爲に、絶対に必要である場合の外は、少くとも當分は避けるがよい。讀者・著者間の接觸は、直接でなければならぬ。修養中の讀者諸君よ！君らは君たちの精神に力と擴大とを與へるが爲に、讀書するなら、このやり方は特に差當りのところ、君たちを満足させるであらう。之に反して君たちが、出來得るだけ早く、讀んだものを見せびらかせ、他人を欺かんとがために讀むのなら、この附隨する學識（註）の適當な分量は、始めから必要であるであらう。蓋しかゝる學識は、事物そのものに関する知識よりも、いつもより多く人々を感歎せしむるものだからである。

然しまた君たちは、われらの道から、今後再會の機なく別れる道に登るに當つて、或有名なる學者（ヴァインケ）の一語を携へて行き給へ。曰はく希臘人は、われらの近代的種類の博學を知らなかつたが故に、あのやうに摸倣しがたく偉大になつたのであつて、近代的博學とは主として、他人の既に知つたことを、（後から）知ること

にあるのである」と。

然し最後に、そしてまた結論として私は曰ふ、人はまた讀書及びその結果たる知識を、あまりに高く評價してはならぬと。生のための・及び生の幸福のための主要事は、知識にあらずして行動である。知識はこれに反して、使徒パウルの云ふ通り、最良の場合に於てすら、いつも補綴細工ツボヅリに止まるもので、知識の完全なゆし人は、嘗つてこの世にあつたことなく、將來もまたないであらう。そして行爲に移り行かざるすべての知識は、單に生産的な所有物であるばかりではなく、之を使用せざることによつて、却つて有害になるものである。自らの教養を、自己のためのみ所有し、行動することによつてこの價値を絶えず検討するのを怠る・凡べての甚だ教養ある人々は、只自分自身にのみ満足する厭世家になるか、或は彼等がさうするだけ充分に賢明なら、自分自身の知識的獲得をも、夫の王者中で最も賢明なる

王(ソロモンの事)のやうに、終には「空の空」なるものと見做すやうになるといふ危険の裡に立つのである。

〔註〕『傳道の書』(舊約聖書)第一章及第二章参照—原著者註

しかしながら、斯の如きは、博學の要求する多大の辛苦と勤勞とによる大なる迂路を經由せずとも、もつと廉價で到達し得べき生の結果である。

二

ショーペンハウエルは彼れの憤怨的厭世觀でかう云つてゐる。一つの悲劇的文學史が書かれて、いかに不當な方法で、國民が彼等の眞に偉大なる著述家たちを——他の人々には名譽と富とが與へられて居るのに、——取扱つたかといふ事が、示さるべきであらうと。しかし事態はそれほど悪くはない。書物に就いては(人間に就いてと同様に)せいせい、良書は通例、より後れて認められるが、然し一旦認められると、持續的の力を持つ。しかしいきなり恐ろしく喇叭を吹き立てて、世間にあ

らはれたる書物は、往々可なり静かに世間から消失するものだといふ事は、云はれ得るのである。或甚だ良き書物が、全然認められなかつた例は、歴史的には、ほとんど證明しがたいであらう。それはまた、われらがわれらとしては、所謂「認められざる天才」(の存在)を、決して強く信じ得ないと同様である。之に反して甚だ慶、より良き著述家が、その生時に、或はその生涯の最大部分の間、眞價以下に評價され、他の人々に比べて冷遇された事、及び一般に「名譽と富」とは、それが當然屬すべき人たちに、必ずしも常に與へられぬ事は、儘かに本當である。然しこれもまた恐らく、(神の)世界指導に於て、理由と意圖とがない譯ではなからう。何となれば名譽と富とは、人間を——特に公的活動をなすように指定されたる人々を——傷害する力を持つもので、その悪影響には、何人も容易くは全的に抵抗しがたき報酬であるからである。

夫故にわれらは、個々の場合に於ける反證を除くと、恐らく、書かれたものなかで最良のものは、世に知られて居たが、比較的に重要ならぬものだけが、なくなつたのだらうと考へるのである。

〔註〕 例へば古典時代のもので、われらの全く知らぬもの、一例をあげると、ホルテンジウス (Horatius) の演説の如きは、われらの知るもの以上にはあり得まいし、最古の基督教時代のものでは、福音書及び使徒たちの書簡が、明らかに最上のものである。最近になつてなほ發見されたものの如きは、遙かにこのものの背後に立つ(劣)のである。—原著者註

さてこれらのなかで、いつも上述の一般的意味に於て、また本當の専門文献を除外して、いずれが最良の書籍なりやは、要するに答へがたき問題である。この問題は、各の文化階段や、各の年齢に對して、同一ではない。否、各の氣分に對してすら、同一ではないのである。

〔註〕 例へば、物故せる史家テーム(前田)は、或書簡のうち、最良の書物二十種の表を掲げて居るが、彼自身同一書簡中で、二回も殆んど全面的に更改して居る。そしてそれのうち、少くとも其半數を、われらは抹消するであらう。

例へば私に、最も多く感化を與へたものは、聖書の外に、ダンテ、トマス・ア・ケム・リス (Thomas a

獨逸の神秘家、ケンペンの生れ、〔Thomas von Kempen〕と云つてゐる。有名なる『基督のま故に獨逸語ではケムペンのトマス』の著者。一三八〇—一四七〇年、エビクテート(前出)、クロムウェルの書翰及び演説、バンヤン(Banjan)英國の宗教文學者、世に知者、一六二八—一七〇〇年、ユンダ・シユテイリンダ(Jung-Stilling)獨逸の眼科醫、敬虔主義の宗教文學者、自傳者、一六八八—一七〇〇年、スプーゲン(Spurgeon)英國の宗教家、十九世紀最大の説教家と稱する。一八三四—一八九二—一七〇〇年、テルスデーゲン・ゴスネル(Tersteegen-Gosnell)の作に成る講義多し。一六九七—一七六九、ゴスネルは同じく獨逸の神學者、初め舊教、後に新教、外國傳道に力を盡した。一七七三—一七六九、八五八—一七〇〇年二人の名前を併記したるは、前者が作ったものを後者が手を入れた義か。一七三三—一七六九、なる魂、タカア著『ブリス夫人傳』、ゲーヌアの聖カタリーナ(Katharina von Genua)伊太利の聖尼、病者の世話と禁慾とを以て聞ゆ。一四四—一五〇〇年、譯者註)の『愛の神學』等である。—原著者註

何となれば、幾多の良書はたゞ個々の氣分のみ適合し、他の氣分の時には、ほとんど使用しがたきものであること、及び反對に或書物を眞に理解するためには、これがいろいろの年齢・さまざまの氣分で、讀まれるのが必要なる事は、疑もないからである。

それ故にこの講演の如く、單に概觀的な方法では、一般に知られて居り且つ容易に手に入るもので、敢えて圖書館で搜がす要なきほどの書物について、一般的に話し得るだけである。また其上に、宗教的内容の文献に對して、或制限をなすことも、本講演の目的に適つてゐる。

勿論—これはいきなり劈頭に云はれねばならぬことであるが、—宗教的教養には、多讀のみでは、未だ以て進歩のたしにはならぬ。人が一旦、この理念方向に進んだら、實踐と觀察と試みと、それから特に一切の悪書の回避とが、遙かに多く爲になる。悪書はいかなる團體(の力)、いかなる説教を以てしても、排除され難い。たゞ良書の普及によつてのみ排除される事は、既に久しく承認されたる眞理である。

〔註〕 鐵道のすべての待合室—特に三等待合室には、無料の水壺と共に、好意ある人々の盡力によつて、良著述の小さい一山が、—諸人の讀む爲に、或は無償で持ち去つてよい爲に、—置かれて然るべきであらう。—原著者註

然し夫の政治上の著作のために存在せる。またこの方面では、それ相當の理由の

ある出版の自由と同一の自由が、またいさなり文學の各の他の種類に對しても適用される間は、—更にまた大新聞すら、全く劣等な小説を、その文藝欄に印刷する間は—、或は最後に、悪書反對の團體には加入して居る紳士淑女の面々が、極めて劣悪で且つ極めて危険なる書物ですら、それが文學的に有名だといふスタンプを捺押される否や、これをしも採つて讀む間は、—上述のすべては、なほ未だ大に役立つわけには行かない。

これらの前提の下に於てのみ、宗教的著述から、眞に或ものが學ばれ得るのであり、また協力する内的經驗なくんば、一切の宗教的讀書は、確信せしむる力なきものである。然しまた他の場合に於て、讀者は必ずしもいつも、それらの書物の著者たちの經驗階段と同じ階段に立つものでもなく、彼等の境遇に居るものではない。

〔註〕 されば「完全」に到達するための諸指示は必ずしも常に役に立たない。或は恐らく、單に修道院の
人たちにとつてのみ、有用であらう。例へば聖テレージア (the holiest Theresa) の聖女、諸種の宗教的

著述あり、自傳も) の甚だ興味ある自傳中、より大なる部分を占めるこの種の著述を参照せられよ。又
なる。—譯者註) ジョン・ダレスリ (John Wesley) 英國の宗教家、メソヂイスト派の開闢者。一七三〇—一七九一—譯者註) の著「基督教の完全の平明なる解
説」の如き他の著述は、多くの無用物のうちに、たゞ僅少の全く良いものを、含んで居るに過ぎない。
原著者註

そして宗教書が、「往々藥とほとんど區別しがたい隠れたる毒を持つて居るかも知れない」と云ふ事は、單にメフィストフェーレスの如きものの口のみ屬する言ではない。

さて前述のすべては—最後の一文を除くと—まづさきに、この種類中の最良の書即ち聖書に當て候まる。

現代に於ける教養ある多くの人々にとつては、聖書は實に「克服されたる立場」であり、又各の他の古典的著作に關しても同様であらうけれど、この書もまた彼等は決して之を讀了したことなくして、しかも怙として耻ぢないのである。然し聖書が、その歴史的價値を全く度外に掲いても、—しかもこの歴史的價値は、段々多

くあらはれて来る——あらゆる書物のうちで、最も精神の豊かなるものたる事は、あまりにも知られて居ない。勿論この書は屢貧しい精神を以て讀まれ、且つ解釋されたには違ひないが、さりとてそれは聖書そのものの責では決してない。

〔註〕 舊約聖書もその眞理なる事の最も明白なる證明は、一方では詩篇である。これは他書とちがひ、幾千年の後になほ、極めて深奥なる感情を云ひ現はして居て、今日なほ人心を動かす。この證明は又他方では、イスラエル民族の運命とそれの今日までの繼續的生存とである。すべての同時代の民族らは、その最も強力なるものすら、既に、久しい以前に滅亡したのである。利未記第二十六章三十二節—三十四節、申命記第四章二十七節、及び列王紀略上第九章七節、馬太傳第二十三章三十八節—三十九節參照。新約聖書は、創世記第四十九章十節に既に豫言されてゐる。—原著者註

聖書はまた、いくら讀んでも決して飽きの來る書物でない。勿論これは、讀者が自發的に讀むこと、及び小兒時代に強制で之を讀ませられた經驗などは、嘗つてなかりし事を前提とする。自由的に生れたる人間精神は、とりわけ精神的事物では、かやうな強制に最も甚だしく耐えかねるものだからである。聖書の數多き反對者のうちには、全然聖書を知らない人たちも居るが、之を外にすると、彼等が嘗つてか

やうな強制されたる讀者たりし事に、その原因が求められる。

所謂家庭禮拜で、半ば眠げな。さもなくば注意の緊張して居ない人々の前に於て、機械的に聖書を讀むことは、たゞに無價値であるばかりではなく、却つて非常に危険である。何となれば、神を、人が之に、無關心なる或はその上に僞善なる態度を以て接すべからざる嚴肅なる實在なりと考へるにあらずんば、神に就いて談るのを、危険なしに聞くことは出來ぬ（聞いて却つて危険であるの義—譯者註）。後年最も不機嫌な無神論者となるものは、少年時代に聖書に就いて何事かを、一度も聞いた事のなかつた人々ではななくて、却つて既に早い時代に、聖書が重荷となり、あきあきするものとなれる人たちである。だから聖書は、まるで之を手を取らないか、或は若し取るならば、聞きまた學ばうといふ願望を持たねばならず、いかなる場合にも全靈を捧げて、之にあづかる意圖を以てしなければならぬ。

〔註〕 因に、書籍から何事かを學ばうと欲するなら、この事は、他の書物に關しても、同様である。聖書

には只、凡べての書籍よりも、遙かにより多くの不本意的・不注意的・且つ不適當なる讀者を持つ特權がある丈である。聖書は、高貴で不遜なる牧師、或は美裝せる傲慢な淑女が、人間を奴隷たらしむる爲の輓として、之を他の人々に負はせんがために手に持つとき、一つの重荷となる。—原著者註

更にまた、人は聖書から、自己の生のために或ものを學び、而して學びたるものを直ちに適用しなければならぬ。之によつて單に、——夫のこともとは正しい表現であつたが、今では全く濫用される語に所謂——「信心を起す」けれど、「祈念時間」が終ると共に、再び舊人(もとの人物)たらうとするやうなことがあつてはならぬ。さればルテルは、聖書に關して正しくもかう云つて居る。「この書には、讀む言葉でなく、生の言葉のみが存する。これらの語は、考察と熟考との爲ではなく、生と行爲とのために置かれて居るのだ」と。それだから、單に未來時の爲にのみ存する曖昧不明瞭なる事物の研究に特に従事するとか、われらにはほとんど觸れざる諸般の事情を、學者的・古風的に検討するのは、聖書を讀むに當つての邪道である。これぞトマス・ア・ケムピス(出前)が「多くの讀者は、聖書のなかで、真理以外のものを

搜索する。それだから彼等はまた、彼等をより善良ならしむ真理より外のものを、そこで發見するのである」と述べた所以のものである。

〔註〕例へば、猶太の供養祭の個々の事柄や、世界終末の時や方法などは、抑われらに何の關係ありや？ブルームハルト (Munhardt) 獨逸の宗敎家、神學教育や外國傳道に盡力) は嘗つて、「アンティクリスト」(「反基督」又は「基督の敵」と譯す。世界終末の時期に、このものが惡魔の總勢を率ゐて出現し、基督及びその教會と戰ふが、遂に征服されるであらうと云はれるもの。—譯者註) 關して、彼と語らうとした或好事家に向つて云つた。「アンティクリストはわれらの差當つての必要物」ではないと。ブルームハルト傳第三版二八五頁參照。—原著者註

幾多の人々はまた、自分自ら聖書を知つて居るのではない。聖書は、彼等にとつては、彼等の牧師たちが、その中から何事かを、彼等に讀んで聞かせる一書籍に過ぎない。而して彼等はこの書を、或一人の人物、又は或僧侶團と同身一體なりと思惟する。そこで「純なる酒も、其容器によつて、自らの味ならぬ味を受取ることがあり得る」のである。尤もこれは部分的には、聖書そのものにさへある事であり、その翻譯によつて、なほ更さうなつて居るのである(一〇頁)。使徒パウロの言葉は、

彼が云ひ現はさうとする真理に對して、いつも好都合である事からは、遙かに懸絶して居る。且つ彼れの希臘語の云ひ廻はしは、それらの成程絶美には違ひなきルテル譯と同様、われらにとつては、全然理解し難きものとなつた。

〔註〕 第一世紀及第十六世紀の神學上の言葉は、正に最早われらの言語ではない。例へばそこにある「アインゲボレン (einkehoren) なる息子」とか、「ブーセ (Buße) をなす (han)」とか云ふ言葉は、「或は全く間違つた意味に取られざる限り、何人がこれらの意味を理解するだらうか? (前者は宗教上ではエス・キリストを意味するが、日常用語ではアインゲボレンは「固有の」「本来の」「土着の」などの意味を持つてゐる。後者は宗教的には通常「懺悔する」「悔改める」義に用ゐられてゐるが、世俗的には「賠償をする」義に使用される。これらの世俗的の意味で、今日世人が上掲の言葉を解釋してゐると云ふ義と思はれるが、或はこれらの言葉には、今の人たちの知らぬ高遠な意味があると云ふ義であるか。どうか、上文だけでは譯) 又「彼 (ストリ) は神と等しくあることを、掠奪と思はなかつた」と言葉者には判明しない。譯者註) 又「彼 (ストリ) は神と等しくあることを、掠奪と思はなかつた」と言葉は、われらの耳には何たる表現であるか! (これは「非立比人への書」第二章六節にある言葉で、邦譯には「即ち彼は(神の貌にて居給ひしが) 神と等しくある事を固く保たんとは思はず」とある。譯者註) 又「救済」とか「救主」とかいふ言葉も、全く世間並みの意味を得てしまつて、人々はこれ聞いても、甚だ多く考へるやうなことはしないのである。幾多の教養ある人々にとつては、一特にその少年時代の教育の結果、自國語の聖書の方が、多かれ少かれ未知の書となつて居る加特力教の人々にとつては、一夫故に聖句語の公認聖書 (Bible) が、一番解り易く、又より快く讀み得るものとなつて居る。之に反して、聖書を近代獨逸語に翻譯しようといふいくつかの試みは、今日まで

人を引きつける結果を示さなかつた。ルテルは依然として凌駕されなで居る。一原著者註

今や人は、聖書を、まさしくまづ悟性を以て讀むように學ばねばならぬ。然るにこれをなすべき筈なる學校の宗教時間に於て、普通はこれへの指導が、甚だよくは與へられて居ない。そこで或近代著述家の云つた事が、「またも眞實となつて來る。曰はく

「此書のうちには、まことに最大の秘密が啓示されて居る。戦慄しつゝ、之を讀む時、福祉への道が彼に開かるゝ事を、之に授くべく神のみ旨に適へる人こそ、私は何人にもすぐれて至福なりと云ふ。されど疑ひつゝ、この書を嘲弄の具に選ぶ人は、生れざりし方が、まさつて居やう。」

これらのすべての理由から、まさしく一番正直な人たちこそ、間違つた教育によ

り、或は其他の偏見により、または強度の獨立慾や、一切の人間奴隸制(人間が奴隸とな
るやうな體制)、或は僧侶支配制(僧侶が上に立つ
て支配する體制)に對する畏怖の念から、聖書に對して、或反感を持つものだと云ふ事は、何等の異常事でもない。この反感は然し、彼等が聖書を自分で讀むように導かれると、一變して仕舞ふ。

〔註〕 同様な事が、實際基督その人に對してすら起つた。約翰傳第一章四節參照。反感の主因はいつも、聖書が各の正直な讀者に向つて直ちに要求することを、彼等がなさうと思はぬ。否、われらは、まだな
さうと思はぬと、云ひたいが―事に在る。この良き意志なくして、聖書を味良きものと見出すのは、
不可能である。之に反して、この意志があれば、甚だ容易く出来るのである。之に就ては、キエルケ
ホーン(Kierkegaard、丁抹の天才的思索家、一八)の獨譯されたる三個の假裝説教中、第一のもの(彼
本當に説教したことはない、上述)は假作した説教である。―譯者註)を參照せられよ。それは此事を甚だ影射的に説明して居る。―原
著者註

さうすれば彼等は、聖書が炯眼なる智慧に満ちて居る計りでなく、實地の生活經驗と人間知識とに充ちたる書であつて、最早之に次ぐべき第二の書のない事を發見するであらう。こゝでは此書の歴史的價値を論外に措いたのであるが、この方面で

も同様に、同じ頃の時代のいかなる第二の書物も、これと同等たり得ないのである。この教養材を忌避する人は、古典的古代の全文學を、之に對する或偏見から、故意に放置して顧みざる時よりも、もつと大なる不正を、これによつて自らに對して行ふものである。加之この行爲(古典文學全體を顧みぬこと―譯者註)を以てしては、たゞ今日の教養ある人々中のより、小なる部分との接觸を放棄するに過ぎないけれど、聖書は人間社會のすべての階級を、互に結んで一個の精神的統一體となし得る唯一の、そして唯一的に可能なる精神的繫帶をなすものである。これらすべての階級は、今日では相互的に理解し難くなつて居るが、かゝる分裂の多くの部分は、上述の繫帶の缺乏に還元され得るのである。されば聖書を再たび、もつと世に知られたるものにする事こそ、われらの將來の教養の眞面目なる課題であらう。しかしこれは、強制や人間的訓練を以てしてはならぬ。聖書はかゝる方法に堪え得るものではない。これは一般に各の良書を推薦し、普及せしむると同一の方法で行はれなければならぬ。かくし

て初めて、今この書に全く遠ざかれる許多の人たちは、次の詩句の意味するところを理解すべく學ぶであらう。

「生の言葉よ！大空より流れ出づる澄める泉よ！

汝は汝に心と胸とを開きいづれの人にも、

日の灼熱が色あせしめし萎める草花のやうに、渴しつつ、

乾ける大地より泉へと靡くいづれの人にも、生の力を與ふ」

〔註〕加特力教徒は、良き宗教書に對する要求を多大に持ち、また既述の通り、普通には聖書を詳細に知つてゐないのであるが、これらの人々のために、一言をこゝに附加したく思ふ人があるかも知れぬ。然し彼等は今日、彼等の派に屬して居ない人が、假令好意的意圖を以てしても、彼等の宗教的事柄に携さはると、或種の神經過敏を以て、やゝもすればこれを惡意に解したがるのである。兎に角、彼等とて彼等の民衆を新しく又引續いてスコラ神學でもつて附つて行く譯には行かまい。そして彼等もまた重しとするすべての基督教徒の共同する點を、聖書より以外のいづこでも發見しないであらう。聖書は本來的に（之に並ぶものは、或はなほトマス・ア・ケムピスかも知れない）兩派（新舊）に共通なる唯一の宗教書であるが、然しこれこそは、いかなる人間尊嚴をも知らず、また之を想せざるものである。馬太傳第二十三章八節—十節參照。—原著者註

然るに彼等は今（因に同じ事が、太古時代に既にあつた通りに）、不幸に際して、ほとんど何等の慰安をも與へざる別な泉を掘つて居る。而して所謂「教養ある」現代人が、この書になほ注意を拂ふなら、それは彼等にはほとんど理解しがたき事であつて、—批判の最も穩かな場合には、—寧ろ一種の奇行だと見做すのである。

〔註〕 耶利米亞書第二章十三節參照—原著者註

聖書を註釋又は其他の神學的文献の助けを假りて讀むべきや否やは、一つの問題である。私は少くとも初めに對しては、否定的の答を與へるであらう。但し舊約聖書の爲に、猶太民族史に就いての、新約聖書の爲に、所謂「新約時代史」に就いての極めて必要なる史的研究に關すると、事は別である。特に、學者の如くではなく、權威あるものとして、基督自身の語る方法は、あたまから之に反對するやうに見える。

〔註〕 馬太傳第七章二十九節、約翰傳第六章六十八節、第七章四十六節參照—原著者註

これらの註釋書は屢、無價値であるか、或は恐らく聖書の意味中に全然なきものを附加するかであらうが故に、この場合には危険である。夫故にスパージョンは、その説教の一つで、正しくもかう云つて居る。「福音書の掟ては、これを省略しても、或は之に附加しても、生の爲に制定されたものを、致命的のものに變ずる底のものである」と。

〔註〕 約翰傳第八章四十三節—四十七節參照—原著者註

若しわれらが、宗教改革を、あの當時に、もつと學者的・教理的でなく、まづ第一にたゞ福音書のみを、また福音書のなかでも、基督の言葉のみを讀むように人々を指導する如き方法で取扱つたなら、われらは基督教の理解と—それからこの方がより大切な事であるが—日常生活に於ける基督教の眞の實踐とに於て、今よりもすつと進歩したであらう。何となれば基督の言は、特有的に機智に富みたる而して人

を感動せしむる或ものと、同時にまた一切の無益なるもの・非主要的なるものを、あつさり排除する或ものを持つて居るから、眞理を索むる各の精神を敬服せしめ、宗教を忌避するのではなくて、恐らく單に外面的な教會又は僧侶政治を厭ふ人々を、決してはねつけることはないが故である。宗教はこの簡單な中心點から出發して、人間の心をいつも—今でもまた再び—新に獲得しなければならぬ。

これらの言葉のうちでも、理解の出來ぬものは、差當り安んじて放つて置かねばならぬ。恐らくその若干のものは、翻譯のせいであらう。

〔註〕 これらの言葉は、もと、既に、著しい簡潔さを持つて居り、この簡潔のうちには、全く必要不可缺とは云へないもの（是非なくてはならぬと）が、甚だ少ししか入つてゐないこと、又われらは、かやうにそれ自身既に基づいて翻譯しがたき言葉を、たとへ三重ではなくとも、二重の翻譯を通して（一〇頁

參照）知るものなる事は、牢記されねばならぬ。—原著者註

其他のことは漸次に明瞭になつて來る。而して第三の事（その次の）、例へば所謂基督の二重性、神の本質、世界の終末、未來の生の方法などの教理的説明の如きもの

は、われらは全く知る必要がない。而してわれらがそれを理解し得ざる限り、鬼も角差當り放つて置いて、何等の害もないのである。

〔註〕 テイモテへの前の書第六章五節、馬克傳第十三章三十二節参照—原著者註

諸種の註釋書のうち、いくらか教養のある人々に對して、(舊約聖書の初めの五卷及び詩篇への) 最上のものはフランクフルトの前のラビネル(論太律法・宗教學者の稱號)ザムゾン・ラファエル・ヒルシュの著イスラエルの註釋である。

〔註〕 これに續く彼の著作は、彼の死後初めて世にあらはれたる註釋附きの『イスラエルの祈り』(一八九五、フランクフルト出版)と稱するもので、或部分、前著詩篇註釋の繰り返へしが載つてゐる。—原著者註

又最も注目に價するものは、所謂ベルレブルク聖書(die Berleburger Bibel、ベルレブルクは此聖書は千七百二十六年から四十二年) までのうちに出版された。—譯者註である。これは、十八世紀にシュトラースブルクから追放されたるマギステル(學位の稱號、現今は通用せず—譯者註)、ヨーハン・ハイブリッヒ・ハウグ(Johann Heinrich Haug)が、カジミール伯(Graf Kasimir von Wiltenstein-Berleburg)の懇懇によつて

著はしたものである。この書は、自然的意味の外に、依然として比喩的意味を、聖書のなかに入れようと試みる。然し(シュテイリング(出前)が云ふ通り)、「あらゆる逆説的主張にも拘らず、神學者たるものの藏書中、最上の席の一つを占むるに價する」書物である。そして前掲の猶太人の註釋と同じく、この既に・多くそしてあまりも多く論せられたる事柄に關する平凡ならざる思想のまことの寶庫である。

〔註〕 この書は、當時ベルレブルクの政教分離派組合から出版された。それと時を同うして出た數多の卷の書『宗教風聞記』(Die kirchliche Fama)はイーゼンブルヒ・ビュディンゲン侯(Fürst von Isenburg-Bündingen)の侍醫カールの著に係るものである。これは該書と或種の聯關を持つて居て、少しく狂信の方に切り込める。あらゆる種類の注目すべき宗教的報道を集めたものである。より有名な註釋書『グノーメン』(Groenen)の指針(指針のこと)一名新約聖書指針はヴェルテムベルヒの高位僧ベンゲル(Bengel)の著であるが、ベルレブルヒ聖書には及びもつかない。やゝ古い註釋のなかでは、ルテルの『序言』が、相變らず、一番力強い。甚だ教養に富みたる素人にとつての—單にこれらの人々にとつてばかりではないが—最良の古代教會史は、ギボン(前出)の『羅馬帝國衰亡史』である。これはまさしく教會に對する同情を、全く持たないで書かれて居るからである。教會史中の或重要な時

代に對して同様な（價值を有する）ものは、ブルクハルト（Jakob Burckhardt、東西の文化史及藝術史家 一八一八—一八九七）の著『コンスタンティン大帝時代』（Zeit Konstantins des Grossen）である。獨逸の古代教會史註者）の著『目下のところハウク教授（Prof. Hauck）の著が、一頭地を抜いて最良のものであるが、漸くグレゴール七世の時代に達した計りである。—原著者註

イエス傳全體を、われらは尊重しないのである。ルナン（Renan、佛蘭西の宗教史家、基督傳を書いて、一時教授職を失つた。一八二一—一八九二）の基督傳『La Vie de Jesus 1863』これは各國語に譯され、ひるく讀まれたもの。—譯者註の如きは、一切の眞實なる價值なき單なる小説ですらある。之に反して、當時の時代史に關しては、シユウレル（Emil Schürer、獨逸の文學者、一八四四—一九一〇）著の甚だ良好なる書物がある（これは『イエス傳』と稱するもので、三卷、千）。（譯者註）

〔註〕之と並ぶものは、その時代に出來たフラヴィウス・ヨゼーフス（Flavius Josephus、猶太の史家、後羅馬に住み、一三〇—一〇〇）の著『猶太時代』（原 Antiquitates judaicae、二十卷である。—譯者註）及び同著の同様に世に知られたる書物『猶太人職役』（原 De bellis judaico、七卷である。—譯者註）とある。—原著者註

使徒時代に關する同様に良好なる書物は、ヴィンタートゥールの前の牧師で、ブルームハルト（前出）の傳記を書いたツェンデル（Zindel）の著に係るものである。

〔註〕舊約時代の歴史に就いて、今やまた大變に良い著書があらはれた。それはエトリ教授（Prof. Oettli）の『歴山大王までのイスラエル史』である。

使徒たちの書簡—特に、一番多く書いたパウルの書簡—は、今は遺憾ながら、暗記すべき説教本文や金言の蒐集書と見るやうに、われらは慣されて居るが、それらを全く無邪氣に、恰も今日の興味ある人物の書簡を讀むであらう如くに讀む人は、稀れである。これらの書簡は、聖書一般のやうに、一方の人々の完全なる無識の爲と同様に、他方の人々がこれについて有する『神の言葉』なるものに就いての誇張的な觀念のために、甚しく惱まされてゐるのである。それらは神の言葉ではある。然し甚だ人間的なる・又あまりにも早急に書かれ且つ屢普通の意味では決して良くは書かれて居ない形式を持つものである。

〔註〕これはわれらの批評ではなくて、甚だ古い・同時代人の批評である。ペテロの後書第三章十六節を照。―原著者註

所謂教父たちの著述の巨大なる集團のうちからは、私は、私自身そのなかで讀んだ或何ものかが、本當に私を感動させたこと云ふ事は出來ない。夫の一番近代的でわれらに解り易い・且つその後の自己懺悔録の手本となつてゐる聖アウグスティンの「懺悔録」すらも、さうではなかつた。

〔註〕その上また、新教徒たちは、所謂スコラ哲學、即ち十三世紀にトマス・アクヴィナス(出前)を以て初まれる中世の科學的神學に對して、ほとんど理解を持つてゐない。このものから、われらにとつて最良な部分を保有して居るのは、ダンテの「神聖喜劇」で、この人はトマス・アクヴィナスの同時代人であり、又長くは續かなかつたが、元は彼の信奉者であつた。「煉獄」第二十三章八十五及び西聯邦政治年鑑第四卷所載論文「フェルディナント・ラサルとトマス・フオン・アクヴィーノ(トマス・アクヴィナス)」を参照せられよ。―原著者註

私にはツヴェングリは、その宗教的發表に於ては、あまりにも無味乾燥で、またあまりに深さが足りないやうに思はれる。

〔註〕政治上の發表に於てではない。彼れの天性から見ると、彼は要するに本來的には政治家である。そして政治家としてのみ、甚だ偉いのである。宗教方面に對しては、彼には恐らく、或より深い理解すら缺けて居るであらう。―原著者註

カルヴァインは冷たく、且つ豫定論に就いての彼れの根本原理に於て人を説服せず、恐らく全然正統的オーストリスですらあるまい。宗教改革者のなかで、一番天才的なるルテルスは屢、必要もないのに、あまりに粗野であり、また時に氣儘勝手ですらあるのである。然しわれらはすべてのこれらの著作を、いつも基督自身に徴して測つて見なければならぬ、―われらは彼等によつてではなく、基督によつてのみ、迷と罪とから解放されるのである、―そうした時にわれらは、彼等の言葉や説明力と、基督のそれらとの間には、非常な本質的差別が存すると云はざるを得ないのである。

〔註〕これらの著述のうち、最も興味のあるのは、カルヴァインの「基督教原理」(Institutio religionis Christianae) 此にはクルムマツヘルの翻譯がある。これは彼が千五百三十六年、佛蘭西王フランソワ一世の爲に書いたもので、トーマス・アクヴィナスの浩瀚なる神學總要 (summa theologic) の遙かに短い新教的對作であり、カルヴァイン教徒の信仰告白の本來的な體系的教科書であつて、瑞西のカルヴァイン教徒はいづれ

も、プリンゲル(Balingen) 〇四一—一五七五—譯者註)の宗教改革史と共に讀了しなければならぬ書物である。聖書の翻譯の外に、ルテルの最良のものは、最初の諸使書と、その文には、聖書中の諸書への序文のなかの若干のものである。—原著者註

このより、深い基督教的精神に近づくものは、私の考へでは、中世の若干の著述であつて、とりわけトーマス・ア・ケムピス(田前)の『基督のまねび』、ドミニクス教團の僧侶でシュトラースブルヒのヨハネス・タウレル(J. Tauber 神祕家、民衆説教者。一三六—譯者註)の説教である。勿論若干の除外を以てではあるが、特殊的に加特力的なる二三の書牘乃至履歴 例へばわれらが二人の聖カタリーナ、即ちシェーナのカタリーナ(ドミニクニ僧、三年間懺悔の外には一語も云はざりしと)及びゲーヌア(ゾエ)のカタリーナ(田前)や、アシニの聖フランツィスカス(Frankiska von Assisi 本名は Giovanni Bernardo 使徒的貧困と傳道とを説いた聖僧、所謂「聖痕」を手足及び肋に受けた)、並びに西班牙の聖テレジア(田前)等の著にかゝるが如きものである。

〔註〕 屢甚しく精神に充ち溢れたカトリック教の聖者たちを、良き傳記によつて、プロテスタントの人々にも、より近く近づけることは、一の功績であらう。これは幾部分、夫の有名なる教會史家ハーゼ(Karl von Hase 獨逸の宗教的著述家、教養派。一六七〇—一七七四—譯者註)によつて試みられたことであるが、然しこれはあまりにも神學的合理的な方法で行はれ、彼等の特性の正しい同質的な理解を欠いて居た。—原著者註

然し一般に恐らくたゞ後年期にのみ適するやうな・かやうなる著述を見つけ出すのは、必ずしも常に全く容易であるとは云へない。また之を正しく理解するのは、もつと容易ではないのである。諸君はかゝる傳記のより大なる蒐集を、テルステーゲン(田前)の『精選聖者傳』(Ausgewählte Lebenslitter der heiligen Saelen)に於て、最も容易に見出すであらう。

〔註〕 これはゴスネル(田前)の出版による千八百十一年のもの、及び千八百十四年のもので、千七百三三年、千七百五十四年に出たテルステーゲンの原版、及び彼れの死後千七百八十四年に出たものは、最早書肆でも古本店でも全く手に入らない。—原著者註

英國の革命時代に成つたもので、今われらに傳へられて残れる書物は、全く特殊

的に力に満ちたる効果を持つ。とりわけ、トーマス・カーライルが大規模な書「オリヴァ・クロムウエルの書簡及び演説集」に收めて、前世紀の四十年代に初めてまとも一般に知り得るようになったものがさうである。——これは長い間、忘却されて居り、或は後世の不公平な（批判の）ために鬱閉され、輕視されて居たのである。然しこれには、この護國總督（ウエルム）の少數の書簡と、總計十六篇の演説しか保存されて居ない。それらにはカーライルの註釋が附いては居るけれど、それでも當時の歴史に關するより精密な智識がないと矢張り解り難いのである。この時代のものでは、バンヤン（出前）の有名なる「天路歷程」と——この書は、すべてのがやうな譬喩的閱歷書の不朽なる手本である、——クロムウエルの軍隊附設教師バクスター（Richard Baxter）英國の宗敎家、クロムウエルに屬し、その軍隊附設教師となつた。王政復古後捕縛されたが、後赦された。一六一五—一六九一—譯者註の著「聖者らの永遠のやすらひ」（The Saints Everlasting Rest 1649）とは、よりよく知られて居る。それ以降、基督教文献は、殆んど今日に至るまで、一面に於ては、いくらか乾燥

的教理的であり、他方に於ては、若干甘美的宗派的で、今日受け取られた意味に於ける所謂「敬虔主義的」である。然し諸君にして温籍なる批判をこゝに持ち來るならば、——かゝる温籍は世事百般の批判に當つて必要である、——特に夫のハレ孤兒院の創設者たるアウグースト・ヘルマン・フランケ（August Hermann Francke）獨逸の敎育家兼宗敎家、敬虔主義の運動者、多くの學園を作る。一六六三—一七二七—譯者註や、フィリップ・ヤコブ・シュペーネル（Philip Jakob Spener）獨逸の宗敎家、敬虔主義の始祖。一六三三—一七〇五—譯者註、ユング・シュティリング（出前）・フラティヒ（Plattich）譯者の諸著作のうちに於て、それから全く特別に、ツィンツェンドルフ（Zinzendorf）ドイツの宗敎家、敬虔主義者「ヘルンフェルト派」の始祖。一七〇〇—一七六〇—譯者註の著書のうちに、基督教の熱烈なる精神を、はつきりと認めざるを得ないであらう。この精神は、その時一方又は他方の側から、何等かの偽善が加つて働きさへしなければ、繰り返へし繰り返へして、——また人間的不完全が用ゐて以て之を覆ひ、且つ之を窒息せしめようとする一切の包被を破つて、——直接に讀者の心に作用する。

〔註〕一、ユング・シムティンクの著作中、最上のものは、まづ第一に彼れの傳記であるが、人を感動せしむる美しさを有する第一部は、われらがゲエテの輪旋に負ふところのものであつて、彼は著者に知らせないで、之を刊行したのであつた。その次には特に、千七百九十三年に出た『郷愁』である。これは或「十字軍士」の譬喩的な歴史書であつて、今ではわれらにとつて儘かに最早味勝れたる言葉で書かれてはゐないが、然し生の内的経験の深い基礎を持つて居る。之に反してわれらとしては、『眞の基督教に就いてのアルントの四書』及びベンゲル（出前）・ボーガツキー（Bogatskiy）（『眞の基督教』一七七四）の『寶小箱』（詳し）（Galdenes Schatzkästlein der Kinder Gottes 『神の子らの寶小箱』一六九〇—一七四四）の『寶小箱』（詳し）（Galdenes Schatzkästlein der Kinder Gottes 『神の子らの寶小箱』）並びにこの時代に於ては、甚だ有名であつたが、今では然しあまりにひどく忘却されたるラッファートル（Lavater）（瑞西の詩人また神秘家、人相學の創始者）の全著作を、上掲のものとして決して同等とは思ふことが出来なかつた。プロテスタント教化の特別な源泉は、この派の讚美歌であつて、これについてはいろいろの蒐集書が存在して居る。——原著者註。

〔註〕二、いつも教會内で幅をきかせようと努力する過度の敬虔主義乃至パリサイ主義に對しては、現世界のパリサイ人たちも、之に向つて故障を申し立て得ざる甚よき防禦手段がある。——それはわれらが萬事萬端に於て之に追従すべき基督の垂れた先例である。また教會の世俗化及びその外的威力に於けるあまりに大なる權威並びに各種の人間神化（人間を神の如く）に對して、基督はわれらに二三の甚だ明瞭なる教を貽した。特に馬太傳第二十三章を参照せられよ。後年基督教會がなしたる主と師との道と、其意志とからの最大の踏外しは、基督自身の言葉のうち既に豫め警告されてゐたと、概して云つてよ

からう。例へば約翰傳第二章第三章並に第四章及び詩篇九十四を参照せられよ。われらはあらゆる反對的のものを絶對に拒否して、この限界を固守しなければならぬ。——原著者註

同一の事が、恐らくなほ高められた規模に於て、われらの時代及われらの宗教的著述家に當嵌まるであらう。例へば諸君にして、物故せる牧師ツェンデル（出前）の著なるブルームハルト（出前）傳の如き書を読むならば、諸君は、その書のなかで諸君に奇妙に思はれるかも知れざる幾多の事柄の外になほ、基督のほしがつた人物だといふ印象をたしかに受けるであらう。同様に夫の千八百九十二年二月に逝いた英人スバージョン（出前）も、われらは成程この人のすべての意見には決して賛成しないけれども、矢張同一種類の強力なる説教者であつた。彼は自らの説教したすべもの、また決していつも同一の内容價値を有しては居ないすべてのものを、何でもかでも出版させたといふ獨學者流の通常の過誤を犯した。然し彼れの極めて内容價値に富める諸講演 即ち拔萃されたる『舊約聖書形像』は、基督教の最もよい時代に相應は

しい宗教觀に於ける人を感動せしむる眞實と明晰さとを所有して居て、われらは基督教の實現に於ては、前進しつゝあるのであつて、決して後退するものではないことを示すのである。

〔註〕私の知れるところでは、この抜萃は、上記の表題のもとに、千八百八十七年の第二版に於て單に獨逸語でのみあらはれた。殆んど同じ事が、丁抹人キールケゴール(前出)にも當籤まる。この人の著述中では、單に少數の假裝説教(七〇頁)（彼自身は決して在職の説教者ではなかつた）だけが價値に富む。現今生存せる宗教著述家たちは、こゝではすべて省いて置く。一般に近代英國及亞米利加並びに新教佛蘭西の宗教文獻も、同様にこゝでは省く。それらは屢われらの宗教觀からは若干遠ざかつて居るし、兎もかく眞先に知る必要はない。最も價値のあるものは、英國のロバートソン(Frederick William Robertson)を與へた。一八一六—一八五三—譯者註の説教と、女婿ブリス・タカアによつて二冊の大部も最良にして、また其上に唯一的に完全なる啓蒙書である。—原著者註

あらゆる時代の最良の基督教者からは、われらは遺憾ながら、恐らく只の一冊の著述をも持つて居ないであらう。著述家の手工業は、確かに宗教觀の内的の充分な

る眞理に對しては、いさゝか危険である。かゝる眞理の最良のものは、全く言葉で云ひあらはし難いもので、やゝ、良いものだけが、甚だ不完全に云ひあらはされ得るのみである。それは屢「内悟」に基づくもので、言葉のうちには包まれて居ないのである。そして、各の發言は、話者の蒙る眞理上の或損失であり、彼が捧げなければならぬ個人的犠牲である。何となれば、彼は自らの云ふべき筈のものを言ひ現はし得ないか、或は彼は自らの欲するところや、内的に彼れの確信するものなどよりも、より多くを云ふか、或はより、少なく云ふかのいづれかであるが故である。従つて私の考へに依ると、説教は一般に、あらゆる注意を以て取り扱はれなければならざる危険なる職業に屬するのである。

前の種類（即ち云ひ現はし得ざる方）の明瞭にして、且つ感動せしむる例は、千八百八十三年に出た「パレスティナに於ける考察」である。この書は、カルトツ(Charlam, Khartam) 埃及スダンの市名。—譯者註で戦死したチャールレス・ゴルドン(Charles Gordon) 英國の將軍。

支那に來て長髮賊の亂を鎮定し、後スダンの總督となつたが、一八八三年、カルトゥムにて戦死した。一八三三年生。一譯者註）の著書として、われらが有する唯一の述作である。

〔註〕これは甚だ不器用な本であるが、然し個々の閃めきに充ちてゐる。翻譯され、且つ良き註釋がつけられねばなるまい。一原著者註

彼は恐らく現代の基督教者中最良の者であらう。勿論それは、彼等が世に知られて居る限りに於てであり、またかゝる人々が世に知られることは、たゞ甚しく除外例的の事ではあるが——

（世に知られざる澤山のすぐれた基督教者があるかも知れず、寧ろ知られる方が甚しく除外例的なことであるがの義。一譯者註）

新教の方の甚しく單純であるが、然したしかに眞正なる聖者の一つの別な例は、ベルン近くのトフエン（Toben）で千七百七十八年に物故した靴工ヨハネス・ポイムレル（Johannes Brämmer）の甚だ短かい傳である。この人の生涯は、本來的にはたゞ内的生涯だけであつたが、その傳記は當時バアゼルのルカス・レグラント（Lucas Ragland）によつて出版された。これは近代のものでかゝる内的生涯について存在する書物中、最も

簡短なものである。

神の恩寵を説く宗教著述家たちの中では、その例外に入るものは、常に稀れである。

〔註〕多数のものは、——今日では少くとも——最上の場合に於て、以賽亞書第五十八章十二節の意味に於ける部分的なる「道路改修者」に過ぎない。これらの人々の後に、より大規模の「場所つくりの人」が初めて續くであらう。一原著者註

而してまたこれらの人々からは、だれた瞬間に於ける一つの刺戟、力弱き瞬間に於ける或激勵より以上の何物をも決して期待してはならぬ。その他では、各人が、自己自身で搜索し發見するように指令されて居る。且各人は、一面に於て通常の世界觀の魅力から免れた場合、他面に於て同様に危険なる人間奴隸の境地に陥つてはならぬ。同様に彼は多くの苦難の裡に、或は彼岸に於ける單なる出來得る文け急速な「救はれ」の裡に、生の課題を求めてはならぬ。まことの内的生活は、差當つてのところ、信仰の力によりての行動と勝利と克服とを意味し、又この世に於ては、

〔極星〕のみ」と言ふやうな事が起るかである。

この事はまた同様に間違つた結論に導く。何となれば全く一切の疑ひなしに、基督教それ自身は強度に神秘的な側面を有し、決して全部的に通常の理性原則によつて理解し得らるものではなく、各人に對して造作なく説明の出来るものでもないからである。

〔註〕 神祕説は、心を神に沈落する事によつて、見えざる事物について直接的・個人的なる確信の可能なことを主張する。而してこの事に關しては、疑ひもなく正しいのである。然し、神祕説がかくして甚だ容易に、空想の支配へ、而して全く特別に神の汎神論的理解へと、人を導きやすく、且つ事實既にこの説の信奉者の多くのものを、そこへ導いたのは、同様に確かである。福音書それ自身は、——特にこのうちにあらはれたる基督の言葉は、——健全なるものと不健全なるものとの間の境界線を、極めて明白に示して居る。人はこれ以外に一步も出てはならない。まことの神祕説は、決して魂の神經過敏的な・ヒステリ的な・さもなければ不自然な気分ではない。それは山嶺から湧き出づる・いつも新鮮なる泉水の如く、この卑濕にして水淀める世界へ流れ込み、正直なる心情を高揚せしむる・純潔なる、異なる而して全然自然的なものである。これは世界を益する。そしてわれらは再び、現代に於てこれを持たなければならぬ。——原著者註

この事を自己のために要望した人は、漸次に基督教から逸れて、或他の道へと赴くものである。

特にわれらの人間的資性と使命と、及び神とが本當に信せらるゝ限り、此見えざる神とわれらの關係、並びに神との必然的な内的交通は、説明し得ざるもの、即ち神秘的な或ものである。そして人間の生涯の・及び人間の惱みの歴史には、否基督の言葉と行爲とにすら、——普通の常識や、之にのみ基づく教養が、たとへ迷信的とまで目さずとも、いつも妙だと思ふであらうやうな部分がある。然し基督教は、一切の善と惡との完全なる認識の樹の果實を食ふ事が、一般に人間の務めでは決してない事、宗教上の事柄に於ては、まづ第一に、何が正しき生活と行爲とに對して必要であるかを學ぶだけで、人間には充分である事を、指示すべく疲れないのである。

〔註〕 (一) 馬可傳第五章九節—十三節、約翰傳第十六章十二節參照。之に就いてルテルは羅馬書(新約)

中)への彼れの序言に於て云ふ。「汝がまだ乳兒であるなら、葡萄酒を飲まぬやうに注意せよ。いづれの教も、その程度・時及び年齢を持つて居る」と。その特殊なる信奉者たちによつて屢全く譯のわからぬやうに敘述されたる神秘的人生觀の骨子は、次の三つの眞理のうちに存する。そしてこのものの深い理由は、各人が既にさうする力が生じたなら、自分自身で經驗することが出来るものである。

(一) 人間は、自分が眞個に所有する唯一のもの、即ち彼れの意志を、神に委ねてしまはない。これは、充分なる内的安寧に達するものではない。

(二) われらを自然的に支配し且つ充たして居り、夫故に遠ざけられねばならざる自愛の念は、人間の同意を以て、神によりてのみ遠ざけられ得るものである。

(三) 神への愛は、最後には、いづれの憤みをも取り除く、之をもつと、精確に云はうとするなら、これ(憤み)に對して人を不感受的ならしめ、しかも此愛がより、強度に存在すればするほど、より高度に不感受的ならしめ、最後にはたしかに一切の憤みに對する絶對的支配力が、全的に人間の力のうちに存し得るに至るのである。

この三箇の命題は、ひつくり返へすことの出来ない一連の順序をつくつて居ること、第一の命題には既に或神秘的なものが關してある事は、この事柄に對して自らのうちに理解を得ようと試みたすべての人々が、確認するであらう。これは然し本講演の範圍を全然逸脱して居る。

〔註〕(一) 或の「鬼も角氣高い」狂信者たちの著書は然し、いづれの狂信も傳染性を有するが故に、一甚だ大なる注意を以て讀まれなければならないのであるが、之に屬するものは特に次の如き人々である。―無名の著者によつて千四百九十七年に出版され、千五百十六年になつて初めてルテルによつて出版されて、それ以後には屢新版されたる「孫逸神學」、千五百七十五年ゲルリツの附近に生れ、千六百二

十四年に死んだ所謂ゲルリツの靴屋ヤコブ・ペーメ(出)の著書、特に彼の最初の出版物たる「アウローラ一名昇り行、光」(一六一二)。千六百八十八年ストックホルムに生れ、千七百十二年倫敦で死んだ・ルテル派の信者にして、彼自ら之を「新教會」と名づけ、すべての他の教會は、このうちに解消すべく定められてあるとなした一宗派の創始者なる瑞典の鐵山官エマヌエル・フオン・スウェーデンボルク(出)が、彼が神的啓示なりと考へたものは、物理學的學說と表徴的學說との一つの綜合である。―彼の著書のうちで、一番讀むべき價値のあるものは「眞基督教一名新教會神學」である。―(以下博學なる原著者は、十七世紀から十九世紀の初めにかけてのこの傾向に屬するあまたの人物を擧げて居るが、われらにはあまりに耳遠く、之を列擧しても得るところ殆んどなしと信するが故に略す。―譯者)―宗派的色彩なき全く新しい神秘家のうちでは、千八百六十四年に物故したグラーツの音樂教師ヤコブ・ロルペル(Jacob Lorber)である。彼は若干のこぢないが、然し疑もなく、心からなる神秘説に滿されたる多數の著述を貽した。比較的著名なる神秘家のうちで、最も若いこの人が口授して筆記せしめた最後の命題に曰ふ。「何人も最早眞理を求めないであらうならば、この地上に現存する一切のものは、一種の壞敗腐朽に移つて行く」と。亞米利加では、當時メーリ・ベーカー・エディ(Mary Baker Eddy, 1821-1908)と云ふ一夫人が、所謂「クリスチアン・サイエンス」といふ原理による基督教的治療法(譯者)を以て勢力を得た。然し亞米利加の精神方向はより多く、直接に實際的なる事を念頭に置いて居る。こゝではそれは、原始基督教的の疾病治療の復活であり、これを人々は教へ得と信するのである。それ自身に於ては、その他の點で、多くの健全さを有する亞米利加の宗教文獻には、孫逸神學主義の本質を構成する深さと孤立化とが欠けて居る。外的手段と即時的大衆効果への狙ひが、前景に立つて居る

のである。―以下若干省略。

人はすべてのこれらの著述を、教訓の爲めではなく、娛樂の爲に讀むことのないように、大に注意しなければならぬ。而していつも單なる感情と、それらのものに存するほんの半ばしか理解されて居ないものとを、眞に本質的なものを包含する孩子そのものから、取り除けなければならぬ。―原著者註

より多くを知るべく熱心に且つ正直に要望する人たちに取つては、然しそれへの道が二つ開かれて居る。その一つに謂はく「心清きものは幸なるかな、彼等は神を見るべければ也」(馬太傳第五章八節)。

心術のより大なる純潔は、―心情のより大なる墮落が、すべての單に自然的ならぬもの、日常的ならぬものに對する理解を閉鎖する如く、―超感覺的なものにする視力を擴大する。諸君にして、超感覺的なものについて、必要よりより多くの事を知るが爲、充分なる勇氣を有するならば、試みて見給へ。

他の道に謂はく、「汝の身體全く明くして、暗きところ少しもなくば、その身をれ自らが明く、而して明き電光の如くに、汝をまた照さん」(路加傳第十一章三十

六節)。

〔註〕※ 神秘説に於て、或は一般に或強調せられたる信仰心に於て、この試験に完全に堪えざる凡べてのものは、絶對に避けられねばならぬ。それは既に或邪道に入つて居るか、或は少くとも、ヤムもすればそれへと導き易いのである。―原著者註

人生の・平素は堅く閉鎖されたる領域に對する全展望を與ふる・われらの最良最深なる思想が常に持つ電光的なものは、―これは然し同様に急速に、再び闇黒或は半闇黒の裡に沈むのであるが、―このそれ自身いさゝか闇黒なる而して謎の如き言葉のうちに、甚だ良く云ひあらはされて居る。それはわれらに一つの路を示すけれど、然しそれは單に一道の電光の如くにである。

〔註〕 中世の最大の神學的著述家なるトーマス・アクヴィナスに就いては、彼が死の直前に、眞理の或神的啓示を持つたが、これに比べると、すべての彼れの著述は、内容なきものと、彼に思はれたと云ふ事が報告されて居る。全く類似せる事が、ローラン夫人 (Madame Roland 佛蘭西の才女、其サロンの有僧まれて、斷頭臺に上せらる。一七五四―一七九三―譯者註) の傳のうちにあらはれて居る。即ちかゝる事は、甚しく異なる性質の人々に於て、またいづれの時代にも起るのである。これこそわれらの生に於ける神秘的要素であつて、

われらの生が凡庸に止まつてはならないなら、この要素は缺くことの出来ないものである。―原著者註
眞理とは何であるかを、一番早く知ることが出来、また弱き人性と、その充分なる理解とを分つ境界を、その人だけ全く精確に判定し得た人(基督)の口から出た(上掲の)兩語は、そのほかのすべての點では曖昧であるにも拘らず、少くとも次の事については、全く充分なる照光を與へるものである。その一つは、叡智が宗教上の事物に於て、心術や實行力から獨立して居るものだと考へられてはならぬ事、他の一つは人間の心情の改善の途に於て、否その完全なる更改と、壓倒的なる感性の除去との途に於て、求められず、又得られざるやうなまことの神學的認識は、決して存在し得ず、又存在しないであらうといふ事である。(約翰傳第三章參照)
思ふにこれはまた『心情が神學者を作る』(Pectus facit theologum)といふ言葉の源初的な意味であらう。

かく云ふたからとて、こゝで夫の新古の宗教的著述に於て、思惟の代りをなさうとし、やゝ離れて立てる人々には、いつも基督教に關して、或間違つた概念を與へたる曖昧不明瞭な人情主義が、意味されて居る譯ではない。基督教は却つて極めて尖鋭なる思惟と、最高の精神活動とに堪ゆるものであり、否之を要求するものである。しかしこの精神活動は、最も卓越せる人々に於てすらも、一切の生の謎の解決に對しては不充分である。そして人間精神が、神的精神と、不斷の近い接觸を保ち得る位に淨化され得なければ、人々を岐路や深淵に、あまりにも近く沿うて導くことになる。蓋し神的精神は、一切の不純なるものにとつては、之を燬盡す火であり、正直な淨化を遂げつゝある凡べてのものには、活氣づけ又明る照らす火なのである。

〔註〕申命記第四章二十四節、第九章三節、ヘブル人に與ふる書第十二章二十九節、以賽亞書第三十三章十四節―原著者註

どんな事があらうとも、信仰鼓吹的な著述を読むことを、自分の主な仕事として

は、決してならぬ。なほ更らのこと、かゝるものを無秩序無順列に、多量に讀むことをしてはならない。且つまた或一冊の書物でもつて、一切の宗教的認識の頂點に到達したなどと考へてはいけない。宗教的認識の道は無限である。しかし人間の發達は—特に宗教的發達は、常に或段階的なものを持つて居る。それ故に人間はいづれの階段に到達しても、そこに來ると既に目標に達してゐると思ひ、自分自身が引續いて學ぶ代りに、他人を教える資格があると思惟する。若しさうでないなら、實際何人が、當初に於て、またその當時の洞察を以てして、夫のいつも新らしい高地と、またいつも新らしい深所とから成れる生の道を進み行くべき勇氣を持つてあらうか。

夫れだけに愈、われらは勝手氣儘に他人の發達過程に干涉し、かくして自他の進歩を危くすることのないように注意しなければならぬ。この確乎たる留保を以てわれらもまた讀者諸君にお別れをする。

✪

✪

✪

最も効果顯著なるエヴァンゲリスト(福音書)ら(の著)が、今日では書籍なる事は、

たしかである。讀者がかゝるエヴァンゲリスト(の著)に逢遭するならば、—かゝる場合は、誰れにでも、一生中には幾度かあるであらう、—之を輕々しく却けてはならぬ。「取りをして讀め」である。然し一切の讀書の目的と限界とを、夫のルテルが基督をして口にせしめた言葉と共に、熟考せられるがよい。

「私がしたこと、教へたことを、お前はなしました教ゆべきだ。

神の讚美と名譽となるように、神の國が殖さるために。

然し人間の掟おきてには、氣をつけるがよい。

これによつて、貴き實は、すたれる。

これを私はお前に最後に云ひ残す」。

—S. 101—

第二章 演說論

〔註〕次に掲ぐる論文は、もと一講演であつて、千八百八十七年の瑞西聯邦政治年鑑第二卷に掲載されたが、後になつて前掲「讀書法」と共に、一小冊子として別に出版されるに至つた。なほ原題名は「演説術の公然の秘密」と稱するものであるが、「讀書法」と調子をそろへるために、單に「演説論」と短縮したのである。——譯者註

われらは演説術といふ言葉を解して、或一定の對象に關するわれらの考へ方、または意見を、適當なる言葉によつて、他人の心中にも喚び起す能力——云はゞわれらの思想感情の流れを、他人のうちに導き入れる能力であるとする。それ故に演説術はペンと相並んで、われらがわれらの觀念に表現と普及とを與へ、われらの人格を以て、世間に働きかけ得る最も有效な手段である事になるのである。特にこの術は政治的に活動せる社會に於ては、いつも大きな實用的の重要性を有する。然しこの方面でも、演説術の助けとなるもの、及びこれが障礙となるものに關しては、その知られてあるべき程度には、なかなか知られて居ないのである。

政務に練達せる人々の側からは、成程折々、不言實行といふ標語が發せられた。然し精確に之を検討すると、これは單に一つの場當り言葉にすぎない。何となれば政治的行爲は、前以て之を説くことなくして行はれるのは、稀れな習ひであり、特に今日の如き政治方式にあつては、なほ更らさうである。否、それ以上の事がある。

一體この標語そのものうちに、矛盾が存する。何となれば、不言實行といふ行爲が後續し得るためには、不言實行といふ言葉が、まづ發せられなければならなかつたからである。されば、この言葉それ自らが、効果を充分に當て込んだ小さい演説に外ならない。故にファウストの主張するところは、また眞を得て居ない。即ち當初には決して行爲はないのである。(「ファウスト」第一部「書齋」の場で、ファウストは「初めに言と改めてある。詳しくは「ファウスト」千二百二十四) 却つて最初に、半ば意識されたる感情が行より千二百三十七行までを参照せられよ。一譯者註) あり、その次に思想が存立し、それに次いで、之を説明し發表する言葉が續かねばならず、そしてこのものから、初めて力強い行爲が生ずるといふ事が、個人並びに民族の發達に適合するのである。

こゝに後續する。主として自己の經驗に基づく議論を、われらが秘密と名づくる所以は、世上たしかに、すぐれた人物でありながら、公開の口頭陳述に對する正しい心得が實際缺けて居るか、或は自分たちは、自分では全く明瞭なる思想を、より

大なる集會に於て發表する能力がないと信じ、かゝる場合にこの思ひ込んだ缺點の壓迫の爲めに、手ひどくなやむ人々が甚だ多いからである。然しそれは公然の秘密である。何となれば、それは常識が―否多くの人々にあつては、既に無意識的・自然的なる氣輕の才が、―もたらす簡單なる規則ばかりであつて、これが只一度誰れかによつて言ひ表はされるや否や、誰れでも、これについて納得させられる底のものである。

〔註〕 その人が本當に納得させられる氣がある事を前提とする。これが理解には重要である。われらの間には、かやうな公然たる秘密のなほより、多くが存在する。例へば全社會問題は、著大なる部分まで、之に屬する。序でながら、われらはかう云ふたからとて、辨舌への生得の才能、或は進んで遺傳の才能があるといふ事に、異議を唱へるものではない。またかやうな才能は、熟慮と抑制とを必要とし、往々にして加之、より乏しい天賦のものよりも、なほ多く之を要するのである。所謂「重い舌」(例へば、舊約第四章十節に「口重く舌重」といふ。前者と對立的な天賦は、事實上また存在するのであつて、斯くの如きは、屢々遺傳的である。これの最も有名なる例は、モーゼスとデモステネスとである。これらの人々はそれにも拘らず、晩年には彼等の思想的の富の深いこと、意志の強いこと及び練習する事によつて

偉大なる雄辯家になつたのである。然しこれらの三點のうち、第一が最も大切なものであつたので、之なくんば他の二者は、殆んど役に立たなかつたであらう。―原著者註

之によつてわれらは、良き公開の陳述(演説)は、單に生得の天資ではなくて、學ばれ得べき一個の技術であり、各の技能に於ける通りに、資性が荷を軽くし或は重くするやうに共働はしても、全然天賦を欠いてゐる程ではない人にとつては、若し彼にして一旦、それに絶對的に必要な諸々の前提條件を、自ら明かにし、且つ二三の容易に避けらるべき悪習を棄てようと欲しさへするなら、よしんば、特に良い辯舌家ではなくとも、甚だ有用なる演説家になることは、たしかに可能である。

演説のいづれの種類にあつても、特にすぐれて肝心な事は、演説する人の内的確信であり、彼の話す言葉と彼自身とが、完全に内的一致をなして居ることである。

演説者が自分自身の信じて居ない・或は彼が本當には知らないけれど、たゞ恐らくこの演説の爲にのみ、一時的及び人工的に、わがものとした或事に就いて談る場合には、彼には自己の内的活氣及び同時的なる精神的確實と自由とが缺如する。しかし本質的には、これらのものが、相集まつて演説者を作り上げるのである。内的眞實、―演説者の確信―彼自身の感動、―これらのものこそ、演説のいづれの種類にあつても、印象を産み出すものであり、これに對しては、聴衆中の一番無學なものですら、あやまりなき感情を所有するものである。

〔註〕小兒らは、民衆の考へ方・感じ方に對する眞のモデルであるが、彼等兒童が既に、いつも「眞」話を聞かうとするのである。而して自分の對象に完全に心を引きつけられて居り、また之に就いて確信して居るやうに見える話し手だけが、彼等を満足させるのである。皮肉に對しては、小兒たちは幸ひに大抵は理解を持たない。―原著者註

夫故に演説者のための第一の規則は、自分が信じ或は知れる事だけを、―夫故に一切の自己の内的で不安なくして發表し得る事だけを―云ふべしといふ規則であつて内的不安はいつも他人に氣附かれるものである。

に於てツイツェローは云ふ。自分は雄辯學校に於てではなく、アカデミーの哲學學校に於て、演説家の修業をしたのであると。―原著者註

それだから、役目柄又は職業上、公開的に演説をする必要のあるものは別として、かゝる必要な人々、自分は周圍に對して或種の價值を有する何物かを語るべく持てりといふ確信に基づく公開演説への内的衝動を感ずることなき人は、一般にかゝることをしないやうに氣を附けよ。かやうな場合に演説することは、彼を進歩させるよりも、却つて遙かに内的にそこなふであらう。

〔註〕 演説することと話すこととの間には、大なる區別がある。佛蘭西人は之に對して羨望すべきやうに簡短に鑄造されたる言葉を持つ。曰はく、始終話すけれど、決して或事を述ぶることなき人々がある。―原著者註

然しこの内的要求を持つ人は、―この要求には屢々外的要求が後續するものである。―演説者に必要な事項のうち主要なるものを所有する。彼はこの上にはたゞ第一に若干の熟考を、次には自己を完全に仕上げるために、練習を要するだけであ

る。「宿命的に豫定されたる」かやうな演説者を相手にして、われらは、話を進めて行かう。

出發點は、「自然の天性が改善を必要とする場合には、之を改善せよ。夫故に演説によつて、汝がそれでない或もの(柄にないもの)であるやうに見られたがるな」である。

〔註〕 各の雄辯家の裡には、二物即ち一人の思想家と一人の俳優とが存在すると云ふ言(ヴィクトル・ユゴー)は、之を發言した人、及びそれと同類項的な人たちにとつてのみ眞である。―原著者註

個性的に談れ、或他の人の模倣を決してなすことなく、いつも自己自身の人格を最も充分に表現して談るがよい。

〔註〕 生れながら若干無味乾燥なる素質の理智的人物が、突然激越悲愴なる調子で話し初めるより、もつと間違つた事はない。前世の或神祕家は云ふ。演説者が美しく話さうと執心する場合には、聴者は美しい演説を聞いたと云ふ印象以外に、何等の印象をも受けないものである。―原著者註

またその他一切の作爲的な事は避けられねばならぬ。例へば、「私が述べよう」と

するつ、まら、ない事』と云つたやうな語句、或は結末に於て、『私の演説を忍耐と寛容とを以て聽いて頂いたことに對する深甚の感謝』の確言などに於ける過度の謙遜（これは一般人生に於ても、通常内的反對を洩示するものである）、または何人とも本當に眞面目には取らざる・かゝる種類の屢あらはれて來る・眞ならざる言辭は、避けられねばならぬものである。

〔註〕千八百九年ベルン大學の大學就任演説に於ける次の如き言葉を以てした冒頭は、之に對する典型的な例を包有するものである。『私が眞個にあまりにも大きい・且つ敢えて當らざる信任によつて、大學の副總長に招聘せられ、最初の魔術的なる驚愕から辛うじて若干精神を取り戻し、かく全く新らしい・また全く豫期せざる・而していかなる點に於ても、私及び私の力以上なる地位に立つて願望し始めた時、暫らくの間私の勇氣が沮喪せる事、及び私自身の氣づかはしい感情に對して、意志の全力をさし向けなければならぬことを確言する必要が、一體あるでせうか？』—原著者註

若干の演説者の特別な奇癖は、事實さうではないのに、無準備だと見られたがる事である。準備があるといふ事は、—後に述べるであらうやうに—常に好都合ではないまでも、何等の耻辱ではない。だから何が故に、この事について聽衆を欺かうとするのであらうか。

〔註〕かやうな演説者は、恐らく通常『私は準備してゐないのであるが』と云ふやうな言葉を以て始める。ところがこれは、ほとんど常に本當ではないのである。同様に不快なる印象を與へるのは、帽子のなかに入れた原稿で、これは演説者が、—例へば葬式演説に於てであるが、—折々見るけれど、實は見ない筈のものである。イランツ（瑞西の市名）で或州知事が嘗つてなしたやうに振舞ふのは、むしろ全く天眞的である。この人は最初、彼れの當選を最大の驚きを以て受け取り、當選後には就任演説がなされる事になつてゐる、そしてこの名譽を彼は夢想だにしなかつたと最高の斷言を以て聲明したが、然し到頭同市民たちの激しい強要に従つて、自分の就任演説の原稿をポケットから引き出して、之を讀み上げたのであつた。—原著者註

あまたの人々は、生れながら機智的ではないのに、特に機智に富んだ演説をしたがるといふ悪習慣を持つて居る。機智は全く神の自由な賜物で、之を持たざるものは、之を求めてはいけけない。特に獨逸の首府附近には、やるやうな方法で、之を單なる言葉のをちなどに於て求めてはならないのである。諺に云ふ如く、機智は電光である。われらはまたラブレール（ラブレール）（L'abboulaye 佛國の法律家兼文學者。八一—一八八三—譯者註）と共にちらばらと差し

來る「個々の日光」と云つてもよからうが、兎も角急速に而して輕やかにふとした瞬間に閃めき出づる思想である、之に反して、夫の教授の如く講義用のノートの縁に、「こゝで私は通常洒落を云ふ習はしだ。」と書かなければならぬ人は、むしろ洒落をやめた方がよろしい。

〔註〕 プルタータリヒ(前)の箴言集は、實は頓智集である。—原著者註

全く機智と同一範疇に屬するものは、逸話—特に自ら體驗せる逸話である。逸話はそれが凱切であるならば、云はれた事柄を、聴衆により明瞭ならしむる爲には、その事柄の證明手段としても或價值を持つ。然し一個の演説が、かゝる話からのみ成立つて居るなら、それはやゝもすれば、眞面目さが少ないと云ふ印象を貽すものである。

同様に、口頭の陳述には、過度な學者的裝置は適當しない。讀了せる多くの書物

の名を並べ立てたり、その功績が恐らく聴衆中の大多數のものには知られてゐないやうな澤山のすぐれた著者たちを引用することより、もつと人を退屈がらせるものはないのである。

自然的と云ふ事に對する背反で、或特殊の階級に屬するものは、所謂説教口調である。これは宗教的演説家にもみ存在する習ひなる夫の一種獨特な抑揚である、同一の牧師でも既に、教理を述べる場合には、全く別な調子で談る。況んや乾杯の辭とか市民集會とかに於ておやである。演説の宗教的對象は、精神的對象とちがつた調子を要求するのであらうか？ 或は説教壇上の牧師と日常生活に於ける人間(たる彼)とを區別し、彼が「自然的」な調子を用ひてよく、或は用ひねばならぬや否や、全く別な調子で談るであらう事を認容せよといふ聴衆に對する要求が、この事のうちに存しては居ないであらうか？

もつとも、聖職者諸君に屢起るこの自然的といふ事に對する違反は、彼等だけに

限つたことではない。俗人たちによつて行はれる葬式演説に於ても、この違反が屢ある。この場合、彼等は甚しく眞實と内的確信とに背反して談るのである。かゝる單に形式的な死者への供物は、決して効果ある演説ではあり得ない。

同じやうに、かやうな事が裁判上の犯罪辯護の場合に起る。特に辯護術の初心者が屢、自分たちの訴訟依頼人の悲運についての感動と、依頼人の一家眷族の運命に關する深い憂慮——この憂慮は然し彼等が日常固有するものではない、——とをあらはし示す陪審裁判に於て、この現象が起るのである。

〔註〕 英國では、陪審員たちの石の如き心を、無理押にも征服せんとするこの種の雄辯に對して、倫敦に於ける一つのかゝる中央陪審裁判所の所在地から取つた特殊の術語的名稱を持つて居る。人々はこれをオールドベリー(Old Bailey) 倫敦の街名、こゝには千八百三十四年に建てられた中央法院と名づける。この雄辯は大なる用心を以て使用されねばならぬ。何となれば、裁判官たちの既に根ざした疑念が、之に反對するからである。——原著者註

言語に於ける眞の自然さは、平板にして他奇なきことと、態とらしい感傷的との

間の正しい中間を保たねばならぬ。何となれば、一面に於ては、演説者が聴衆に對して持たねばならざる尊敬は、單なる陳套な言葉或は平凡な話し方で、——演説者の話し方は、彼が聴衆をいかに評價するかの批判を、常に包有するものである、——聴衆に話しかけざる事を要求する故である。演説者が聴衆(の程度)をより高く考へれば考へるほど、演説は愈まさつて來る。この點では一般に、蓋し次の如くに云つてよいだらう。演説者は本來的にいつも、教養ある人間全體に向つて談ると云ふ考に没入し、しかも常に自分の苟も所有せるものうちで最上のものを與へようとするべきであらうと。

〔註〕 ショーペンハウエルは、『だらしなく響く人は、自分で自分の思想に何等の價値をも置かざる事を示してゐる』と云つて居るが、これは甚正しい。兎も角、半ば教養ある人に談るよりも、全然的に教養ある人に談る方が、より容易である。——原著者註

之に反して、他方では今世紀(十九世紀)の初頭に、またわが國では三十年代に入るまで、優勢を占めて居た夫の演説に於ける激感的表現に對する趣味は、今日全くなく

なつて仕舞つた。佛蘭西革命の雄辯家たち即ちヴェルニョー (Verriand) 佛蘭西の政治家、
 ジャンソネー (Gensonné) 佛蘭西の政治家、
 ミラボー (Mirabeau) 有名なる佛蘭西の革命家、博識宏辯を以て、一代に雄飛し、
 如き人たちも、彼等が自分たちの同時代人に喚び起した印象を、今日なら最早われ
 らに與へることは出来ないであらう。われらは一世紀だけ年を取つたのである。而
 して今ではむしろ、『彼等の雄辯は彼等の自由の如く芝居的であつた』と彼等を評
 した後年の或佛蘭西人 (の言) を是認するやうに傾いて居る。

〔註〕 なほ更のことわれらは、自分の感動的な演説を讀み上げ、且その際、序でに一本の短剣を議會の前
 に投げ出した夫のバーク (Edmund Burke) 英國の政治家、著述家。一七九一—一七九七 (譯者註) に趣味を見出さないのであらう。
 一序でながら、芝居的雄辯への反對が、當時既に—かかる事を人が豫定しないであらうやうな社會に於
 てすら、—その典型的表現を見出したことは、注目に値する。最もよく知られたる例は、サンジユス
 4 (Saint-Just) 佛蘭西の革命家、ロベスピエールの親友、最過激論者、(後) が、同僚ロベスピエール
 (Robespierre) 周知の革命家、最過激論者、一七九一—一七九七 (譯者註) に投げつけた言葉である。ロベスピエールは元來この
 芝居的種類の (演説の) 主な代表者の一人で、特に好んで彼自身の發明に係る或「最高存在」について

熱情的な調子で談ずる習ひであつたが、サンジユスは彼に向つて云つた『ロベスピエールよ、君は君の
 最高存在で私を憐まし始めるのだ』と。特に感動的な演説者は、今日ではたゞロマン民族にあらはれ
 るだけである。それは例へばカステラル (Castellar) 西班牙の政治家、著述家、又雄辯を以て、ガムベタ
 (Gambetta) 人も知る佛蘭西の政治家、輕氣球によつての巴里、クリスピ (Crispien) 伊太利の政治家。一八
 八二—一八八九 (譯者註) 伊太利の政治家。一八
 八二—一八八九 (譯者註) タヤーニ (Tadini) の如き人たちである。之に
 反して英國では今やバークのやつたやうな演説法は、全く不可能であらう。

『上品な自然さ』—われらにはかう云ひ表さうと思ふ—の要求は、惡習慣と目さるべ
 き二三の事項と關聯して居る。尤それらの惡習慣は詮するところ事物の自然な話し
 方及び見方への抵觸に過ぎないもので、熟慮によつて取り除かれ得るものではある
 が。—第一には、二つの定まつた・規則的に交代する調子で、即ち一つのより、高い
 調子と、一つのより、低い調子とを交代させて談る事であり、或は諸文章を呼吸の必
 要に従つて分ける習慣である。この習慣のために、一つの短かい文章は、甚しくゆ
 つくりと話され、他の偶然にいくらか長い文章は、ひどく急いで話されなければな

らなくなるのである。――不自然なるが故に、同様に不適當なのは、説教壇上に於けるあまりに高聲なる――どんな場合にも、地上の王者にはかゝる調子で呼びかけることを何人も敢えてしないであらうやうに高聲なる祈禱、或は反對に無味乾燥で事務的な御役目調子で行ふ祈禱である。これは一種の祈禱の讀み上げてあつて、かゝる調子では、眞面目に考へられた願が、一般に決して陳述されざる習ひである。

〔註〕この兩者は聽衆に、非眞實といふ効果を與へる。若し聽衆にして、懷疑的性質を有し、且つ同時に聖書に「いさゝか通じてゐるなら、その際自づから夫のエーリアスが『大聲をあげて呼べ』と云つたあの嘲弄的な警告を思ひ出すであらう。列王記略上第十八章二十七參照。祈禱はまさしくその内的性質上、人がそれを以て神に或事を爲す犠牲ではなくて、單に全く自然的なる發表を要求する一つの願ひである。――原著者註

折々肉體的休憩のために、演説を中斷したり、或はより屢起ることであるが、明かに中休みの價值しか持つて居ない祈禱を、又は聖書中の節文を、演説中に挿入する個々の説教師たちの習慣については、われらは全く沈黙しようと思ふ。

〔註〕かやうな中間祈禱は、事柄そのものによつて動機づけられてあることは、殆んどないであらう。之に反して（聖）歌句の引用は、恐らく適當であるかも知れない、然しやり過ぎられる事があり、習慣としては決して是認されない。――原著者註

演説に當りての身體及手の自然的な位置及び運動に就いては、色々な事が云はれるであらう。また人も知る通り、古典時代の人々は、これに大なる價值を置き、そのためにこれが、細心なる練習の對象となつたのである。

〔註〕キンテイリアヌス (Quintilianus) 羅馬の修辭學者、西班牙人、雄辯術に關する著書十二卷あり。三五―九五―譯者註) は之に就いて、なほその上に、派手で男性的なるべき服裝に就いて、長い記述を持つてゐる。右の手だけが、通常動かさるべし等々。――外的態度に於ける不自然さや或はその上に滑稽なことは、効果を甚しく減殺するであらう。そこでわれらは、或甚だ良い辯護士のことを思ひ起す。その人は熱心のあまり、必ずしも常に自分の卓のうしろに坐つては居ず、前方に進み出で、兩脚を十字に組んで、兩親指を胸衣の袖孔 (腕を通) に突込んだことによつて、特に田舎の裁判官たちの感情を害したのであつた。このすべては單に習慣に過ぎなかつたのではあるが、『氣取り』と見做されたのである。同様な例は、當時有名であつた或言語學者が上エンガディン (瑞西の地名) の州知事として行つた就任演説である。此演説で、彼は効果多き結辭に當つ

て、「諸君、一つの自由なる魂の鼓翼に機會を與へ給へ」と述べつゝ、演壇上で力強く双腕をひろげたので、下なる民衆は、この眼前に現はれたる出來事を、より多くの安心を以て眺める事が出来る爲に、用心深く左右の群に分れ避けたのであつた。この爲に、演説の効果は勿論全然失はれた。―原著者註

之に就いて存在し・また存在し得る總べての規則の簡單なる眞髓は、然しこゝでもまた單に、禮儀正しい自然さの要求である。態度や構へ方を人工的に習得することとは、容易には成功しないであらう。

之に反して不明瞭な發音は、改善され得るものであり、また矯正されなければならぬものである。この改善なり矯正なりは、良著作を音讀することによつて履行される。この點だけでは、即ち發音の明晰に關する限り、劇場が演説者のための學校と見做されてよい。然しその他の點では、大抵の俳優には、正しく落着いた自然さが缺乏してゐる。蓋しこの自然さは、或る役を演じてゐるといふ意識と、及び主として喝采をあて込んでゐる動作とは、調和し難いものである。

これらの悪習の多くは、演説者の内氣(うち)、即ち臆する事に、その共通的な起源を持つ。臆することは、あまたの人々にとつては、一般に自己開陳の最も主要なる障礙をなすのである。われらはこれが眞實の障礙であり、個々人の天性に應じて、折々は克服しがたき程度に昇り得るものなることを、否定しようとは思はぬ。しかしそれはいかなる場合でも、決して克服し難いものではない。のみならず、一番早く・一番容易に之を克服するものが、いつも最上の演説家なりとは云はれないのである。われらは反對に、もう學校に居るうちから、公開演説で完全なる平氣さを示す人々を、屢發見するが、普通の經驗によると、かゝる人々から徹底的な人物と良き演説家が出ることは稀である。何故なら、自然は一切の偉大なるもの前に汗即ち努力なるものを置いたのであつて、努力なくして獲得せるものには、眞の成熟が與へられないからである。人は若い・餘りに臆面もない演説者に對しては、冷たい態度を採るけれど、絶対に邪魔になる程でもない或種の内氣は、謙遜のしるし

として、容易に聴衆の好感を喚起することは、(人間の)本能的感情に外ならない。

〔註〕ハミルトン(Sir William Hamilton)スコットランドの哲學者、論理學形而上學の大家。一七八八—一八五一(譯者註)は、其著「議會論理・

戰術及修辭法」に於て、この故に、演説の初頭には、かやうな内氣を假裝するやうに勸めてさへ居る。

「今日では若い神學者で、その試験演説に際して、言葉の行き詰るものが、甚少ない事について、或實
際上の専門家が、言明せる遺憾は、心理學的により、正當である。」—原著者註

内氣の漸次的なる克服は、半は練習即ち當初には慣れなかつたことに慣れて來る事により、半はまた理性的なる省察によつて生ずる。かやうな省察は、人も知る通り、ソークラテスが、その最も才幹ある弟子アルキピアースに適用したものであつる。この者はソークラテスに、公開演説に對する自己の小膽を歎き懣えたのであつた。蓋し當時は、公開演説をなし得ないことと、一切の政務からの除斥とは結びついて居たのであつた。ソークラテスは、彼に彼は靴工と話すのに臆するかどうかと訊ねた。答は「否」であつた。「然し恐らく仕立屋と話すなら」—「矢張臆しませ

ん」—「或はその他の商賣人と話すなら」—「斷じてそんなことはありません」—「さあ、それちやあ君はいつも全聴衆は、かやうな個々の人たちから成つて居るものと想像するがよろしい」。ソークラテスは恐らく次の事を附け加へることが出來たであらう。「君は聴衆中の或一定の人物に言葉を向けるやうな習慣をすぐに養ふがよい」と。内氣に對する最も主要なる救助の諸方法は、かゝる省察に基づくのである。

これらの救助方法中、最も主要なるものは然し、人が自己のため、自己の利益のため、特に自分の名譽や自己顯揚のために談るのではなくて、いつも他人のため、事件そのものために談り、その上自己の身柄に對する側傍的の考へを出來得る丈け避けるといふ意向であつて、一般に世間に於けるわれらの行爲の成功は、大部分懸つてこの意向に存するのである。何となれば、内氣は最大部分まで「私はどんな風にやるであらうか? 私は甘くしやべるであらうか? 話が行詰りはしまいか?」

誰れかの感情を害しはすまいか？ みんなを満足させるであらうか？ 等々の考へから生れるものだからである。演説者を惑はすものは側傍的思想、即ち絶えざる自己考察であり、演説に於ける二重省察であつて、かやうな二重省察を以てしては何人も決して良き俳優とはなり得ない、況んや良き演説家となるに於ておやである。人間が生活に於て自分自身を全然考へなくなると、彼は直ちに自己を世間に對してより力強く、より不羈獨立的に感ずるものである。然し忌々しい虚榮心、即ち演説者に折々現はれる・感服してもらひたいといふ願望が、この場合に實際少しく邪魔をするのである。このものこそは、人間發展に對する凡べてのわれらの小さい暴君たちと敵との中で最も煩はしいものであり、従つてまたまことの雄辯の最大の敵である。

〔註〕こゝで本來なら「人間の虚榮心を脱するための最も適當なる方法に就いて」と云ふ一章を附加すべきであらうが、それは然し主題から餘りに遠くされるかも知れない。そこでこゝではトーマス・ア・ケムビス(前出)の「世間の名聲は常に惱みを伴ふ」と云つた言葉のうちに含まれたる實際的の一覽示だけが

恐らく許されてよからう。この事は、人の當初に考へるよりも、もつと眞實であり、また何等かの點で卓越せる・凡べての人々の幾千の經驗によつて確證されるのである。

演説者の臆せる事は、半ば激しい而してわれ知らずにする運動により、半ば演説の初頭に於ける・あまりに急速な・またあまりに高聲な口調によつて譯はれる。彼は自分でこの缺點を感ずる、而してこの事によつて尙更混亂されるのである。「本題を逸せざる」・平靜なる落着きと、あらゆる側傍的思想の拒否と、折々はまた演説の始まる直前になす友誼的の對話とは、この殃を避けるために、役立つものである。

—原著者註

かやうな自然的なる助けは、第一に(絶對的ではなく)中位の近視である。人が何人をも見ず・只黒い聴衆のみを眼前に見るならば、やゝもすると、理解されたといふ本當の關心も、活氣づける感情もなくして、あまりに冷淡に、又あまりに機械的に話し易い。この事については、あとで話すつもりである。之に反して甚しく多くの顔を明瞭に見るならば、これらの顔の避けがたき動きと差異とによつて、やゝもすると演説者は氣を散らされる結果となる。そこで彼が出来得る限り、人工的にでもつくり出さねばならざる・彼にとつての最も好都合な場合は、聴衆の第一

列のみをばつきりと見、心のうちで言葉をこの列に向ける事である。それ故に、屢繰返へさるる演説、例へば大學の講義などでは、人も知る通り、聴衆があまり離れて居ず、いつも同一の人々が第一の腰掛に座つてゐるなら、甚愉快である。眼はこれらの人々に慣れる。彼等は演説者に段々と親しくなる。而して彼の任務を甚たやすくする。臨時の演説では、勿論必ずしも常にかうした整備をするわけには行かない。然し英國では、例へば演説者の親友たちが、彼と共に同一演壇の上にあられ、そのために彼は同情ある聴衆を、すぐ自分の周圍に持つ事になるやうな配慮をする。―若い演説者、例へば最初の説教をなす牧師、最初の辯護演説をする法律家などにとつては、彼れの聴衆の第一列にあまりに多くの知らざる而して恐らく無關心なる人たちを見ず、なほ更のことだが、知つては居るけれども批評的な氣分の人々を見ないで、同じ題目に就いて、彼がこれと喜んで且つ平氣で談るであらうし、及び彼れの述ぶる事柄に對する關心を、豫定してよいやうな人たちを見るならば、

それは甚有利である。之に反して熟練せる演説家すらも、彼を輕蔑的に凝視などしたり、または大きな望遠鏡を用ゐて眺めたり、或は互に談話したりする人たちによつて、まごつかせられるものである。

〔註〕これは相手方の辯護士たち又は反對黨が用ゐる策略である。夫故に若い辯護士たちが、一時的に個人的呼びかけをなすやうな時より以外には、敵手の方を向いて話すことは、決して推擧するわけには行かない。―原著者註

演説者が出來得る丈け愉快に感ずるがためには、若し實行出來るならば、彼が演説する場所、及びその場所の状態が、彼に知られて居なければならぬ。比較的に大きな演説にあつては、此事は人がたとへば多くの教會に於て、音聲があまりに甚しく響き消えないために、また演説者が不必要に且つ時ならぬうちに疲れない爲に、或壁面又は柱に向つて話さなければならぬといふ理由によつてすらも既に、必要なのである。然しこの事はさて措ても、演説者に場所が全然新しく、立てゐる場所があまりに低く、またはあまりに高く、光があまりに強く、或はあまりに弱く、また

はより、低聲に或はより、高聲に話すべき必要が、演説の進行中に初めて知らなければならず、初めには理解されない場合には、彼はやゝもすると一少くとも初頭に於ては—いくらか惱まされるものである。

〔註〕 出席者の數も、どうでもよい譯ではない。比較的多數の聴衆の前では、座るよりも立つ方が話しやすい。より少數な人々の前では、この反對である。演説の調子全體は、聴衆が二十人であるか、百人であるか、五百人であるかに準じ、必然的に變るものである。—原著者註

これらは内氣に對する云はゞ消極的の救助手段である。然しなほその外に甚大なる・積極的の手段がある。それは即ち注意深い・好意的氣分を持てる聴衆である。これはいづれの演説者をも元氣づけ、當初には恐らく存在したる臆せを、彼から取り去つて呉れる。夫故に自分の仕事に當つて快く感じようと欲する演説者の主な務めは、自分の聴衆に、速かに注意深き・また好意的な氣分を起さしめる事、及びその後では聴衆に、この氣分を失はしめない事にある。

〔註〕 効果的なるべき各の演説に際しての主要事項は、聴衆の耳を持つ事であり、彼等と電氣的の接觸を

作る事である。この接觸は紛れもなく存在したり、または存在しなかつたりする。然し演説者がその代りに、自分自身にのみ拘はり、美しく話さうと努める場合には、—テルシュエーゲン(前田)が既に云へる通り、—聴衆はたゞ「美しい演説を聞いた」と云ふ印象以外に何の印象をも得ないのである。—原著者註

之に達するには、演説の題目はさて置き、その外にいろいろな手段がある。—演説は勿論、それがなされ得る場合には、與へられたる聴衆にきちんと適するやうに選ばねばならぬ。—主なる觀點は、甚だ簡單であつて「退屈になるのを避けよ」と云ふ事だけである。「どんな方法でもよいが、只退屈な方法丈けはいけない」と或有名な著述家が、文體について云つて居る。恐らくもつと高い程度に於て、この事は口頭の演述に當てまるであらう。もつと細しく述べると、人は聴衆を自己活動的になし、また此状態に保つように努めなければならぬ。聴衆は受動的に聞いてはならない、却つて絶えず、自己の思想を提げて、演説に跟從して行かねばならない。夫故に聴者は自分自身で「確かに！それはさうだ、私もまた既にさう考へた」

とか、「本當だ。あり得る事だ、私は將來のために記憶して置かう」と云ふか、或はまた反對しても構はぬ。たゞ事に參與すればよいのである。聴衆は云はゞ演説者が彈奏する樂器である。樂器が目的に適へば適ふほど、演説はより良くなり得るのである。――演説者たるものの最高の成功は、聴者の自己活動が、自己自身を忘れ、遂には彼が自己自身のより良き自我を見出したが故に、高揚せる氣分でもつて、眼を輝やかしてその場を立去る底の程度に達した時である。

〔註〕 それだからクセノフォン (Xenophon) 希臘の史家、軍人、ソクラテスの門下、『一萬人の退却』の著者。前四三〇頃―三五四―譯者註 は曰ふ、
いづれの強制をも嫌忌する人々すら、彼等を理念によつて導く演説家には満足して跟従する。これは「自己自身を強制されたと感ずる人は、自分から或財寶を奪はれたかのやうに其人を憎むけれど、説服されたと感ずる人は、人が彼に或親切を盡して呉れるかのやうに、その人を愛する」と。――原著者註

さてわれらは、いづれの演説に對しても、用意周到に準備すべきや否や、而して結局どうしたらよいか？

全く無準備の演説は、少くともそれが重大なる事物に關し、且つより長い時間を要求する場合には、通常若干の缺陷を示すものである。――かゝる演説には、特に殆んどいつも或種の論理的徹底と、個々の部分相互間に於ける、及それらが題目そのものに對する正しい關係とが缺如する。周到に準備されたる演説は之に反して、ややもすると冷却的に作用する。演説者が既に長い間、前以て所有して居り、そのうちに再び冷してしまつた感情は、聴者が之に信を措かないものである。デモステネス(出前)の演説に就いても、それらは「ラムプのにはひがする」と云はれた。況んや暗誦して來た演説の如きは、いつも流動電氣をかけられた死屍の如きものであつて、暗誦なることを全く隠蔽し、または取り繕らふ事は決して成功するものではない。音聲は頭から出て、胸から出ない。述べ方は通常あまりに急速で、各の絶中或は話の途切れすらも、直ちに演説者及聴者に氣づかほしい感じを起させる。特に然し、演説者が言葉を訂正する時には、――即ち瞬間的にその舌頭にのぼつた、恐らく

全く正しい言葉を、さうしないと話の糸筋を逸してしまふといふ恐れから、他の（既に暗記した）言葉で入れ換へる時は、演説の暗記されて来た事が、見て取られる。暗誦せる演説は正に、演説者自身にとつては、他人のものである。今話して居るのは、今日の思想と感情とを有する彼自身ではなくて、彼の口から出なければならぬものは、或他の人の・或は或書物の・または少くとも或過ぎ去つた時間の精神である。この事は演説者自身が最も多く感ずる。彼は自分自身との絶えざる分裂の裡に居るのであるが、通常この分裂を彼自身の急速なる決心によつて、より自由なる演説で克服しようと敢えてしないのである。遺憾ながら人は、音聲や電氣の如く、精神を蓄積して置くことは出来ない。さやうな器械は今のところ、まだ發明されては居ない。

「最上の準備は、問題を細心に熟考する事である。」若し誰かが「屢世人のするやうに——自分の思想を書きつける事によつて、之をより明瞭に纏める事が出来るなら、

そうしても一向構はないのである。兎に角これは、構想の繰り返しと脱線とを妨げる爲に有益である。然しいつも演説の瞬間のために、大きな餘地をあけて置かねばならず、また書いたものに奴隸的に縛りつけられてはいけない。

〔註〕 ナポレオン三世は、自分の記憶に留めて置かうとする事柄を紙片に書きつけ、それからこれを引き裂いたと云はれて居る。——十七世紀の或ジュズスイト教徒は、自分が佛蘭西語でしようと思つた演説を、前以て羅旬語で書きつけた。——ラブレ（Labrousse）——佛蘭西の法學者、（一八一）は、ルイ・フィリップ（佛）に就いて物語る。王は屢代議士たちの長い演説に無準備で答へなければならなかつたが、かゝる場合には、王は演説の要旨のところどころで指を折つて置き、かくして主要點を記憶し、且つ答へることが出来たと。

多くの人々は、彼等の演説に對して、あまりに早いうちに準備をするため、演説をするまでに、彼等自らの氣分が、別個のものとなる。救世軍の或書物には、之について特色ある比喩を載せて居る。曰はく「人は機關車がレールの上に居るときにのみ、之を熟す」と。——原著者註

本式的な暗記と同様に大なる過は、之と關聯する區分の立て方の報告である。とりわけ聖職者たちは、その説教を三部に分け、あらかじめ之を枚擧する習慣を持つて居る。かゝる時に——これは不思議にも常に事實としてあらはれる習慣であるが、

―第一部が一番長い部分であると、聴衆がその部分の済んだ後で時計を眺め、これから期待されるべき两部分に對する恐怖によつて、注意力を喪失する事は、殆んど確實である。聴衆は論理學と區分法とが、述べられたる事のうちに存することを感ぜないわけには行かない。

かくしてわれらは最後の一般的な點に到達する。曰はく「貴君はあまりに長くなく、又あまりに早期でなく、且つあまりに屢でなく、演説するがよい」と。

時間の長短に關しては、勿論演説のいろいろな種類により、同一標準では測定され難い。制限することが許されてあるなら、一時間若しくは少しそれより多くが、普通の聴衆をつからせぬために、丁度よき時程である。―然し比較的にな大きな問題をどうしたら、この時間のうちに、皮相に陥ることなくして、論ずることが出来るであらうか？ この事は、第一には人がかゝる場合、迅速且つ流暢に述べる事により、次には何事をも繰り返さざる事により、最後には前置きと結論とを出來得るが

け切り詰め、凡べての時間を主要部分に用ゐることによつて達せられる。特に前置きは殆んど常にあまりに長すぎる、この理由及びこれを避くる最良の方法は、後に示されるであらう。一般に前以て書き附けられたる演説は、いづれも一切の繰り返しと、一切の無用なる語―たとへそれが單なる形容詞であらうとも―とは、之を削除するといふ定まつた意圖を以て、今一度通讀されねばならぬ。かうすればほとんど各の演説は、聴衆がそのために失ふところなくして、四分の一丈だけは切り詰めることが出来る。

〔註〕演説の短かいことに對するまことの熱狂者は、人も知る通り、スベルタ人であつた。彼等は彼等の男の見たちを、既にこの術に於て教育した、而して長々と述べる事並びに多く談ることは、性格の鞏固さが缺乏せる印であると主張したが、これは全然理由がないわけでもない。かゝる「簡潔」(Lakonisimus 語法の簡潔にして寸鐵的)の諸例は、古代の著述家たち(の著書)から、充分に知られて居る。次の事は恐らく、最も美しい例と見做されてよからう。スベルタ人に從屬する或地方の住民たちが、飢饉のため穀物をねだるべく一人の使者を、スベルタに使

はした。この使者が彼れのやゝ長い而して感動的な演説を終つたとき、スベルタの民選行政監督官たちは、演説の初めを忘れてしまつたから、終りを理解しなかつたといふ素直な言語で彼を去らしめた。その後間もなく、第二の使者が来た。この者は空襲を携へて来て、諸人の前で之を裏返へした。而して云つた、「襲は空だ、少し入れて呉れ！」彼はそこで穀物をもらつた。然し次のやうな文句附きであつた。「彼はもつと手短に云ふことが出来たらう。襲の空なことは、皆が見た。彼が之を満たすことを望むのは、解り切つた話だ。次回には彼は廻りくどいことはせぬやうに氣を着けるがよい。」近代からの今一つの有名な簡潔の例は、スウィフト (Swift) 愛蘭土の諷刺作家、寺院監督、ガリヴァ旅 (Gulliver's Travels) の寄附金募集説教である。説教の基となる聖書の本文は、「貧者を憐むものは主に貸すものなり」である。説教に曰はく、「さて、愛する聴衆たちよ、この負債者が諸君を満足させるなら、速に諸君の金を持つて来なさい。」長演説の主因は主張事項が眞理を缺くことにある。英吉利では云ふ、「悪い理由は主張するのに長い時間を取る」と。―原著者註

一生のうちで演説し始めるのは、あまり早期でないがよい。凡べての早熟な演説家たちは、自己の成熟せる確信の缺乏を補はねばならぬために、いさゝか態とらしい・威張つた感激を示すといふ同一典型を持つてゐる。これを甚屢やる人には、この缺陷が往々にして一生涯ちう付き纏ふものである。

〔註〕 會合や式典で常習的に演説する人たちは、之に對する實例である。カーライルは直截に云ふ。「公開演説の習慣は、精神生活に有害である」と。彼れの意見に依れば、精神生活はやゝ長い間、社會に對して(之と直觸しないやうに)保護される事を要する。―若き人々は、いつも次の如き詩人(ゲーテ)の言葉を眼前に持つべきである。「幾百萬の捲毛の鬘を頂きなさい、幾エレも高い靴に足を置きなさい、それでもあなたは常に、あなたがある通りのもので止まるのです」と。體に汝は汝のある通りのもので止まるのである(本質は依然として同一)―然しこれが、此場合また慰めである。―いかなる一時的の不承認(本質を認めない)も、彼からこれを毒ふ事は出来ない。且つ世には、人が普通に思惟するよりも、ずつと多くの―少くとも沈黙せる―承認がある。公衆は多くの人々が之を考へてゐるよりも、より利口である。彼等は彼等が單に黨派的又は徒黨的意見などではなくして、彼等の眞の意見を吐露するとなると、ほとんど常に、公人を正しく批判する。たゞ體かに、多くの賞讃を與へることは、純粹にして公正な共和主義者たちにとつては、ふさはしい行爲ではない。それ故に自分の仲間に就いての自分たちの良い評價を、周到な注意を以て沈黙する人々が、共和主義者の間には非常に多い、而してこの注意を彼等は、其反對の場合には採り用ひないのである。―原著者註

最後にはあまり屢やるのである。人々がしよつちう、耳にする演説家は、上手に演説する時ですら、あきあきした感じを與へるものである。この點に於て自己に確實なる統制を課する爲には、演説すべき職務上の・或はその他の義務が存せざる場合

には、總じて之を決してやらぬといふ事が、各人にとつての有効な原則であるだらう。彼等が演説を行ふ容易さは、あらゆる機会を捉へて發言すべく、甚多くの人々を誘惑する。そしてかゝる機會は、稀ではないのである。

〔註〕特に議會の諸團體に於てさうである。そこでの間違は、人が屢々決して聽者たちの爲ばかりではなく、新聞紙のためにも演説することである。—原著者註

かゝる場合、或喝采はまた彼等に缺けることはあるまい。然し彼等が賢明であるなら、彼等は演説をしなかつた事に對して與へられる沈黙の喝采の方を選び取るであらう。特に先行せるいくつかの演説のあとで、なほ發言するのは、會の全精神及全氣分が、或變更を要する時にだけ有用であり得る。

演説は今やあらゆる種類の儀式的行爲への煩はしいが、然し避け難き添え物だと思はれ、若し或別な何ものかが、うまくこの代りに置かるるならば、人々が屢々を避けたがるものとなつてゐるけれど、上述の如くにして初めて、またもや効果あ

るものとなるであらう。

かうなつたのは、神の大なるをとして高貴なる賜物の度重なる濫用の自然的結果であり、かゝる濫用は罰せられずには居ないのである。

演説（材料）の配置に關して、まづ先きに取りわけて主要なる點は、人があまりに多くの事を云はうと思はず、殊に、或問題に就いて恐らく云はれ得る一切を悉く云はうとはしない事にある。口頭演説の第一の要求は、完全無遺漏ではなくして、云はれたる事柄が、正しくそして理解し易い事である。或事柄を餘蘊なく言ひつくすことは、力を餘蘊なく使つて疲れ果てるやうに—これは聽者側に向つてである—作用する。

〔註〕この場合ヴォルテールは曰ふ、「倦怠させる秘訣は、すべてを談ることである」と。—ルテルもまたこれに就いて名言を云つて居る。「説教者は、自らの意圖する事を、聽者が良く理解するために、自分の申し出した事を固く執つて、その意圖を果さなければならぬ。しかし自分が思ひ存ぶことを、すべて云ひたいと思ふなら、それは愚かな説教師である」と。「餘計といふ事は有害でない」との言は、夫故に演説家にとつては、正しい諒ではない。—キンティリアーヌスは、人が或重要なことを忘却したり、

過つて云ふべき場所で落したりする場合を、念入りに取扱つて居る。彼は云ふ。人はかゝるものを巧妙な方法で、一例へば次の如き言葉を用ゐて、一挿入しなければならぬ。即ち『私は危く次の事を擧げるのを忘れようとした』とか『貴君方はしかし恐らくかう御問ひになるだらう』とか云つて、自らの注意の缺乏と見えしめないやうにするのが必要であると。―原著者註

第二の點は、演説に當つて求めずして自ら生ずるやうな自然的なる配置である。従つて材料の特殊的な配り方は、前提が先行し、結論が後續しなければならぬといふ見地に從ふもので、これによつて各の後續部分は、先行部分によつて準備され、これから自然に生ずるやうになる。

〔註〕 それだから、一つの演説をいろいろな時に、且つ間を置いて書き下すことは、危険である。演説はこれによつてやゝもすると、その個々の部分の連絡に於ける上記の自然さを喪失する。―原著者註
結論を全然述べないで、之を聽者に任せるか、或はせいせい之を疑問の形にでもして唆示することは、往々にして一つの效果的な修辭形式ですらある。

〔註〕 例へば、われらが或演説で、瑞西聯邦の現今の陸軍憲法が、不充分であり、或改正を要する旨を述べようとする。そうすればわれらは、之に對する理由を、極めて得要領的に陳述し、そして結末にたゞ
『この故に諸君は、現今の制度を以てして、(わが國の)中立が有効に維持され得ると信ずるでせうか?』
といふ疑問を附加すればよい。聽者が確信せしめられたら、彼は獨りで『否』と答へ、それによつてこの制度を變更すべく、なほ力強く動かされるであらう。彼はまさしく自己活動的になされるのである。
―原著者註

より精巧なる演説形式は、聽者を烈しい反對へ焚きつける爲に、外見上、論理的必然なる結論として、或反對なる結論に到達する形式である。シエクスピアの戯曲『ジュリアス・シーザー』で、この人の死屍の側で行ふアントニウスの演説は、かやうな一例である。

敘述の明晰は、いつも只一つの思想が、挿入文なしに、一つの文章で云ひあらはされることによつて、主として高められる。

〔註〕 筆による敘述でかうすると、やゝもすれば、若干小刻みの文體が生じ易い。尤かゝる文體は目下流行はして居るが。―演説では、これは目につくことがより少ない。而して挿入文章はいつも有害である。―原著者註

然し演説の形式に關しては、最初の熟考の場合に、その形式を、もうこの時からあまり甚しく細目に立ち入つて確定し、能辯的に飾り立てようと欲しないやうな注意をするがよろしい。これは全く、修正の場合に、或は口頭演説の瞬間に委ねられて居らねばならぬ。

より重要ならざる多くの事は、演述の際、若干別な調子で云はれなければならぬ。それは寸度筆による敘述では、價值少なきものを、註として入れる習ひであると同様である。調子に於けるかやうな變化は、聴衆に對しては、つと一息つかせる効果を持つ。牧師たちは、すべてを同一の高められた調子で述べ立てるから、屢聴衆を疲勞させる。彼等はこれによつて、實際他の演説者たちよりも、よりたやすく「單調」になるのである。

一つの小さい秘術は、あまりに多くの形容詞を使用しない事である。「形容詞は名詞の敵である」と云はれて居るが、演説に於ては全く特にその通りである。

〔註〕 例へば私が、「彼は男であつた」と云ふならば、私が「彼は偉い男であつた」とか、「彼はすぐれた男であつた」とか云ふよりも、より多く効果的である。或は「一つの巨像」と云ふなら、それは「一つのどえらい巨像」と云ふよりもより以上である。その上、詞の積み重ねは有害である。例へば「それはいつかりした婦人である」と云ふ言葉は、「それは甚だしつかりした・品格のある・健氣な婦人である」といふよりも、ずつと力強い。ゲエテは特に、正當な形容詞の藝術家である。また最上級の麗々なる使用も有害である。「最上級（を使ふこと）によつて、人は愚物なる事を認識する」。不必要なる説明や、既に云はれたる事の云ひ換へは、同様に不利である。殊にわるいのは、誤れる比喻で、例へば獨逸議會の或演説者によつて用ひられたる「時代の流れの額髪を掴む」と云へる類である。かゝる例はなほ多い。われらがこゝで良き演説家たちのなした二三のかやうな例を引くなら、ラサルは彼れの陪審裁判所の演説で「殺害されたる法的基礎の復仇の女神たち」と云ひ「科學と勞働者」のなかでは「科學的認識の堂々とする樹木が、一時代から他の時代へと傳へられた」と述べて居る。又シユテファンは「われらの電話制はなほ陣痛の裡にある小兒である」。ペーベルは「丈高き駿馬に乗する一工場」。マイエルは「飲まれざる麥酒は、その職を果さなかつた」などと述べて居る（以下略—譯者）。—原著者註

フランクリンは、彼れのいつもの世才を以て、若し出來得るならば、何事も自身自身の意見としては述べないで、寧ろ「或人々は信ずる」とか「人々はまた折々かうした意見を發表した」とか述べるやうに勸めて居る。聴者はかうなると、自分自

身を直ちにこの「或人々」のうちに入算し、これによつて好感を起させられる。シヨールペン・ハウエルに従へば、諷刺は之を軽々しく現存の人物に向ける事なく、非人格な或もの、即ち制度・意見・激情等に向けなければならぬのである。非難に當つては、寧ろ實際の限界以下に止まるべきである。聴者はこの結果、それから或ものを差引く代りに、何ものかを自發的に添加する。この或ものを差引くことによつて、往々全批判が變更されるものである。

演説の自然的なる区分は、冒頭・主部及び結論である。

冒頭(即ち前置き)は、いつも簡潔で、一切の感奮なく、短くて、出来得るなら、臨機的——即ちその瞬間の事態から取つて来たもの——であらねばならぬ。

〔註〕ラブレールは加之、演説者が聴衆の爲に、特に冒頭を作つて置く事は、彼等を悦ばせるものだと言つてゐる。「會合の爲に、全く特別に作られたる冒頭よりも、これらの人々をもつと、大に喜ばせるものはない」——ツイーヴェローには自分の演説のために持合せて居る冒頭の或數があつた。彼はその時々、

これを彼れの演説に適合させたのであつた。——好意を得んとする努力を含める。かゝる豫め作られ、そして儘に履き用ひられたる冒頭は、使徒行傳第二十四章にある演説者テルツァルス(Tertullus)日本譯者「辯護士テルトロ」のそれである。——何等かの感奮は、冒頭には最も適せざるものである。何となれば聴衆に事柄がより悉しく知られて居ないよりは、彼等はなほ未だ感奮を共にし得ないからである。演説者はいつも聴衆と同一歩調を保つて行き、絶えず聴衆の心になつて考へなければならぬ。歩調が最早捕はなくなると、演説は駄目になつて仕舞ふ。——原著者註

聴者——特に恐らく法官たる聴者——は、速に要點に來ようと思はざる。長々しい冒頭に對しては、いつも不機嫌になるものである。要點に一層早く來り得るためには、準備に當つて、主部から始め、冒頭は全演説が出来上つた後になつて初めて作るか或は全く作らないのが、一般に得策である。かうすれば冒頭は大抵全く自然に生じて來る。然らざれば、これらの冒頭のために、多くの時間を失ふか、或は主想をそれが屬せざるところへ、又は只害になるばかりのところへ、過つて入れるやうな危険に陥るものである。

かやうな過誤の有名にしてまた適切なる一例は、マシヨン (Masion) 佛蘭西の宮廷説
レルモン司教一六六 (Masion) が爲したるルイ十四世の崩御に際しての弔辭演説である。この
三一七四二一譯者註 演説は、「神のみが偉大であります。わが兄弟たちよ！」といふ言葉で始まつたの
 であるが、實はこれで全演説がなされて仕舞つたのである。いまや彼には、絶えず
 この思想を解説し・反覆するより他に何事も (なすべく) 残つて居なかつた。ラプ
 レー(前) はこの例を引用し、これに就いて正しくもかう云つて居る。「冒頭が全演
 説を殺害した」と。

之に反して、かゝる語句が、結論に置かれると、その効果があらはれて来る。
 而して一般に演説の効果的なる結論は、聴者が、云はゞ聞いた事の摘要として之を
 自家のものとし、家に携え歸るやうな簡潔なる警句を、いつも持つて居なければな
 らぬ。上掲の文章が、この國王の輝かしい生涯の一次にはまた彼れの政治の缺陷や
 悲運の—敘述のあとで、云はゞ大規模に結尾をつける批判であつたなら、それがい

かなる演説的價值を持つたかを、われらは容易に想像し得るのである。

〔註〕ラプレーは、夫故にかう云つて居るが、尤である。「若し君が研究してある間に、講演の主旨を生
 々と云ひあらはせる表現を窺見するなら、それは結尾のために保管して置くがよい」と。しかし演説の
 準備中に、いづれが演説の重要な思想であり、いづれがより重要ならぬ思想であるかを、自ら解説す
 るのは、往々さう容易くはない。そして多くの讀者は、人が自分の演説の聴者となつて見るとき、初め
 てその演説のうちには、あまりにも重要なならぬ思想が詰め込まれすぎて居り、その爲に損失するところ
 のあるのに氣づいて驚愕するものだといふ事を、自己の経験から附加するであらう。これに對しては、
 同じくラプレーの (其著『通俗修辭學』で) 引用せる有効疑ひなき制御手段がある。曰はく、貴君は演
 説を、充分間に合ふうちに研究しなさい。貴君は主要點を、貴君の最初の考へ通りに書き下し、それか
 ら數日の間、全然放つて置きなさい。貴君は全くそれに—心の中ですら—手をつけなざるな。まあわれ
 われは、三日間と云ひませうか。そうすると貴君の頭のなかで、或譯ひ分けが、全く自然に行はれま
 す。貴君 (の頭) に残つたその思想こそ、より意味深いもので、これが恐らくまた聴衆にも、一層多く
 印象を與へるでせう。その他のものは、比較的に價値のない思想であります。云々—演説を覚え込む
 ことなく、或は豫め之を試験的に行つて見ることなくして、この方法を以て、各の演説の効果を検討す
 ることが出来る。豫行的にやつて見ることは、演説の清新味と源初性を、演説から奪ひ去るものであ
 る。—原著者註

さて演説の個々の種類は、勿論なほそれぞれの特種的な規則を持つ。これらはずべて、演説目的の見地から出發する。それ故に、こゝでは第一の問題はいつも、「何が演説によつて達成されねばならぬか」である。

宗教演説は、それが個人的に確信せるものとして響くときのみ、目的に適合する。之に反してこの種の演説は、その問題が、悟性のみを以てしては理解し得られないものだから、特別に平易であることや、或は全く格段に論理的であることの必要は、毫もない。餘りに多く證明しようとする説教は、殆んど常にその目的を逸する。かゝる演説は、何よりも先に個人の證明と見なさるべきもので、その主観的真理の力によつて、一若しわれらが、かう云つてよいなら、一傳染病的に作用するものである。

〔註〕一、クラウス・ハルムス (Klaus Harms) 獨逸の宗教家、合理的信仰の反對者。一七七八—一八五五(譯者註)は加之、説教語は夫の聖書の編者たちの用語がさう云はれて居る如くに、等閑でまた不正確である』べきだと主張する。『舌

談・研究及批評』(一八三三)参照。しかしこれは正しい考に對する正しからぬ表現である。『話せ。説教するな』といふ救世軍の言の方が、よりよろしい。兎も角スページン(前)が思ひ切つて云ひあらはす如く、説教壇上では、「惡魔の仕事をなし、⁽¹⁾そして信仰に反對する。このものの論據を、詳細に聴衆に知らせるやうな事をしてはならぬ。この論據に對して彼でなす。甚だ不足勝ちな反駁は、信仰の既に震撼せられたる聴衆に、働きかけるものではない。一原著者註

〔註〕二、ホワイトフィールド (Whitefield) 英國のカルヴァイン主義の宗教家、一七三九年渡米して、強力なる説教法に關するフランクリンの物語は、これに對して最良の例を提供する。彼(フラン)はこの人物が説教の終りに、孤兒院の爲の寄附金を乞ふであらうことを熟知してゐた。しかし彼は一錢といへども與へまいと固く決心して居たのである。ところが説教の進むにつれて、最初は自分の携へて居る銅貨を與へようと、ひとりで決心した。だがその次には銀貨が、最後には金貨がやつて來たのである。生れながら彼と同様に冷静な心の他の一人は、用心深くも一錢をも携帶して來なかつたのであるが、今や然し説教者の言に魅了されて、彼れの隣席者に借金を乞ふた。然しこの人は、一ヤンキー群中自己自身を全く支配して居た唯一人のものであつたらうが、一次の如き言葉でもつて之を拒絶した。自分には、この瞬間には、誰れも彼れもが全く正氣ではないかのやうに思はれると。一原著者註

疑もなく、使徒たちのうち、たゞの一人でも、今日の意味に於ける良き「説教者」ではなかつた。使徒パウルが雅典人になした演説は、明かに除外例的に、研究して

なしたものであり、哲學的の色合を帯びて居たが、それは彼等に僅かの印象しか與へなかつた事を、われらははつきりと想像し得るのである。「われらはいつか復また君に聞かう」とこれらの洗練され・甘やかされた人々の言ふのを、われらは甚明瞭に聞くのである(この一節に就いては、使徒行傳第十七章三十二節を参照せられよ。一譯者註)。これは畢竟かやうな事なら、われわれはもう屢々且つもつと、上等な程度で聞いたのだと云ふことを、丁寧に云ひ現はしたのである。

〔註〕 かくの如きは、今日でもなほ、哲學的な説教師に折々起る事である。聴衆の一部は、彼等の云ふところを理解しない。而して之を理解し得ざる人は、苟も教會へ来るなら、これとは異つた或ものを、こゝで索めるものである。一原著者註

然しこの同一使徒が、瞬間の衝動によつて談り、彼自らの最獨自的な内經驗を述べる場合には、歡樂に鈍化せるヘロデ王(ヘロデス・アクリッパ第一世の紀元四十四年歿。一譯者註)すらも、その冷き心の中で、自らの若干動かされたことを感じ「もう少して、お前は私を説き伏せ

て、基督信者にするところだつた」と告白するに至つたのである(此事については、使徒行傳第二十六章二十八節を参照せられよ、但し普通の邦譯文と本譯とは違つてゐる。一譯者註)。研究して來た演説が、自己の體驗せる眞理の證言かと云ふ兩對立は、こゝで明瞭になつて來る。すべての時代の宗教演説中の最も偉大なる例については、その聴衆に喚び起したる印象が、「彼は學者らの如くではなく、權威ある者の如くに談る」といふ特徴的な言葉を以て、われらに保存されて居る(馬太傳第七章二十九節を参照。一譯者註)のである。これのみが、聖職のすべての後繼者たちにとつて、充分なる道しるべであるだらう。

〔註〕 宗教演説のこの二種類の最も顯著なる對比を・タワレル(田)の説教集の冒頭にある・素人と僧侶とについての注目すべき物語が見せて居る。一甚だ世に知られたる近代の或説教師は、全然同じ意味で云ふ、説教者にあつては、心情の謙遜と、これから生ずる神の恵み程、甚だ肝心なものはないと。われらは確信ある説教者を持たねばならないのに、甚だ腹と單なる「説教壇演説師」で満足するのは、われら自身に對して特色的な事柄である。近代で人々が基督教を最も眞面目に考へたあの時代、即ち英吉利共和國の無比の時代に、かやうな「説教壇演説者」が、首府の或教會にのさばつて居ること、或は、當時の云ひ方に依ると、「無風趣」に神の言葉の代りに、彼自身の精神産物を宣べて居ると云ふ事が、クロム

ウエルに密告された。この多忙な人(クロム)は、次の日曜日に自分で該教會へ赴くことを、時間の損失と考へなかつた。そして事實さうであつたときに、彼は説教のまつ最中に立ち上つて、説教師に呼びかけた。「下りなさい、君、それから馬鹿を云ひたまへ！」この形式はいくらか強く「清教的」だと見られざるを得ないけれども、われらの意見によれば、この精神からして、宗教演説は批判されねばならない。

宗教演説術に關する色々な時代の識者たちがなした、注目に價する二三の意見は、次の如くである。

ルテル——私は普通の民衆に向はないで、高貴な聴衆や學識ある聴衆に向ふ人たちを甚しく嫌ふ。彼等は民衆を意としないのである。私がヴィテンベルヒで説教する場合、私は自分を最も低く引き下ろす。私は約四十名もその中に居る博士達や學士達を見ないで、若い人々や小兒や下人たち(これらが多數を作つてゐる)の群を見る、これらの人たちに私は説教する。これらの人たちに私は適應する。彼等はそれを必要とするのである。他の人たちがそれを聞かうと欲しないなら、戸が開いてゐる(いやなら勝手に出で行くがよい譯者註)。「自分たちの思ひ浮べるすべての事を云はうとする説教者たちは、市場に行つて、出會ふ

人のいづれともしやべり立てる女中らに似て居る……いつもすべてを「と」ときに云ひたがる説教師達は、それと同じ事をするのである。」——「神の言葉に勝手な意味を歸してはならぬ。われらは神の言葉を摸めてはいけない。却つてこれによつてわれらを矯めさせなければならぬ。神の言葉はわれらがそれをなし得るよりもよりよいもので、従つてわれらはこれをそのままにして置かねばならぬといふ名譽を、之に與へなければならぬ。」

アシシのフランツ(フランツェ)——「説教師たるものは、最初に黙禱して、後で自分が演説に於て述べる

ことを手に入れてしまはなければならぬ。そして彼が演説を始める前に、内心に於てまづ燃え立つて居なければいけない。すべてを説教に費し、祈禱には何ものをも費さない人々は、甚だ不賢明である。而して自己たちの勤勞を、空しき賞讃の烟霧のために賣る人々は、同様に氣の毒千萬なものである。」

キプリアーヌス(Cyprianus) 紀元二百年頃、カルタゴの名門に生れ、四十六年初めて洗禮を受け、四十八後に聖者に列せらる。——譯者註)——「神が演説の對象である場合には、信仰を説き勧めるものは、雄辯の力ではなくて眞理の力であり、これが直なる心から直なる心へと押し進むのである。」(以下三家の言は略す。——譯者)——
原著者註

科學演説は全然別なものである。そこでは客觀的眞理が、いつも主要事であり、演説に於ては、明晰・均整及び思想過程の落着いた論理が眼目である。聽者は單に教師の確信を聞き、かくして「師の言を絶對に信じ」なければならぬのみでなく、それが苟も可能なる限り、思想が生成し・發展し且つ自己自身を彼れの眼前で證明するのを見なければならぬのである。夫故にこゝでは即座的なる一切のことは無益であり、否その外觀すらも駄目である。演説者は科學的事項について讀むのであ

つて、話すのではない。夫故に科學的演説は、その性質上、講義であつて、演説ではない。聽者はこゝでは證明そのものを持ち、このすべては熟考され・研究されたもので、瞬間の産物ではないことを明白に知りたいのである。夫故に、たとへさう出来る場合ですらも、全く無原稿でかゝる講演を行ふことは、大體に於て推擧され得ない。これはやゝもすれば、暗記して來たものだといふ印象を、または或種の主觀性の印象を、或は進んで皮相的だ―これは事柄そのものを傷ける―といふ印象を、與へやすい。聽者の眼はどうしても、事前に行はれた研究の事實的證據物たる（覚え書の）紙片によつて安心させられなければならぬ。これは講演者が、細心的にそれにたよることを全然なさざる場合でも然りである。

法廷の辯護演説はまた、これとは全然ちがつて居る。この演説の目的は、判決のための要點を法官に與へ、そして出來得ることなら、相手の辯護士を困迷させるにある。後者は辯護士の勝利であつて、この勝利は彼のために控訴審の勞を省き、且

相手の依頼人を、次回の訴訟に自らの方に獲得する。こゝでは最善の準備は、―われらは寧ろ唯一的に良きをして合目的なる準備と云ひたいが、―決定的なる諸要點の正しい把握と結びついた。一件書類の詳細なる智識である。演説者には、何よりも先きに事件そのものが、事實的方面に於ても、法律的方面に於ても、完全に明瞭でなければならぬ。然し其後、法廷の辯論では、論理的列序の手がかりとしての個々の覺書にだけ依憑する全然自由な話方と、特に立證の明晰とが必要である。

〔註〕古代國民はトピック (Topic) と稱する一種獨特の立證術を知つて居た。彼等は證明を乾燥無味ではなく、興味ある方法でなすことに、特に選擇し且つあまりに大なる重複なくして行ふことに、とりわけ重きを措いた。法規は言葉通りに引用されなければならぬ。それだからあまりに廣く引き出されてはいけない。或佛蘭西の著述家は云ふ、『若し私の考へを残らず敢えて言ふならば、辯護士は概して事物の眞底に徹せず、大概のところを満足するやうに見える。彼は眞實を證明するよりも、眞實らしさを辯護することに焦慮する』と。これには一つの正しい思想が根底に横はつて居る。―原著者註

加之大抵は決定的な者一つ或は二つの主要點を、法官に全く明瞭に解らせるだけでよい。彼にしてこの點を一旦しつかりと握るなら、事件に於て、より缺漏的なる

他のすべての事は、一かやうな部分は事實いづれの訴訟事件にも存在する、一最早ほとんど彼を思ひ煩はしめない。これは或決定的な一地點に自己の軍隊を集め、これによつて勝利を得る事を主眼とする戦争に於ける用兵術と正當に比較され得る。かうすれば、その他では、いろいろな別の事の形勢がよくなかつたとしても、戦役は大抵勝つたものである。

〔註〕支那の一つの諺が、この思想を、次の如くに云ひあらはして居る。「理のある人は、その主張の十分の三を放棄してよい」と。この事をいつも眼前に保持するのは有益である。蓋し裁判官は、人間中最も非忍耐的なものに屬するが故である。たゞこの選擇に當つて、腐つた魚を手許に置き、良い魚を投げ棄てないために、良き法律的判斷力と、若干の人間知識とが、まさしく必要である。―原著者註

それだから、例へば古典時代の法廷演説家や、雄辯術に關する著述家たちの間に上等な理由がまづ先きに持ち出さるべきか、或は最後に提出さるべきかに就いて、論争が行はれたのである。キンティリアヌス(前)は、より劣れる方の理由が初めに置かれ、最上の理由は最後に出さるべきだとする。それは結尾の印象が肝心だからと云ふのである。然るにツイローは之と反對の意見である。その理由は、

法廷が初めに悪い印象を受けると、最早これから引出され得ないと云ふ事にある。

〔註〕事件に理論的興味を添へることは、一特に學者風の法官を前にするときに、かうするのは、一往々にして拙ならぬ策である。これは法官の心の裡に、演説者への信頼の心を生ぜしめ、この心が事件に裨益するからである。―原著者註

良き法廷演説家は(法廷演説家のよい)、原告の再抗辯に於て明かになる。この場合には、彼れのすべての特質、即ち法のすべての部分に亘りての―直接には當該事件に屬せざる部分に亘つても―精確なる智識、迅速なる把握、反駁の敏捷、制限された時間に當つての理由選擇に於ける聰明などが、最も多く現れ得るのである。

特殊の方法と効果とを有する特別な種類の演説は、所謂食卓演説、乾盃辭である。これらは恐らく一般に思惟されるであらうやうに、非重要なものではない。何となれば、かゝる瞬間には―所謂二つの盃の間では―心情は平素より、より開放的に

なり、精神はより自由に、且つ眞理に對してより、受納的になるからである。そして他の場合なら、さう喜んで受け容れられないであらうやうな笑談と眞面目との間の言葉が、敢えて出されるものである。

〔註〕特に英國人は、演説のこの形式を、極めて重大なる政治的發表に利用した。ガムベタ(出)もまたこのものの取扱方を心得て居た。彼れの『出張店員たちの饗宴』は、その簡易なことに依つて人を驚かす狡技の一つであつた。即ちこれら出張員の各は、事後自らの聞いた意見の熱心なる弘布者となつたのである。―同様にヴァイントホルスト(Windthorst) 獨逸政治家、法學家、生活から議員生活にうつり、ピスマルタの反教會政策の妨害者であつた。一八一二―一八九一―は良き食卓演説家であつたが、議會に於ては中位の演説家であつた。こゝでは彼はむしろ或大なる黨派の首長たる彼の地位によつて勢力を持つたのである(こゝでは彼は七十一年来羅馬法)。―原譯者註

こゝで主要な事は、演説が短く、且つ即現實的であらねばならぬ。即ち全くその瞬間から(取材して)話されなければならぬ。五分間以上を要求し、そして何等かの準備の認めらるゝ乾盃辭は、大抵效果なきものである。

かゝる小演説は、只一つの思想しか包含してはならぬといふ事が、實地的に主なる觀點である。數個の思想がこのなかで動くとなると、明瞭さ・人心を捉ふる力・解り易さなどが同時に失はれる。或は演説者自身が、自らの色々な思想過程の裡に紛糾し、そしてあまりに長くなる。―遠方から持つて來られたのではなく、甚だ即現實的な冒頭、これに結びつけられた良い明るい思想、それから聽衆の意志に對する或確乎たる指定を以て結語すること―これが食卓演説であるが、この規定に對して無限に多くの背反が行はれて居る。

議會演説は、相手方を當面の敵手として論述し、そして或一つの決定を喚び起さうとするのであるから、まづ第一に法廷演説に似て居る。只後者では、相手が同時に法官である事だけが相違である。それ故にこの場合肝要なることは、相手の確信を、或はその先入見を出來るだけ揺り動かすにある。

こゝでは特に議案及び之に伴ふ一切の事情に關する詳細なる智識が要點である。

何となれば肝心な眞の聴衆(議員のこと)の大部分は、單なる美演説に對して、甚しく感受的である譯ではなく、且彼等の幾多のものは、自己自身をより、良き演説家だと考へるだけに、愈々感受的ではなくなるのである。然し議題に關して最も精密な智識を有する人が、無定見者又はより、少く準備せる人たちを左右する力を持つ。後の人々こそ通例その多勢によりて(議案問題に)決定を與ふるものなのである。

〔註〕之に對する最も顯著な例は、獨逸議會に於ける代議士オイゲン・リヒテル(Eugen Richter)である。一瑞西聯邦議會のよき演説家たちは、ほとんど專一的に事件に關するこの精密なる智識と、彼等がそのために受ける個人的信頼とによつて、効果を收めるのである。一原著者註

且又議會演説は、各政黨が自らの決定をあらかじめ既に協定する習慣により、甚しく衰微しつゝある。この協定の結果、演説者は今や單に新聞及び故郷の選舉人たちの爲にのみ語るのであつて、大問題に於けるその意向が、既に充分に知られてゐる會議の爲などでは決してない。

より古い意味に於ける偉大なる議會演説家は、最早ほとんど居ない。かゝる演説に對する興味は、他の人々よりも論題に關してより、多く知り得る卓越せる人物が語り始める時のみ、著しくなるのである。

〔註〕さればビルスマルク公は、天成の雄辯家としては、恐らく主な敵手たちの大抵のものよりも、多くの條件を缺いて居らうけれど、然し歐洲の最もすぐれたる議會辯論家であつた。

議會雄辯術に關しては、英國の國會議員ウィリアム・ジェラード・ハミルトン(William Gerard Hamilton)英國の政治家、一七五五年に彼は下院に於て十五時間の長演説をなした。一七二九—一七九六(譯者註)が十八世紀の末頃に書いた小冊子がある。この書は半ば滑稽で半ば危険なる方法で、とりわけ議會演説者が使用する習ひなる諸技巧を枚擧して居る。今例として次のことを役立てよう。曰はく「議會演説者たちが、國家の福利はこれこれを要す」と主張する時に、之を信用してはならぬ。却つてヴォルテールが僧侶たちに就いて、「われらの輕信が彼等のすべての勢力を造るのである」と云つた言葉を、彼等に關係させて考へよ。演説のどの部分が、一番美しい部分であるべきかを前以て熟考せよ、而して討論中偶然に現はれたる或事に之を結びつけよ。初めにはためらひ且つ口詰るやうに見せかけよ、最初は思想に遅れてそのうしろに残されて居るやうな表現を用ひよ、しかして後に妥當せる言葉を捉へよ。この事はいつも特別の印象を興へ、且つ「無準備なる天才勃發」の外觀を賦與するのである。」「汝の利益を見逃がす勿れ、そしていつも長たらしい演説者の(濟んだ)あとで談れ。」一「若し汝が或事を嘲笑するなら、いつでも眞面目な方法で之を結べ! 何と

なれば嘲笑に續く眞面目は、より大なる効果を持ち、且つかくして汝は冗談屋だと思はれることがなくなるからである。」「汝の問題（の形勢）が悪くば、助けを黨に求めよ、黨（の形勢）が悪くば、助けを問題に求めよ。」「汝が汝の問題に於てたゞしくないならば、一般的な極まり文句を用ひよ、何となればかゝる文句はいつも二義的であるが故である。」「言語の最上の詐偽は、或單語の二義的な事にあるのではなく、一系列の單語の並べ方にある。」「相手によつて申し出された事を過大評價せよ、或は誇張せよ。そうすればその申し出でを眞實ならぬものとして示すのは、君には容易い事となる。」「或言葉がいろいろの意味を持つて居ないか。どうか、また異なる意味に於て或はかう。或はさうと有利に使用し得ないか。どうかを熟考せよ。しかし相手がこの策を用ひることを寛恕してはならぬ」云々。斯くの如きは、決して推擧の値ある技術ではない。―その上それらは古い。何となればツイツェロ―が既に之を知つて居り、より屢々使用したからである。―然しこの術を知る事は、反對に聴者の監視と自己防衛とに甚しく役立つものである。またこれらの術策中の多くのものは、今日いよいよ多く議會雄辯の代りをなす新聞紙へと運び移されて居る。

この議會狡猾漢（即ちハルムルトン）自身が、只一度だけしか演説しなかつたといふ事を聞くのは、讀者にとつて慰めになるであらう。彼は蓋し自分自身をすら本當には信じて居なかつたのである。これこそ、主として批評的素質を持てる人たちの短所であつて、かゝる人々がすぐれたる演説家になる事は稀れである。ハミルトンはこの書を一生の間、注意深く秘藏して居たが、その死後千八百八年になつて初めて公けにされた。そして其後には獨逸國で新版された。―原著者註

折々は戶外ですら行はれる大集合に於ける民衆（相手の）演説は、今日ではその瞬間の爲よりも、より多く新聞紙の爲になされる習である。且又吾人に傳はれる古典時代の演説―例へばペーリクレス（人も知る如く、古代希臘アテネの政治家、前四二九年頃歿。―譯者註）のその如きは、後日になつて組み立てられ、單に演説者の思考過程を再現して居るに過ぎないといふ事は、うそらしくないのである。

〔註〕ツイツェロ―に就いては、彼の今に現在する演説が、それらのなされたあとで初めて、彼自身の書きつけたものだといふ事が知られて居る。―ペーリクレスの政治家としての價値は、近代では一般に寧ろ疑はれてゐる。政治家の試金石は正に彼れの時代に後讀する時代である。―原著者註

數百人或は數千人をさへ前にして、大きな場所で行はれるこの種の演説に對し、肝心なのは、演説者それ自身が、既に云はゞ一個のプログラムであるほどに周知の人物たる事である。次に主として高聲を出すに適する良き（發聲）器官や、音聲が餘りに早く出なくなることなく、また終りの頃になつて聞き劣りのしない爲の勢力節

約法、それから表現に於ける或種の碑銘體——即ち短い所謂警語で云ひあらはされ、その最も強力なるもの(語)で結ばれる極めて即現實的な思想——などが必要である。

〔註〕 この種の演説もまた漸次に、新聞紙によりて代られて居る。夫故に新聞紙でも、「警句」の使用は非常に(その範圍を)擴大されて居る。そしてこの使用は、新聞紙から諸國民の政治生活に進入し、その生活は絶えず或警語の印象のもとに立つやうになつて居る。百年以前にこの役を勤めたる「人權」といふ言葉以來、われらは既にいばかり多くの警語を聞いたらうか？ 一切の警語は、必然的に誇張的な或ものを、それ自身に於て持つてゐる。それは唯一つの思想を、一種の電氣照光のうち置く。この照光の傍らでは、すべてのものが暗く見えない。このことによつて警句は効果を現はすのであるが、然しそれは全き眞實の犠牲に於てである。

近代に於けるかゝる群衆演説の著名なる一例は、ラマルティエヌ(佛蘭西の詩人兼政治家、温和的共和革命には假政府の首領の一人となつたが、六月暴動の際責を引いて辭職し、文筆生活を専らとした。一七九〇—一八六九—譯者註)が千八百四十八年二月二十五日に、巴里の市廳の前で、激昂せる民衆に直面してなしたものである。彼等は赤色旗が新生共和國の表徴であるべきことを要求したのであつて、當時の形勢を以てすれば、尋常一様の雄辯や論理では、とても之を妨過することが出来なかつたであらう。然るに巧みなそして響きの良い警句が、これを成就したのであつた。「市民諸君、私としては、赤色旗を決して採用しないであらう。そして私はその何故なるかを諸君に云はうと思ふ。三色旗こそは、共和國や帝國と共に、われらの自由やわれらの光榮と共に、世界一風

をなしたのであるが、赤色旗は民衆の血のなかを引ずられて、練兵場を一周したに過ぎないのである」
—(他の一例は省く)—原著者註。

何となればこの種の演説は、事實について管々しく教ゆべきでもなく、或事を辯證法的に證明すべきでもない。只單に力強い刺戟を與へ、既に聽衆の心のうちに潜在的確信として生きてゐるものを、簡潔なる言葉で云ひあらはし、これによつて彼等を動かし、或意志表示をなさしむべきである。

〔註〕 あまりに大なる通俗性は、この際避けられねばならぬ。庶民は大體に於て、彼等自身の用語で演説されるのを喜んで聞くものではない。彼等は演説者がかうすることによつて、彼等と同列まで身を引き下さうとする外観を持つ場合には、反對に之を惡意に取り易いのである。民衆會合で、敵手の演説に答へる際には、答辯者は、選擇して處置しなければならぬ。法廷に於ける辯護演説者の方法で、いづれの敵手にも、またすべての事に對して答へてはならないのである。ルテルの友人ドクトル・ヨリーナスは之に關して云ふ、「偶然街上で出會ふ凡すべての兵士に話しかけてはならぬ」と。—原著者註

一般に肺臟は、近代の大衆に對して充分の強さを最早持つては居ない。彼等自身は、彼等に向けられる絶えざる煽動によつて食傷し、かゝる演説を以て、寧ろ瞬間

的に美しく破裂し、そしてそれ以上の目的をまた持つて居ない花火の一種と見做して居る。われらは最早民主主義の青年時代には居ない。新聞紙は今や民衆演説家となつた。そしてこのものの話し方を、わがものとした。之に反して彼等のこれまでの職分は、他の定期刊行物の手に歸したのである。

演説術がわれらの國では、最早古典時代のやうに教育の重要な一部と見做されず、公けの諸學校に於て教えられないのは、遺憾とすべきであらうか？

之に就いては人々は疑惑の裡にあるかも知れない。而して人々がこの術を、自己の省察と自己の練習とによつて、わがものとなすことの出来ぬほど難しい物であると考へるならば、兎に角諸々の共和國にかゝる學校を設立しなければなるまい。さうなればわれらは、其昔アテーネや、ロードゥスに存在したやうな雄辯術演習科を、瑞西の諸大學に設けるであらう。

〔註〕 ツ。イ。ツ。エ。ロー。は人も知る通り、やゝ久しくロードゥスで雄辯術を研究した。雄辯術の特に有名な教師たちは、ゴルギアス(Corgias 希臘ソフィストの一人、雄辯術及び修辭)、プロヂイユス(Prodikos 同く希臘ソフィストの一人、哲學者、前第五世紀の人。譯者註)、テラメーネス(Theramenes アテーネの政治家、將軍、前四百四年毒殺さる。譯者註)であつた。亞米利加では、瑞西に於けるよりも、遙かに多くの價值がこれの理論的教授に置かれてゐる。原著者註

また基督教の教父聖アウグスティン(出前)は、人も知る如く、彼れの改宗以前には、ミラノに於て『雄辯學』の公けの教師であつた。

〔註〕 彼の『告白』で、彼は『自分が小兒たちの激情に役立てるために、彼等に武器を賣つた』ことについて、後になつて自らを非難して居る(第九卷、第二章)。これらの學校では到るところで、有名なる手本によつて、一定の動機についての演説が、練習のために行はれねばならなかつた。加之屢々また同一人によつて、或考へに賛成する演説、及反對する演説が試みられねばならなかつたのである。われらは然しながら、これら古代の雄辯學者の掲げた多くの規則最早使用することが出来ぬ。蓋し全然別な事情に基づくからである。例へば刑事事件に於ては、原告は激烈なる態度を取り、被告は謙遜な態度に出なければならぬとか、人は被告の小さい子供たちを呈示するとか、或は同様に露骨なる手段によつて、裁判官の同情に働きかけねばならぬとか云ふ規則がそれである。原著者註

加特力派の高等學校ケムナリジューム、特に僧院所屬學校や、イェズイト派の學校では、この人工的雄辯が、今でもなほ昔ながらの方法で、またこの古典的にしていさゝか調子の高い名稱(レトリックと云ふ名)のもとに修められてゐる。然し諸大學では、通常單に神學の別科として『説教學』(Homiletic)の名の下に現はれるに過ぎない。

〔註〕 文獻一ツ。イ。ツ。エ。ロ。の人物及閱歷については、充分に知られて居る。彼れの著作中、上に擧げるものの外、『ブルツウス』及青年時代の著『創意に就いて』が之に屬する。キンティリアーヌスは、西班牙のカラグルリスに生れ、ガルバ皇帝及び之に續く諸皇帝のもとに羅馬で生活した。ドミティアン皇帝(在位八一—九六)のもとでは、彼は皇子教育係であつた。彼れの父が既に、羅馬に於ける雄辯術の著名な教師であつた。—其他古代文學に於ては、特になほアリストテレーレスが、『雄辯學』のなかにこの對象を取扱つて居る(この書名から、この語が演説學の名稱としてわれらに傳はつて來たのである)。それから別に無名氏の著作があるが、これはヘレンニウスの著者と云ふ名を呼ばれる習ひになつて居る。—われらに傳はれる希臘人の最も有名な演説は、ペーリクレスのものであるが、それは單にツウキディデス(前田)の書中に存するだけである。その次には雅典人デモステネス及びイソクテスの演説である。共和政府の最後の時代に出て、ツイツエローと相並んで最も卓越せる雄辯家なるホルテンジウス(シ)に關しては、私の知るところでは、一つの演説も知られて居ない。それは丁度ツエロー(ザ)に就いては、

史家によつて傳へられ(或は組み立てられ)たるものより以外のいかなる演説も、知られて居ないのと同様である。古典人そのものは、演説家の研究やその聴聞に甚だ重い價值を置いた。デモステネスの如き人の演説や、或は近代の演説家に就いて云ふと、ボシエ(Moguet)の神學者・政治學者佛蘭西の神學者・政治學者一六二七—一七〇四譯者註、バーク(Burke)の英吉利の政治家兼著述家、議會演説を以て、ロアイエ・コラール佛蘭西の政治家兼著述家、議會演説を以て一七二九—一七九七譯者註、ベンヂヤミン・コンスタン(Benjamin Constant)の政治家佛蘭西の政治家一七六七—一八三〇譯者註、或はベリエ(Berryer)と云はれた。一七九〇—一八六八譯者註等の演説は、—すぐれたる雄辯家の演説を聞く事が、疑ひもなく、大なる喜びを與ふると同じく—讀むに價するものなる事を、われらは疑はない。之に反してわれらとしては、このことから或積極的なものが、學ばれるとは信じない。何となれば、他人を直接に模倣すること、精神に對して有害だからである。人間は傳承によるのではなく、占取することによりてのみ學ぶものである。傳承は要するに刺戟より以上の何物でもない。彼は何よりも先きに、彼自身で止まらねばならぬ。然しこの自我を、彼は出來得る限り改良しなければならぬ。別語を以て云へば、良演説を讀み或は聴くことは、精神の一般的完成の爲にのみ利用されるべきもので、狹義に於ける範例として役立てゝはならぬ。されば護民官クロームウエルの演説は、いくらか同質的なカーライルによつて出版されてからでも、その意味が屢々ほとんど解明しがたきものがあり、而して決して雄辯家的ではないけれど、最も有名な古典的演説の一部とは全く別種な精神と心情との教養手段である。それからキールケゴール(前出)の三つの假裝説教(これは獨逸語で得られる)は、公關雄辯のいづれの教師も決して推挙しないであらうけれど、殆んどすべての實際に行は

れたる説教よりも、より大なる價值を、未來の説教者にとりて有するものである。

雄辯に關する近代の理論的著述のなかで、特に知られてゐるものは、下の如くである。ツアハリエ『法廷雄辯入門書』(Zachariä, „Anleitung zur gerichtlichen Beredsamkeit“) — カミュー『辯護士職に關する書翰』(Camul, „Lettres sur la profession d'avocat“) — ノキヨ『雄辯術に關する對話』(Fenlon, „Dialogue sur l'éloquence“) — ショット『雄辯の理論』(Schott, „Theorie der Beredsamkeit“) — テレシオン『雄辯は一つの徳なり』(Theremin, „Die Beredsamkeit eine Tugend“) — 同人『デモステネスとマシオン、雄辯史への寄與』(Demosthenes und Massillon, „Beitrag zur Geschichte der Beredsamkeit“) — コケレル『説教に就いての實際的觀察』(Coquerel, „Observations pratiques sur la prédication“) — グリフィス『雄辯術教程』(Griffith, „Lessons on elocution“) — ハミルトン『議會的論理・職術及雄辯術』(Hamilton, „Parlamentarische Logik, Taktik, und Rhetorik“) — ラブロー『通俗雄辯法』(Laboulays, „Rhetorique populaire“) — ヴァンスタ『演述術』(Palleske, „Die Kunst des Vortrags“) — フライリビ『演説術・一つの獨逸雄辯法』(Philippi, „Die Kunst der Rede, eine deutsche Rhetorik“) — オルトロフ『法廷演説法』(Orloff, „Die gerichtliche Redekunst“) — マンハッセルは小著述中に、文藝的及口述的文體について、いろいろの適切なる説を載せて居る。演説術の甚だ輕視的評價は、カントの『判斷力批判』のうちにある。二つの近著、バセルマンの『教役者の雄辯綱要』及びカラムベルタの『演説術』はわれらは廣告で見ただけである。 — (以下あまりに細かければ略す。 — 譯者註) — 原著者註

前世紀(十八)に於て、舊ベルンの行政區域のうちに聯隊資格ある諸階級の若い人

たちの爲めに、かやうな一學校が存在した。そこでは國務が練習のために模擬的に執行され、就中また大なる政治演説が試みられた。これをわれらは今日でもなほ、千七百七十三年の集録で讀むことが出来る。然し千七百九十八年以前の市及共和国の最後の歴史のなかで、未來の政治家の爲のこの人工的訓練が、 — これらの人々は上掲の年に於ては、實際國政を執つて居たのであるが、 — 有效なる活動の痕跡を貽した事は、殆んど發見出來ないのである。この訓練は人間を眞理に對して無關心ならしめ、或確信の擬裝に於て巧妙ならしむるといふ大危険を、自らのうちに包藏して居る。舌が熟練に於て得るところのものを、性格が卒直さに於て失ふのである。

結語としてわれらが今一度、多くの規則に分裂せるものを、要目となるものに總括すべきなら、次の如き二個の定律となる。

(一) 眞の雄辯は、自らが考へて居り、且つ自らが日常その裡に生活するものに

就いて語ることに、即ちわれらの全然熟知せる思想と觀念との裡から語ることによつて、極めて自然的に生ずる。それ故に演説者の生の内容を構成する日常の觀念がすぐれて居れば居るほど、演説は愈々高尚に、愈々堂々となるものである。

(二) 之に反して、非眞實なる雄辯は、或演説の主題をなす思想を、その外では考究することなく、唯一回だけ(恐らく一週に一回だけ)〔これは牧師などの職を指すのであらう。―譯者註〕かゝる理念を集め、そしてかやうな準備なくしては到底なし得ざるべき態とらしい演説をつくり上げる場合に生ずるものである。

聴衆への演説の効果の本質的差別は、實にこゝに存する。そして十九世紀の最大の詩人が、次の如くに云ふときに、蓋しまたこれを意味するのであらう。

それを君が自分で感じて居て、それが肺腑から流れ出て、
根強い興味で引き附けなくては、

世間を擒にすることは出来ない。……

子供や猿の感心ならそれまでの事だ。

どうせ君の肺腑から出た事なくては、

人の肺腑に徹するものではない。

〔註〕これはゲーテ作「ファウスト」劇第一部第二幕「夜」の場で、ファウストが學生ヴァーグネルに云ふ言葉であつて、百八十一行から百八十四行、及び百八十九行から百九十二行に亘つて居る。これは百八十一行で、ヴァーグネルが「どうしたら言論で、世間を説き動かすことが出来ませうか？」と云ふ問に答へたもの。譯文は大體關外氏によつた。―譯者註

まことの而してすぐれたる思想の裡に生活すること、この思想を明瞭に表現すべき聊の練習、より高尚なる精神的並びに心情的教養から湧き出づる趣味と機才―これぞ演説術の公然の秘訣である。

第三章 教養論